

信濃・長原古墳群

— 積古塚の調査 —

長野市若穂長原古墳群緊急発掘調査報告

大塚初重
小林三郎
下平秀夫

1968.10

長野市教育委員会

序

わが古代の墓制中、積石塚については未解決の課題がすくなくない。とくに長野県は、積石塚古墳が集中的に分布している地域であり、学界の関心もこの点に強く向けられていた。大正15年に森本六爾氏が金鍬山古墳の研究を世に問うたのも、こうした事情のあらわれでもあろう。また積石塚および合掌形石室とよばれる墳墓形式が、伝統的なこの時代の古墳の内容とは、やや様相を異にするところから冊化人の墳墓とする考説が提出されている。ところが、実際には積石塚古墳の考古学的調査はまことに少なく、比較資料の欠如が研究の進展に大きな障害となっていた。

昭和42年2月、明治大学考古学研究室は、長野県企業局より文化財保護委員会を通じ、長野市長原古墳群調査の依頼を受けた。同時に長野県教育委員会からも調査の要請を受け、緊急を要するむねの連絡があった。研究室では論文審査・入学試験など学年末の業務が繁忙をきわめていたが、遺跡の重要性を考え、大塚初重教授と小林三郎講師ほか専攻学生15名を派遣することに決定した。同年2月下旬から中旬にかけて、酷暑と降雪に苦斗しながらも、調査をつづけ、良好な成果をあげることができたのである。

おもえば昭和26年に、故後藤守一教授が隣接する大室古墳群の調査に着手し、当時研究室助手であった大塚君が、この発掘に同行していたことも、また奇しき縁というべきかもしれない。

今回の調査は期間も限定されていたし、さらに不良な気象条件とも重なって、満足すべき調査ができなかったと思われるが、いまここに、調査後1年余で報告書が刊行される運びとなり、研究室の責任者としてまことに喜ばしい。

調査には県・市当局および地元若穂地区の各位から大変お世話になり、また調査中、現地で種々激励をいただいた藤森榮一氏らのご厚意にたいし、深甚な感謝の意を表したいと思う。

ここに本書刊行の機会を与えられた長野県考古学会にたいし、感謝の意を記し
序言とする。

昭和43年10月1日

明治大学文学部考古学研究室

教授 文学博士 杉 原 莊 介

序

昭和42年、長野市若穂町に若穂団地造成を計画したところが、この用地内に埋蔵文化財長原古墳群が存在することが判明した。そこで県教育委員会と、この保護措置について協議し五基の積石塚を用地内に永久に保存することとし、一方残りの10数基にのぼる古墳は、記録保存を計ることとして明治大学考古学教室に学術調査を依頼した。

遺跡、遺物は我が祖先の残した貴重な文化遺産で、これをできうるかぎり後世へ伝えおくるのが現在の我々の義務である。我々はずねにこのことを念頭に置いて開発工事を進めてはいるが、時には万止むをえず遺跡を記録保存せねばならぬ事態に逢着する場合がある。今回の長原古墳群もその止むを得ない事態の一つであったが、幸いにここに完全な報告書の出版されることによって責任を果すことのできたのはまことに喜ばしい。

県教育委員会および長野市教育委員会、明治大学文学部考古学教室、出版の労をとられた長野県考古学会の方々に深甚なる謝意を表する次第である。

昭和43年10月

長野県企業局長 相 沢 武 雄

例 言

1. 本書は、昭和42年2・3月、長野県企業局の要請により、明治大学考古研究室が発掘調査した長原古墳群の報告書である。
2. 執筆は下記のごとく分担したが、とくに第3章は大塚・小林が加筆している。
第I章 小林三郎
第II章 下平秀夫
第III章 原田道雄・剌上善庸・金森喬子・折尾 学・宇杉幸知・北村敏子・
西田正弘・会田 進・小田野哲憲・山口 充・板橋旺爾
第VI章 小林三郎
第V章 大塚初重
第VI章 大塚初重・下平秀夫
第VII章 大塚初重
3. 写真撮影は遺跡・遺物とも小林が担当し、一部大塚が分担した。
4. 図版および挿図の作製には、とくに、飛高憲雄・原田道雄・山口 充・桜場一寿の四君の絶大な協力をえた。ここに感謝の意を表したい。
5. 付載の積石塚合掌形石室関係主要参考文献目録は村田佳名子君が作成し、大塚が加筆した。
6. 本書の編集は大塚・小林がおこない、印刷関係の業務は、樋口昇一氏をわずらわせた。深謝の意を表したい。

本文目次

序文	明治大学教授	杉原莊介
序文	長野県企業局長	相沢武雄
例言		
第Ⅰ章	長原古墳群発掘調査の経過	小林 三郎 … 1
第Ⅱ章	長原古墳群の位置と歴史的環境	下平 秀夫 … 7
第Ⅲ章	古墳各説	… 13
第1節	第5号墳の調査	原田道雄・小野田哲憲 … 13
A	古墳の位置と外形	… 13
B	内部構造	… 14
C	遺物の出土状態	… 16
D	遺物各説	… 17
E	第5号墳の提起する問題	… 18
第2節	第6号墳の調査	原田道雄・会田 進 … 19
A	古墳の位置と外形	… 19
B	内部構造	… 20
C	遺物の出土状態	… 21
D	遺物各説	… 21
E	第6号墳の提起する問題	… 22
第3節	第7号墳の調査	山口 充 … 23
A	古墳の位置と外形	… 23
B	内部構造	… 23
C	遺物の出土状態	… 26
D	遺物各説	… 27
E	第7号墳の提起する問題	… 28
第4節	第8号墳の調査	洲上善庸・宇杉幸知 … 29
A	古墳の位置と外形	… 29
B	内部構造	… 29

目 次

	C	遺物各説	30
	D	第8号墳の提起する問題	31
第5節		第11号墳の調査	西田 正弘 31
	A	古墳の位置と外形	31
	B	内部構造	33
	C	遺物出土状態	34
	D	遺物各説	35
	E	第11号墳の提起する問題	37
第6節		第12号墳の調査	金森喬子・折尾 学 37
	A	古墳の位置と外形	37
	B	内部構造	37
	C	遺物の出土状態	39
	D	遺物各説	39
	E	第12号墳の提起する問題	40
第7節		第13号墳の調査	淵上善庸・北村敏子・宇杉幸知 41
	A	古墳の位置と外形	41
	B	内部構造	42
	C	遺物の出土状態	44
	D	遺物各説	45
	E	第13号墳の提起する問題	51
第Ⅳ章		長原古墳群の形成過程について	小林 三郎 53
第Ⅴ章		長原古墳群の性格	大塚 初重 55
第Ⅵ章		信濃の古墳文化と長原古墳群	大塚初重・下平秀夫 65
第Ⅶ章		結 語	大塚 初重 71
お わ り に			大塚 初重 75
付 載		積石塚・合掌形石室関係主要参考文献	大塚初重・村田佳名子編 77
跋			長野市長 夏 日 忠 雄

図版目次

- | | | |
|-------|-----------------|--|
| 第1図版 | 長原古墳群の遠景 | 1. 古墳群の全景（東北側より）
2. 古墳群の全景（西南側より） |
| 第2図版 | 第1号墳および第2号墳の全形 | 1. 第1号墳の全景
2. 第2号墳の全景 |
| 第3図版 | 第4号墳の全景と石室 | 1. 第4号墳の全景
2. 第4号墳の内部主体の残欠 |
| 第4図版 | 第5号墳の全景と石室 | 1. 第5号墳の全景
2. 第5号墳石室の遺存状況 |
| 第5図版 | 第5号墳の石室 | 1. 第5号墳の石室全景(1)
2. 第5号墳の石室羨道閉塞 |
| 第6図版 | 第5号墳の石室 | 1. 第5号墳の石室全景(2)
2. 第5号墳の石室全景(3) |
| 第7図版 | 第5号墳副葬品の出土状態(1) | 1. 石室内における副葬品の出土状況(1)
2. 石室内における副葬品の出土状況(2) |
| 第8図版 | 第5号墳副葬品の出土状態(2) | 1. 石室内における副葬品の出土状況(3)
2. 石室内における副葬品の出土状況(4) |
| 第9図版 | 第5号墳出土の副葬品 | 1. 金環および小玉
2. 太刀鍔金具・鉄鎌・刀子および小札 |
| 第10図版 | 第5号・第6号墳の副葬品 | 1. 第5号墳出土の土器（坏）
2. 第6号墳出土の金環および霽玉 |
| 第11図版 | 第6号墳の全景と石室 | 1. 第6号墳の全景
2. 第6号墳の石室遺存状況 |
| 第12図版 | 第7号墳の全景と石室 | 1. 第7号墳の全景
2. 第7号墳発掘前の石室の状態 |
| 第13図版 | 第7号墳の石室 | 1. 石室（玄室）の全景
2. 石室の側壁と奥壁 |
| 第14図版 | 第7号墳の石室と副葬品出土状態 | 1. 石室玄室よりみた玄門と閉塞状況
2. 石室内の副葬品の出土状況 |

目 次

- 第15図版 第7号墳の副葬品
- 1.金環・鉄鍔・鈎帯金具・小玉
 - 2.須恵器（長頸壺）
 - 3.須恵器（壺）
- 第16図版 第8号墳の全景と石室
- 1.第8号墳の全景
 - 2.石室遺存状況
- 第17図版 第11号墳の全景
- 1.第11号墳の全景
 - 2.墳頂部の状況
- 第18図版 第11号墳の石室
- 1.石室(1)
 - 2.石室(2)
- 第19図版 第11号墳出土の副葬品
- 1.切子玉・小玉・および用途不明鉄器
 - 2.須恵器（勾合付杯）
- 第20図版 第12号墳の全景
- 1.第12号墳の全景
 - 2.墳頂部の状況
- 第21図版 第12号墳の石室(1)
- 1.石室(1)
 - 2.石室(2)
- 第22図版 第12号墳の石室(2)
- 1.石室(3)
 - 2.石室構築状況
- 第23図版 第12号墳副葬品の出土状態(1)
- 1.石室内における副葬品の出土状況(1)
 - 2.石室内における副葬品の出土状況(2)
- 第24図版 第12号墳副葬品の出土状態(2)
- 1.石室内における副葬品の出土状況(3)
 - 2.石室内における副葬品の出土状況(4)
- 第25図版 第12号墳副葬品の出土状態(3)
- 1.石室内金環出土状況(1)
 - 2.石室内金環出土状況(2)
- 第26図版 第12号墳出土の副葬品
- 第27図版 第13号墳の全景
- 1.第13号墳の全景
 - 2.発掘前の石室遺存状況
- 第28図版 第13号墳の石室(1)
- 1.石室(1)
 - 2.石室(2)
- 第29図版 第13号墳の石室(2)
- 1.石室(3)（南から）
 - 2.石室(4)（北より）
- 第30図版 第13号墳副葬品出土状態(1)
- 1.石室内における副葬品出土状況(1) 玄門より奥壁をのぞむ

図 版 目 次

第31図版 第13号墳副葬品出土状態(2)

2. 石室内における副葬品出土状況(2) 奥壁付近の状況

第32図版 第13号墳の石室(3)

1. 石室内における副葬品出土状況(3) 奥壁付近の細部

2. 石室内における副葬品の出土状況(4) 奥壁付近西側壁細部

第33図版 第13号墳出土の副葬品(1)

1. 石室の構築状況(1)

2. 石室の構築状況(2)

第34図版 第13号墳出土の副葬品(2)

1. 勾玉

2. 切子玉・管玉・霰玉および小玉類

第35図版 第13号墳出土の副葬品(3)

1. 金環および銅劍

2. 刀子・鉄鏃および太刀鞘尻金具

第36図版 第14号および第16号墳全景

1. 須恵器 (瓦)

2. 土師土師器 (坏)

1. 第14号墳の全景

2. 第16号墳の現状全景

挿 図 ・ 表 目 次

第1図	長原古墳群の位置	8
第2図	長原古墳群分布図	9
第3図	第5号墳墳丘実測図	13
第4図	第5号墳石室実測図	14
第5図	第5号墳出土遺物実測図	18
第6図	第6号墳墳丘実測図	20
第7図	第6号墳石室実測図	21
第8図	第6号墳出土遺物実測図	22
第9図	第7号墳墳丘実測図	24
第10図	第7号墳石室実測図	25
第11図	第7号墳出土遺物実測図 (1)	27
第12図	第7号墳出土遺物実測図 (2)	28
第13図	第8号墳墳丘実測図	30
第14図	第8号墳石室実測図	30
第15図	第8号墳出土遺物実測図	31
第16図	第11号墳墳丘実測図	32
第17図	第11号墳石室実測図	33
第18図	第11号墳出土遺物実測図	35
第19図	第12号墳墳丘実測図	38
第20図	第12号墳石室実測図	38
第21図	第12号墳出土遺物実測図 (1)	39
第22図	第12号墳出土遺物実測図 (2)	40
第23図	第13号墳墳丘実測図	42

挿 図 目 次

第24図	第13号墳石室実測図	43
第25図	第13号墳石室内遺物配置図	44
第26図	第13号墳出土遺物実測図 (1)	46
第27図	第13号墳出土遺物実測図 (2)	46
第28図	第13号墳出土遺物実測図 (3)	50
第1表	保科川扇状地における古墳群一覧表	10
第2表	第11号墳出土切子玉計測値表	36
第3表	第13号墳出土金環計測値表	45
第4表	第13号墳出土勾玉計測値表	47
第5表	第13号墳出土霰玉・切子玉計測値表	47
第6表	第13号墳出土管玉計測値表	48
第7表	第13号墳出土丸玉計測値表	48
第8表	第13号墳出土小玉計測値表	49

第1章 長原古墳群発掘調査の経過

昭和42年1月、長野県企業局から文化財保護委員会を通じ、長野市保科にある長原古墳群の発掘調査依頼があった。依頼を受けた明治大学考古学研究室は、ただちに大塚教授を現地に派遣し、長野県企業局・同教育委員会・長野市教育委員会・同若穂文所と連絡をもち、あわせて現地における予備調査を実施した。

長原古墳群は、長野県企業局による長原住宅団地造成計画により破壊の運命にあり、緊急調査の必要があった。造成工事にかかる長原古墳群は合計18基の積石塚古墳によって形成されており、発掘調査はその中の13基について実施されることになっていた。のこる5基の積石塚古墳は、団地造成後も現状を保存する計画を進めていたので、墳形実測の調査のみをおこなった。現状保存予定の古墳のうち、第7号墳は、すでに大半崩壊していた横穴式石室の復原作業を兼ねて石室内部の清掃をおこなった。結局第1号墳・第10号墳・第14号墳・第16号墳は墳形実測のみを実施することになり、第2号墳・第3号墳・第4号墳・第5号墳・第6号墳・第8号墳・第9号墳・第11号墳・第12号墳・第13号墳・第15号墳・第17号墳・第18号墳の合計13基の古墳について発掘調査をおこなった。

調査は昭和42年2月20日に調査班の第一陣が出発して現地における地形測量を開始し、次いで第二陣調査班は2月23日に現地に到着、ただちに発掘作業にとりかかった。

調査班は明治大学考古学研究室・教授大塚初重（調査主任）・同講師小林三部・同専攻学生15名によって編成され、さらに地元関係者、米山一政氏・興津正朔氏・下平秀夫がこれに加った。

発掘調査は、昭和42年2月20日から同年3月15日までの25日間にわたっておこなわれ、合計7基の積石塚古墳の内容が明らかにされることになった。

長原古墳群を構成する18基の古墳は、先述のごとくすべて積石塚古墳であった。しかしながら、いわゆる古墳としての外形を保っていたのは、第1号墳と第7号墳の2基だけであった。この2基を除くものは堤防状の石垣のごとく見える第2号墳・第3号墳・第4号墳・第5号墳・第18号墳や、畑地耕作の際、耕土中にあった礎群を積みあげたような姿のものばかりであった。

発掘調査の結果判明したことであるが、長原古墳群中には、現在、一見積石塚古墳のごとく見えるものが、実は後世の耕作中に積み上げられたものや、元来、古墳であったものが盗掘や破壊によって変形してしまったものなどをふくんでいることがわかった。したがって、外形だけで古墳であるか否かを断定するのはきわめて困難であった。結局、すべての判断は発掘調査を経てからおこなわれるべきであった。

第1章 長原古墳群発掘調査の経過

第1号墳は、発掘調査予定外の古墳であったので、われわれは墳形測量だけをおこない、墳頂部に横穴式石室の天井石と考えられる巨石をみとめたので、第1号墳を古墳と断定したのである。墳形は現在方形を呈しているが原形であるか否かは疑問である。(第2図版・1)

第2号墳は、第1号墳の北側にあって長さ4m、短辺3mばかりの不整形方形を呈し、保科川右岸に沿って堤防状に積まれた石垣の一部に接続してあった。墳丘と思われるほぼ中央にトレンチを設定して発掘したが、内部主体を発見することができなかった。発掘区を拡張して、結局、墳丘と思われる積石を大半とり除いてみたが、古墳の内部主体と思われる遺構を発見することができなかった。しかし、積石の一部にはかなり大形の扁平な石や、大ききの揃った河原礫がみられたので、それらはかつて古墳の内部主体を構成していた石材と判断することもできた。しかし、それらの石が、石室やその他の内部主体を造っていないので、他地点にあってあった古墳が、耕作やその他の理由で壊され、二次的に現在の場所に押し込まれたものと解釈してよいと思われる。(第2図版・2)

第3号墳は、第2号墳の西方、保科川右岸の堤防状積石垣の中にある。この積石垣は、長さ約30mにわたってあったが、東端に第2号墳があり、第3号墳はほぼその中央にあった。積石垣は巾約3mばかりで、この第3号墳のある部分が最も高く、高さ約3mをはかる。第3号墳はこの積石垣の中にあると考えられていたので、われわれは、その部分にかなり幅広く2m余りのトレンチを設定して排石作業をおこなった。この積石垣の大部分は小河原礫で構成されていて、発掘の結果、第3号墳にも何ら古墳の痕跡をみとめることはできなかった。

第4号墳は、第2号墳の南方にあって、やはり不整形方形を呈する。第4号墳は外見からみると積石塚古墳として充分な規模をもっていた。墳丘中央部に巾2mのトレンチを設定して発掘することにした。墳丘頂部には、長方形を呈するやや大形の石が露出しており石室の存在が予想された。しかし、その石が遊離して存在するのを確認したのは排石作業を開始して間もなくのことであった。墳頂から1.2mばかり掘り進んだところに、長方形のやや大形の石によって構成された長方形の石囲を発見した。この石囲の中には河原礫がつまっていて、その河原礫は墳丘を構成しているものと同様であった。石囲の内部を清掃してみると、その下底面や石囲内壁には何らの施設もみられず、石囲の更に下方に石囲を構成している大形の石とほぼ同大の石材が不規則に、あたかも投げ込まれたような状態で発見されたのである。墳丘の排石作業中に内耳上器の破片を若干発見しており、第4号墳も中世のころ築造された積石であるという可能性も強くなった。いずれにしても古墳としての証拠は得られなかった。中世のころ、かつての古墳が破壊され墳墓として改造されたものと考えてもよいであろう。(第3図版・2)

第5号墳は、第2号墳・第3号墳と連続する積石垣の西端にあった。発掘調査の結果、墳丘の崩壊はあったが古墳であることが確認された。調査の結果は後に詳述してある。

第6号墳も、墳丘積石の崩壊もあってほとんど原形をとどめないが、かつて古墳であったことに相違なく、一部分ではあったが石室が残存していた。調査結果の報告も後に詳述してある。

第7号墳は、長原古墳群中のほぼ中央にあつて、規模の点では第1号墳と並んで古墳群中、最大の部に属する。すでに盗掘をうけた横穴式石室が露出していた。現状保存の意図があつたので、石室内部の清掃を試みた。

石室全体は調査しなかつたが、古墳群中最大の規模を有する横穴式石室であつた。詳細はすべて後述する。

第8号墳は、第7号墳の西南方20mばかりの所にある。墳丘積石の3分の2が切りとられていて原形をとどめない。調査の結果、大半崩壊された横穴式石室が発見された。後に詳述する。

第9号墳と第10号墳はともに現状のまま保存することが決定していたので、発掘調査はこゝなわず、墳形の略測だけ実施した。しかし、両古墳ともに積石がかなり乱れており、外形だけは整っていても古墳の可能性はきわめて小さい。

第11号墳は、第7号墳の西北側にあたる。墳丘積石がかなり崩壊されていて原形をとどめない。横穴式石室が内蔵されていたが、天井石はすべてとり除かれていた。石室床面もかなり保存状態は良好であつた。調査結果は後述する。

第12号墳は第11号墳の西側40mばかり距つたところにある。墳丘は河原石積みで不整形なもので、もとより原形ではない。墳丘中央部に横穴式石室があつた。石室内の遺物保存状態もよく原状をよくとどめていたが、羨道部の詳細はわからない。調査結果詳細は後章に述べてある。

第13号墳は、第11号墳の南側にあつた。墳丘のほとんどが破壊されており、石室も上半部がすでに取り除かれていた。しかしながら石室床面の保存状態は良好であつた。調査結果の詳細は後章に述べた。

第14号墳は現状のまま保存することになった。方形プランの墳丘を示すが積石の状態はきわめて悪く、古墳としての証は持ち得なかつた。発掘調査を試みる必要があると思われる。

(第36図版・1)

第15号墳も第14号墳と同様方錐状の墳丘を示しており、一見古墳と思われる様な状況であつた。発掘調査を試みたが、墳頂部から墳丘を切断するトレンチに、何等の遺構も発見できなかった。のみならず、墳丘を構成している河原石もほとんど小礫であり、もともと古墳のなかつた場所に、耕作の際排石のために積まれたものと考えに至つた。

第16号墳は現状保存の計画があつて発掘は実施しなかつた。一見長方形を呈する墳丘を有するが、積石の状況を細かく観察すると第14号墳、第17号墳、第18号墳ときわめて共通する現象をみせる。すなわち、小河原礫を積みあげており、墳丘の高さも1m余をはかるばかりで、墳頂部にも内部主体の遺残もみられない。発掘調査を試みないと確認をつかみえないが、おそらく後世の積石であつて、古墳、あるいは墳墓とは全く無関係なものであろう(第36図版・2)。

第17号墳は、第16号墳に隣接してあつたが、第16号墳と同様に不整形のプランを呈しており、高さも1m弱であつた。小河原礫を粗く積みあげたものであつた。墳丘の中央部を東西に切断するトレンチを設定して地山とおぼしき層まで排石、発掘を実施してみたが、古墳と断定

第1章 長原古墳群発掘調査の経過

する資料を何等得ることができなかった。第17号墳も後世の積石によるものであると判断した。付近の耕作者によれば、昭和時代の初期に耕作の際、地山にふくまれていた礎群を一ヶ所に積みあげたということであった。

第18号墳は、長原古墳群の西北端に位置していた。方形プランの墳丘を呈し、2m弱の高さを持っていたが、小河原礎を粗く積んでいる点で第14号墳・第15号墳・第16号墳・第17号墳等と共通しており、古墳とは全く関係のない積石であろうという感じをいだかせていた。耕作者の言によれば、この積石も第17号墳と同様に昭和時代に築かれた積石とのことであった。発掘調査によって確認する必要があったので、改めてトレンチを設定し、地山まで掘り下げた。その結果、何等古墳と思われる遺構を検出することができなかった。

以上のごとく長原古墳中にふくまれている積石塚古墳には、古墳ではない積石もふくまれていることが判明したのである。『全国遺跡地図(長野県)』(文化財保護委員会編)によれば、長原古墳群総数は21基となっているが、これは、われわれの発掘調査以前の数字であって、当然訂正されるべきであろう。かって発掘されたニカゴ塚古墳やその他の古墳をもふくめて、総数10基ばかりが、いわゆる長原古墳群を構成するすべての古墳であろう。しかし、地元耕作者によれば、かって古墳であったものが破壊されて原状をとどめないものが2~3基あるというから、それらをふくめても総数10~13基前後がかつての長原古墳群の数であったかもしれない。

発掘調査班の構成

発掘調査者	長野県企業局長	相沢武雄
発掘担当者(調査主任)	明治大学教授	大塚初重
発掘調査員	明治大学講師	小林三郎
〃	長野県文化財専門委員	米山一政
〃	長野県考古学会々員	興津正朗
〃	長野県考古学会々員	下平秀夫
〃	明治大学大学院学生	飛高憲雄
〃	〃	小笠原穂子
〃	明治大学学生	黒川哲朗
〃	〃	金森喬子
〃	〃	原田道雄
〃	〃	瀧上善庸
〃	〃	吉岡繁喜
〃	〃	安達新

発掘調査員	明 治 大 学 学 生	会 田 進
〃	〃	西 田 正 弘
〃	〃	折 尾 学
〃	〃	宇 杉 幸 知
〃	〃	北 村 敏 子
〃	〃	山 口 充
〃	〃	板 橋 旺 兩
〃	〃	小 田 野 哲 憲
事 務 局	長 野 市 教 育 委 員 会	高 野 彬
〃	〃	宮 崎 実
〃	〃	宮 原 博
〃	〃 若 穂 支 所	丸 山 隆 司
〃	〃 〃	綿 内 四 郎
〃	〃 〃	滝 沢 富 男

尚、これらの方々の他に若穂町公民館長峯村一海氏、若穂町保科在住前山可礼氏、若穂町綿内在住山口純一氏のご協力、ご援助をお願いした。記して深謝の意を表する。

(小林三郎)

第Ⅱ章 長原古墳群の位置と歴史的環境

長原古墳群は長野市若穂町保科にある、積石塚を中心とした古墳群である。(第1図)

若穂町は、善光寺平の東北部、千曲川の東岸部にある。近年、長野市と合併した町で、以前は上高井郡若穂町であった。

長原古墳群は、千曲川の支流の保科川の扇状地に発達しており、後方を妙徳山、塚切山、熊窪山、太郎山、奇妙山というような標高1000m台の河東山塊の山々にかこまれ、その間を菅平高原から流れ出た保科川によって、形成された扇状地の扇状部に位置している。

保科川はそのまま千曲川に流入して、善光寺平の水田地帯を形成している。古墳群からは北信五岳、善光寺平が一望のもとにとらえられる。現在、保科川扇状地は果樹園と桑園が大部分で、扇端部に近くなって水田が多くなっている。

千曲川流域の左右両岸は、善光寺平の両端に発達した山稜の尾根から山麓へ、テラス状に張り出した台地上に、1300基を超える古墳が存在するが、それぞれ古墳群を形成している。長原古墳群のある保科川扇状地に発達した古墳群は、古くから積石塚または古墳群中に合掌形石室を内部主体とするニカゴ塚古墳などの存在が知られていて、多くの研究者から注目されていた。

長原古墳群を学史的な面からみると、最初の報文は大正14年2月、石材採集の目的でニカゴ塚古墳が破壊され、矢沢頼道氏によって発表されたのがそれである¹⁾。また、このころ中野市新野にある金館山古墳が発掘され、特殊な合掌形石室の論考をおこなった森本六爾氏の報文も世に出た²⁾。これらはいずれもニカゴ塚古墳の発掘調査報告を中心とするものであった。

第二次大戦後、信濃史料刊行会、上高井郡誌編集会によって、この付近の考古学的調査がおこなわれ、保科川扇状地上の古墳群としていくつかの古墳群が判明し、この長原古墳群の様相も明らかにされてきたのであった。

善光寺平の古墳分布をみてみると、千曲川の本流に面した山麓部よりは、千曲川に注ぎ込む小河川の造り出した扇状地を中心に、海抜500m台の山麓部や台地状部分に古墳群が形成されている。

善光寺平の中央を千曲川が北流し、いくつかの支流と複雑にのびる尾根に切断される谷は、地形的にも地域的な一つの古墳文化を形成しているように思われる。かつて桐原健氏は、善光寺平における古墳の立地と地貌に注目され、ひとつの地域内における古墳群の関係を考察したことがあるが³⁾、長原古墳群の立地する保科川扇状地も善光寺平の古墳文化の上になっても積

註 1) 矢沢頼道「金館山古墳」長野県史蹟調査会報告5、大正15年

2) 森本六爾『金館山古墳の研究』大正15年

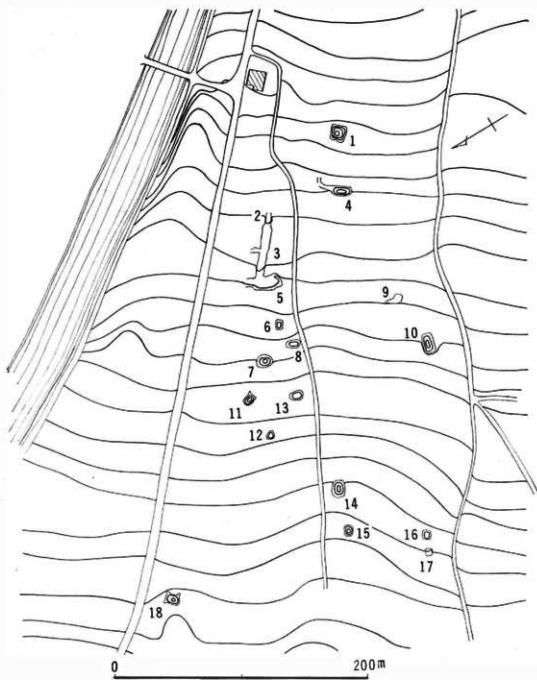
3) 桐原健「善光寺平における古墳の立地」信濃 16巻4号 昭和39年



第1図 長原古墳群の位置 (1:27000)

- | | | | |
|----------|----------|----------|----------|
| 1 長原古墳群 | 2 大黒山古墳群 | 3 十二山古墳群 | 4 穂舩山古墳群 |
| 5 和田古墳群 | 6 東山古墳群 | 7 白坂古墳群 | 8 高下古墳群 |
| 9 八幡古墳群 | 10 須登古墳群 | 11 城窪古墳群 | 12 大室古墳群 |
| 13 巖塚古墳群 | | | |

石塚また合掌形石室という特異な内部主体を有する古墳群が存在し、興味深い地域といえることができるであろう。



第2図 長原古墳群分布図（等高線は1m）(1:3000)

第Ⅱ章 長原古墳群の位置と歴史的環境

保科川のこの扇状地に分布する古墳群は、「信濃考古綜覧」によると67基でいずれも10基内外でひとつの古墳群を形成している。しかし、これらの中でも学術的発掘のなされたものはおろか、墳丘・内部主体・副葬品の判明している古墳はきわめて少なく、すでに多くの古墳は全壊してしまっていて、古墳群の全体の様相を知るうえで大きな困難と支障をきたしている。

いままでの分布調査や、わずかな記録から検討してみると、保科川扇状地の長原古墳群付近は、合計11の古墳群から形成されている様子である。(第1図・第1表)

保科川扇状地の古墳群の中で、まがりなりにも発掘調査のなされているものは、長原古墳群のニカゴ塚古墳、八幡古墳群の八幡第1号墳(塚穴古墳)のみである。また、内部主体の完全に判明しているものには、大星山古墳群中に2基、十二山古墳群中に4基、白塚古墳群中に1基、高下古墳群中に2基、城窪古墳群中に1基と合計10基にすぎない。これらを形式別にみるとニカゴ塚古墳、城窪第1号墳、十二山第1号墳は合掌形石室を内部主体とするもので、他は横穴式石室で、いわゆる両袖形石室であった。

古墳群名	数	立地	外部構造	内部構造	副葬品
長原古墳群	10以上	平地	積石塚	横穴式石室、合掌形石室1	(本文参照)
十二山古墳群	5	山腹	土石混合墳	横穴式石室4 合掌形石室1	不明
袖林山古墳群	3	山頂	土石混合墳	横穴式石室1	不明
大星山古墳群	6	山頂 麓	積石塚1、盛土墳2 土石混合墳5	横穴式石室5 不明1	不明
和田古墳群	8	平地	積石塚2、不明1 土石混合墳5	横穴式石室2 不明6	土師器、須恵器、直刀、竹、管玉、切子玉、小玉
東山古墳群	7	山頂	盛土墳7	不明	土師器
白塚古墳群	11	平地	土石混合墳10 不明1	横穴式石室4 不明7	金環、須恵器、土師器
高下古墳群	4	山頂 平地	土石混合2 盛土墳2	横穴式石室3 不明1	直刀、雲珠、辻金具、金環、銀環、勾玉、丸玉、須恵器
八幡古墳群	5	平地	土石混合墳5	横穴式石室2 不明3	直刀、金環、勾玉、管玉、小玉、須恵器
須釜古墳群	4	平地	土石混合墳4	不明	不明
城窪古墳群	2	山頂	盛土墳	合掌形石室1 不明1	勾玉、直刀、鉄鏃、銜

第1表 保科川扇状地における古墳群一覧表

副葬品の判明している古墳も少なく、前述の調査された2基以外にはなく、「信濃考古綜覧」の地名表によると、直刀・鉄鏃・玉類・土師器・須恵器といった後期古墳に通有のものである。また、現在までに馬具の出土が少なく、わずかに城窪第1号墳に樹鬘、高下第1号墳に雲珠の例をみるのみであった。

註 (4) 信濃史料刊行会『信濃考古綜覧』上巻(地名表) 昭和31年

保科川扇状地は、尾根一つ距てた奇妙山山麓に発達した大室古墳群⁽⁵⁾とともに、積石塚古墳の多い地域である。善光寺平の古墳には、積石塚古墳とその一類と考えられているいわゆる土石混合墳と呼ばれる一群があり、その区別は外見からだけではかなり困難である。後世の開拓によって畑地からの石を積みあげ、積石塚古墳と解されているものもあり、とくに扇状地上の積石塚古墳は、古墳とそうでないものとの区別が困難であって、信濃における積石塚古墳の研究に大きな混乱を起す要因となっている。

積石塚古墳と考えられる一群の古墳は、善光寺平の古墳の約60%の多くにわたり、またその分布も善光寺平南側にほとんどが分布している。善光寺平の南、冠着山を越えた東筑摩郡の安坂将軍塚古墳群⁽⁶⁾、同郡本郷村の古墳群⁽⁷⁾、松本市岡田、里山辺、諏訪地方にも分布を示している。

積石塚古墳の立地条件を検討してみると、扇状地上には多く積石塚古墳の分布がみられ、山麓や尾根上には盛土古墳がみられる。保科川扇状地における様子もこれに合致しており、和田・白塚・八幡・須釜・長原・大星山の各古墳群は、積石塚古墳が主体をなしている。このような傾向は大室古墳群においてもみられるところである。

保科川扇状地を囲む山麓周辺には、全体的に縄文式土器の散布がみられる。また、低湿地、扇状地上にはわずかながら弥生式土器の分布をみる。古墳時代の遺物は上和田・在家・須釜地区に散布をみるのみで、この地域の調査のおくれを感ずるのである。この他に、古墳時代前期の祭祀遺跡が片山地区で発見されており、大場磐雄博士によれば「一種の祭祀遺跡とすべきではあるまいかと思われる⁽⁸⁾」ものである。また、川田地区には条里制遺構がのこされており、千曲川の氾濫地域に発達した文化をうかがい知ることができる。

(下平秀夫)

註 (5) 大塚初重「大室古墳群」古代学研究 30号 昭和37年
 (6) 大場磐雄他「長野県東筑摩郡坂井村安坂積石塚の調査」信濃 16巻4・6号 昭和39年
 (7) 大場磐雄他「信濃浅間古墳」昭和41年
 (8) 信濃史料刊行会「信濃考古綜覧」上巻(地名表) 昭和31年
 (9) 註5に同じ
 (10) 「信濃考古綜覧」下巻 昭和31年

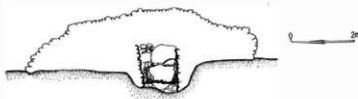
第Ⅲ章 古 墳 各 説

第1節 第5号墳の調査

A 古墳の位置と外形 (第4図版, 第3図)

本古墳は長原古墳群の中では東に位置し、14mの等高線上にある。北西約25mの所に第6号墳が、南東約33mの所に第3号墳が存在する。

調査開始前の墳丘は、北東方向にのびる高さ2.1mほどの石垣の一部が塚状にふくらんでいた



第3図 長原第5号墳墳丘実測図 (1:100)

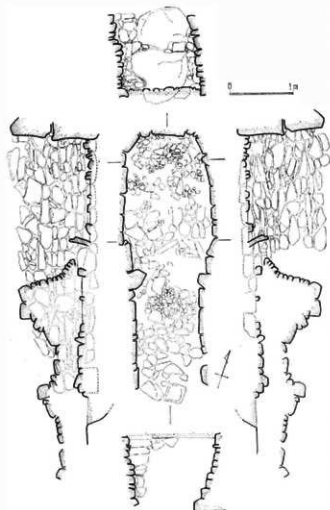
たので、その部分を古墳と考えた。石垣の中には耕作などによってすてられたと思われる石が多く、墳丘積石との区別は困難であった。測量の際には、築造時の墳丘面を確認できなかったが、石垣南側に僅かであるが裾とおぼしき部分があった。そこでは40cmから60cmほどの石が据に置かれ、上にいくにしたがって10cm大の石が積んであった。墳丘と察せられる部分は高さ2.2mをはかるが、地形が東から西に傾斜しているので、東側から見ると1.4mになる。東西径7m、南北は認められる範囲からすると約12mある。墳丘石積み状態は雑な感じであり、墳

第II章 古墳各説

頂部では10cmほどの円礫を、裾に近づくにつれて大きい石を置いてある。とくに、墳丘西側は垂直に近い状態で石垣が続いているので、比較的大きい石を組んでいる。しかし、これは明らかに耕作時に不必要な石を用いて構成しているものと思われる。また、墳丘の平面形は変形が著しく、円形か方形か明確にはならなかった。(小田野野憲)

B 内部構造 (第4・5・6図版, 第4図)

本古墳内部構造は、全長4.1m、玄室長2.17m、奥壁巾0.85m、最大巾1.39mをもつ横穴式石室である。石室は東側壁の一部が崩壊していた。以下、経過を含めて記述しよう。



第4図 長原第5号墳石室実測図 (1:50)

墳頂部を中心に約1m掘り下げたが、内部構造が確認できず墳丘西側の石垣が巾広くなる所より、東にむけて掘り下げた。その結果、表面より50cm下で墳丘積石の内部に混入している腐植土が、砂質の褐色土層にかわり、比較的大形の礫が現われた。さらに、広く掘り続けたところ石室の東側壁と思われる長さ40cmから60cm、巾25cm位の長手の自然石が面をそろえて検出された。この側壁らしき石の平面分布を追い、奥壁石、西側壁を確認した。しかし、西側壁は墳丘西側石垣に近い位置にあり、墳丘積石との区別が明確でなかった。また、石室内には長さ50cm巾1mほどの石が2個、そのほか側壁石と思われる石と土砂が埋没していた。羨道部側壁は確認されておらず、羨道部には閉塞石が積み、玄室入り口と羨道入口の2ヶ所には30cmから40cmほどの石を積んでいる。その

下に10cm位の石を置き、この2ヶ所の高い石積みの間約50cmから60cmほどは低くなっている。

石室内玄室部に崩落した側壁石、土砂を除去すると、玄室南側、閉塞石の手前では褐色土が、玄室北側では黒褐色土が存在していた。奥壁石の下にもう1枚奥壁石があり、玄室西側壁に袖石があることも確認された。石室内を掘り下げてから約1.25mになって、黒褐色土中に遺物が出土した。床面はその下5cmにあり、ボーリングによると石敷きが認められた。この黒褐色土層上に東側壁より崩れたと思われる長さ約40cm、巾約80cmの石が数個あり、それらの一部は床面に連していた。羨道部では閉塞石を除去した際、褐色及び黄色を呈する砂質土が10cm大の積石とともにみとめられた。

玄室は長さ2.17m、奥壁巾0.85m、最大巾1.39m、玄門部巾1.15m、床面からの奥壁高さ約1.2mをはかる。奥壁石は2段あり、下段が高さ0.85m、最大巾0.92m、上段は高さ約0.7m、最大巾0.83m、厚さ約0.4mの大きさの石で、両側には径15cmほどの自然石を奥壁の高さに合わせて積み上げている。奥壁上段と下段の石の間には、小さな隙を詰め込んでいる。側壁は巾20cmから50cm、高さ20cm内外の石を乱石積みになっている。そして、ところどころに間詰め石があり、壁高は床面から1.3m前後をはかる。側壁の石積みは両側壁とも自然石の小口面をそろえているが、西側壁に比して、東側壁は小口面とはいいながら非常に長手であって、安定度が高い。東側壁は、奥壁より約1.9m南の所から崩壊しており、そこから羨道にかけて根石あるいは2段だけ側壁が残っている。奥壁から2.17mはなれた西側壁には袖石が突出していた。袖石は玄室側壁から約23cm石室内に出て、平面形は丸くなっており、側壁沿いではかると厚さ30cmある。そして袖石の右隣の側壁、すなわち、玄室に入って1番目の西側壁から羨道側壁は一直線上にあり、袖石の突出した線の延長上に羨道側壁が位置するいわゆる両袖型祖形とは異っているのである。この袖石は巾25cm位、高さ約15cmの自然石を積み上げて構築されており現在8段になっている。側壁と同様に壁石間には詰め石が認められる。西側壁袖石と対称の東側壁は、崩壊して根石を残すのみであり、平面形によると、玄室東側壁から僅か15cmほど内側に突出しているにすぎず、袖石と断定しにくい。

羨道部は、袖石の長さ30cmを含めると1.93mの長さがあり、袖石の巾は現状で80cm、羨道巾95cmと考えられる。西側壁は、玄室部と同様に自然石乱石積みである。壁高は入口で約50cm、そのほかで約80cm内外をはかる。東側壁は根石を残すのみで、2段目の石は動いていた、落ちてしまったりしていた。その為に、羨道は1m前後をはかり、壁沿いの墳丘積石が側壁の部分に落ちている。一方、西側壁の羨道入口の石積みと、その外側墳丘積みは、一見して違うことがわかる。側壁では壁面を整えているが、墳丘にあっては乱雑に石を置いているのである。

本石室の床面には、自然石を中心に割り石が僅かであるが敷かれている。それも一重でなく、二重あるいは三重に敷かれ、石も5cm大から30cm前後のものまであり、一様でない。床面は、玄室から羨道にむかって僅かにあがっている。玄室、羨道の差は15cmほどある。また、石敷きは凹凸がかなりある。奥壁から約1.7mはなれた東側壁より、偏平な石が3個羨道にむかって弧を描くように埋っており、そのうちの1石は、床面上30cmから60cm下にむいており

第三章 古墳各説

床面下にまで入っている。これらの石は、東側壁のかさなっていた壁石が、崩れた際に床面に落ちたと思われる。さらに、袖石部の床には、約40cmの間に長さ30cm、巾20cmほどの石を3個置いてあり、玄室との境の欄石の如きである。そして、羨道には袖石近くで約5cmの小円碌を敷きつめ、そのほかは15cmから25cmほどの大きさの石を敷いている。羨道入口には、30cmほどの石が2個置かれている。

床面の敷石、土砂を除去したあとは、黒色上に黄褐色土の含まれる非常に堅い土の面があらわれ、この面は石室全体におよんでいる。石室外においては、奥壁より4.6mはなれた所、すなわち、羨道外50cmの地点から外は土が異なり、黄褐色土となっている。この変化を追ったところ、黄褐色土が切られて、傾斜が石室にむかっていることがわかった。そして、黄褐色土は古墳周辺の土層からすると地山を切り込んで、その上に黄褐色土を含む黒色土が盛られていることがわかった。これらのことは、石室を構築する際の基礎固めと考えてよいであろう。また、床面除去によって、側壁根石が明らかになり、西側壁の羨道入口第1石及び玄室に入って第1石の2ヶ所の根石は、他の側壁根石と比較して約2倍の大きさで、約40cmほどであった。さらに、羨道入口第1石と袖石の根石は同じレベルにおり、その間にある根石のレベルは10cmほど高い。また、玄室部では根石のレベルは袖石と同じレベルを示している。すなわち、石室根石レベルは同一面に置かれているが、羨道の一部が高くなっており、これは床面のレベルが玄室部より羨道部が15cmほど高くなっていることを裏付けている。根石からの壁高は、奥壁で1.51m、両側壁では1.2mから1.4mまで、袖石で1.15m、羨道西側壁では0.9mから1m、羨道入口では0.75mをはかる。側壁の内傾は根石から50cm位までは垂直であるが、その上は多少持ち送りが見られる。奥壁近くの東側壁では高さ1.3mに対し20cmほど内傾している。しかし、自然石を壁石に用いているので、この程度の転びは当然かも知れない。

本石室平面形は西側壁が直線的であるが、東側壁は曲線的であり、玄室は楕円形に近く、奥壁に接する両側壁は曲線をなしているが胴張り形とは明確にいけない。さらに袖石があるが、両袖型・片袖型のどちらとも断定しにくい。両袖型とする可能性が高い。(原田道雄)

C 遺物の出土状態 (第7・8図版)

本古墳の出土遺物には金環、ガラス小玉・鉄鏝・注甲小札・刀子・刀装具・土師器・用途不明金銅製品等があり、発見された遺物は側壁の崩壊によって原位置を失っているものもある。

注甲小札は玄室西隅を中心として床面の敷石上から出土した。しかし、量的には僅かであり、散乱している状態であった。また、この西隅の側壁から10cmほど離れて金環1個が小札とともに出土。このほか、金環は西側壁沿いの奥壁から1.65mの地点で1個。さらに、反対側東側壁の対称の位置から重なり合って2個が出土、東側壁の外側、すなわち、墳丘内部の東側壁よりの石積み直下の土層(床面と同じレベル)から1個、羨道部東側壁崩壊土砂中から1個の計6個の金環が出土した。鉄鏝は羨道部西袖石のわきから4本分出土したが、破片だけであっ

た。同じく、羨道入口近くの敷石の間に完形品が1本、玄室西側壁中央に破片で出土した。土師器は玄室中央からやや南の地点で、床面上から1個。さらに、その西側約40cmはなれて側壁沿いに1個出土している。両方ともに置かれた状態のままつぶれていた。ガラス小玉は東側壁より出土した金環の周囲や、西側壁沿いに出土した土師器の周囲から出土し、そのほかの小玉は、この周辺から出土している。刀子は2本出土し、うち1本は西側壁沿いの土師器の直下であり、両者の間に5cmほどの土砂の堆積が認められた。もう1本は奥壁から20cmほど南側で、鋒を東側壁にむけ、刃部は南西をむけていた。羨道西袖石から南に20cmの側壁沿いに金銅製稍尻が、そして、用途不明金銅製品がそこから東に15cmほどの所から出土している。このほか、玄室の西側壁に沿って発見された土師器の東隣りで球形をなす中空の金銅製品が出土した。

これらの遺物は床面上に存在していたが、玄室西隅出土の金環は敷き石の間に入りこんでいた為に、他の遺物より10cmほどレベルが低かった。床面の敷石は三重になっていたが、遺物の出土レベルからすると、はじめの敷石を床面と考えると良いと思われる。これらの遺物を分布の状態から見れば、大別して3群になる。第1群が玄室西隅を中心に、第2群が玄室西側壁中央周辺、第3群は第2群とはほぼ対称の地点にある東側壁中央周辺に求められるであろう。しかしながら、第1群は挂甲小札を中心とした遺物群であるが、第2群、第3群はガラス小玉金環などの装飾品を中心とした遺物群である。

玄室内出土の人骨は、広範囲に認められるが、両側壁沿いに多く、奥壁近く、刀子と直交するように歯列があり、それらは前歯である。さらに、奥壁から80cm南で東側壁に接して、下肢骨が長さ約40cmほど南西にむかって存在した。このほか、挂甲小札のある西隅をはじめ、玄室内に人骨を認めたが、大部分は原形をとどめておらず骨片となっていた。(小田野哲憲)

D 遺物各説 (第9・10図版, 第5図)

挂甲小札 鉄製で、総数20枚分が発見されたが、完全な形をしたものは僅か2枚である。1枚は長さ7.7cm、幅4.2cm、もう1枚は長さ7.0cm、幅2.6cmをはかる。後者は上端が半円形を呈す長方形であるが、前者にあっては上端の丸みはすくない。このほかの小札についてみると、長さは不明であるが、幅2cm、2.9cmをはかるものがある。小札には数ヶ所に穿孔が認められるが、革紐などの痕跡はまったくなかった。

金環 玄室東側壁出土例は径2.1cm、断面形は偏円を呈し、厚さは0.4cmをはかり、本古墳出土例中最大である(第5図2・3)。ほかの3個はそれぞれ径が2cm、1.5cm、1.7cmある(第5図1・4・5)。また、羨道東側壁より出土した金環は中空であり、出土した時は破片であったので、推定径2cm、厚さ0.4cmをはかり、断面は円形であった。

鉄鏃 約9本分出土しているが、完全なもの1本のみで、そのほかは破片となっている。完全な鉄鏃は羨道から出土した例で、全長9.2cm、茎の長さ6.2cm、身巾2.1cmで両端に逆刺をもつ腹状形式である(第5図8)。破片の中にも細根の片刃箭と思われるものがあるが、ほかは銹化

第三章 古墳各説

著しく不明であるが、茎の断面は方形である。

刀子 2本出土したが、奥壁付近出土例(第5図6)は鋒が破損している。現存の長さ10.5cm、基部長3.7cm、身巾は1.5cmをはかる。基部には木質部が付着している。西側壁出土例は、基部の一部分だけであるが、目釘穴をもっている。

土師器 2点出土しており、両方とも坏である。第5図7は口径14.2cm、高さ3.8cmで、色調は内面は黒色を、外面褐色を呈す。内面は多少研磨されてる。成形はロクロを使用し、底には糸切り痕が認められる。他の一個は口径13.9cm、高さ3.9cm、内面は黒色を、外面赤褐色を呈し、刷毛による整形がおこなわれている。2点とも国分式土器と考えられる。

鉢形状金銅製品 玄室内で1例出土したが、保存状態も悪く非常に薄いの粉々になっている。しかし、中空で推定径0.7cmから0.8cmほどである。中空の金銅製丸玉と思われ、装身具の一部であろうか。

金銅製鍔尻 完全でなく、残存部分は長さ3cm、巾3.2cmで断面は楕円形を示す。厚さは0.1cm前後をはかるが、錆化著しい。このほか用途不明の金銅製品が出土している。いずれも破片で、1cmから2cmほどの金銅薄板で、3片出土している。3片とも多少内曲している。

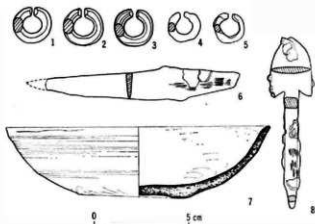
ガラス小玉 ガラス製で総数105個あり、径0.3cmから0.62cmまであり、厚さは0.18cmから0.52cmまでである。色は紺、緑、黄の3色があり、紺色小玉99個、緑色小玉5個、黄色小玉1個であり、いずれも不透明で、形の不揃いが多少見受けられる。

東側壁に接して発見された人骨は、女性であるが、年齢は不詳である。

出土人骨については、東京大学鈴木尚教授のご教示をいただいた。(小田野哲憲)

E 本古墳の提起する問題

内部主体である横穴式石室は、西側壁では袖石が認められ、東側壁については不明であった。しかし、平面形からすると東側壁にも僅か10cmほどではあるが突き出た部分がある。この状況は、袖石が西側壁と同様に、存在していたが、東側壁の崩壊によって、不明確になったことを物語っている。したがって、本石室は両袖型石室であるが、袖石が支門の柱石状を呈しているため、第11号墳・第12号墳・第13号墳のごとき、両袖型石室例とは区別されねばならぬ。しかし



第5図 長原第5号墳出土遺物実測図(1:2)

第7号墳石室例のように、玄門付き両袖型石室の範囲に含まれるかどうかは断定できない。

石室構築について、柱積みみの有無を確かめようと、東側壁に直交するように墳丘を掘り下げたところ、墳丘積み石の下部とほりこまれている地山を認めた。このことから、本石室が地山を切り込み、その上に黒色土を盛り固め、さらに、側壁石を置いて構築されていることが判明した。

出土遺物中、金銅製靴尻・球形状金銅製品・用途不明金銅製品などの金銅製品が認められるが、そのほかの副葬品についてみると、掛甲小札は量的に少なく、一領分もない。同時に、武器類は鉄錐のみで、刀剣類が皆無であった。装身具類についても、金環・ガラス小玉のみで勾玉・切子玉等は一切みとめられなかった。また、土師器は坏が2点出土しているが、須恵器は一片も検出されなかった。おそらく過去に受けたであろう破壊の際に、相当量の遺物が運び出された結果であろうと考えられる。

本古墳の築造年代を推定する資料として、われわれは土師器や二、三の金銅製品に注意する。既述のごとく、糸切り痕を有する坏形土師器の出土は、古墳時代終末としても、その実年代は8世紀にくだすべきかもしれない。

金銅製の靴尻金具や球形の中空金銅丸玉の出土は、金銅製大刀や金銅製丸玉(装身具)の流行する時期として、先述の土師器が、因分式土器として比定される年代と背反しない。また金銅製の中空金環の組みあわせも、本古墳が終末期古墳として、7世紀末葉もしくは8世紀代に築造され、埋葬がおこなわれていた証左となるものであろう。(原田道雄)

第2節 第6号墳の調査

A 古墳の位置と外形 (第11図版、第6図)

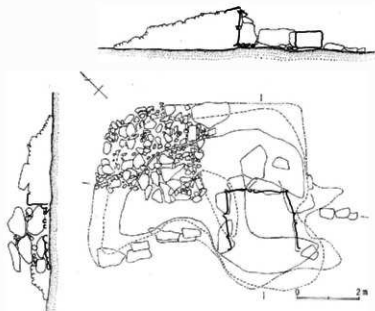
第6号墳は長原古墳群の中ではやや東に位置し、東へ約24mはなれたところに5号墳が、西に12m行くと8号墳が存在する。墳丘の一部が大きく崩れ、破壊されている部分には、墳丘を構成する積石とは異なる比較的大きな石が認められた。墳丘には11.5mおよび12mの等高線が走り、高さは約1.2m、南北の長さ7m、東西5mの大きさを持ち、不整形な平面形を呈する積石塚である。

墳丘西側は石垣状に大きい石が2段に積みまれ、北側から東側にかけては、比較的良好に墳丘面が残っている。南側半分は破壊されており、石室の構築に使われたと思われる80cm前後の石が、墳裾に置かれていた。そして、60cmから80cmほどの角張った自然石が、コの字状に南西に開口するように6個置かれている。その中には、墳丘から落ち込んだ石や、長年月の間に堆積した土が40cmほどの厚さで堆積していた。

(会田 進)

B 内部構造 (第11図版, 第7図)

本古墳の内部構造は横穴式石室であるが、すでに石室は破壊されかかっており、玄室の一部を残すだけであった。石室は玄室奥壁部だけであるが、長さ1.9m、奥壁巾1.9m、最大巾2.1m



第6図 長野第6号墳墳丘実測図 1:120

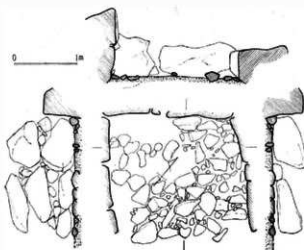
をはかる。石室主軸は北40度東をむいている。奥壁には石を2枚用いているが、1段のみ残存し、その上方は破壊されている。高さは床面から50cm前後ある。奥壁の左側の石は、長さ65cm、右側は1.9mほどあり、その間には20cmほどの空間があり、そこに10cmほどの石が詰められている。西側壁は高さ1mで2段と3段目が残っている。右側壁は1段目の石しか残っていない。これら側壁は、長さ40cmから1.2m、高さ25cmから50cmほどの長手の自然石を積み、その間に10cmから20cmほどの丸みのある石を詰めている。石積みは乱石積みで、側壁石は自然石を用いているが、丸みはすくなく角礫のようにも思われる。

石室平面形は、側壁が東側にゆがんでいる。石室内に堆積している土砂を除去して床面を追求する際に、床面より約10cm上で腐植土中から遺物の出土を見た。この腐植土には小さな礫が含まれており、床面かと思われたが、腐植土の下5cmから10cmの所に、比較的大きい扁平な河原石を一面に敷き床面としている(第11図版)。この敷石の下には砂利がかたく詰まっていた。この砂利層は、石室を構築する時に基礎固めの為に詰められたのであるかどうかの確認はできなかった。しかし、墳丘の南側の裾、つまり本来なら本古墳の墳丘があったはずの畑地をボーリングしたが、耕作土の下に同じような砂利層が認められた。また、床面下の砂利層を調べた

際、各壁の下には根石がまだあることが判明した。

本古墳では玄室の一部分しか残存しなかったので、両袖型か、袖無型あるいは片袖型石室であるかについては判然としない。このことは天井石の存在についても同様であった。

(会田 進)



第7図 長原第6号墳石室実測図 (1:60)

C 遺物の出土状態

本古墳出土の遺物はすべて石室内から発見された。すなわち、霰玉2個・金環5個・須恵器片である。また、人骨も僅か検出されたが、細片となっており、保存状態不良の為に、取り上げた時には粉状になってしまった。以下、出土状態を述べよう。すでに述べたように、各遺物は扁平な敷石の直上10cmの所に認められた腐植土層中からである。

霰玉2個及び人骨は奥壁西隅から出土した。霰玉は2個とも破損しており、両者はともに保存状態が良くなかった。人骨は細片となっており、その分布も散乱状態を示し、石室崩壊の際に散ったものと思われる。この人骨については年齢・性別が不詳である。

金環は西側壁の南よりで2個、奥壁中央付近で1個、石室中央部で1個出土した。これらは扁平な敷石を追求する際に腐植土中より発見したが、西側壁の南で検出された2個の金環は、石室内に崩れ落ちていた石を除去した際に出土したものである。ほかの2個の金環は、腐植土層中からの出土であり、前述の金環よりはレベルが下である。また、石室内清掃の途中、排土中に金環1個が発見されたが、出土地点は不明であった。

以上のほかに、須恵器片が石室内堆積の混入土中から出土している。なお、石室床面上からは遺物は発見されなかった。

(会田 進)

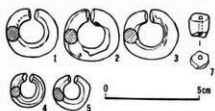
D 遺物各説 (第10図版、第8図)

霰玉、琥珀製で2個出土したが、1個は保存状態が悪く、風化して崩れている。残る1個も一部が欠損している(第8図7)。図示したものは長さ1cm、最大径1.1cm、孔径1.8mmをはかる。

金環 5個出土したが、うち1個は出土地点不明である(第8図3)。西側壁の南で発見された2

第三章 古墳各説

個の金環は、それぞれ大きさが異なり、奥壁よりのもの(第8図2)は大きく、長径3cm、短径2.8cm、断面は円形にちかい。それに対し、南よりのもの(第8図5)は小さく、長径2cm、短径1.9cm、断面は楕円形を呈している。このような大きさの違いは、奥壁中央付近出土例(第8図1)



第8図 長原第6号墳出土遺物実測図 (1-2)

出土地点不明例が前者に近く、石室中央出土例(第8図4)は後者に近いというように、5個の金環の大別となる。また、これらの金環は錆化が著しく剥離が部分的にみられる。

須恵器 本石室出土の須恵器は、小さな破片となっており、器形等についての手がかりとなるものはなかった。(原田道雄)

E 第6号墳の提起する問題

本古墳はすでに墳丘、石室が破壊され変形していた。そのため、全貌を知ることはできなかったが、調査の結果、墳丘及び石室の規模について推測することができた。

本石室は大部分が破壊をうけていたが、さいわいに玄室奥壁付近が残っていた。すなわち、玄室石積みが高さ1m前後、高さ40cmほどの石を、長手の面を壁面とした乱石積みによっておこなわれており、壁石間には20cmほどの石を詰め石としていた。本石室では、石室上部が崩れていたので、上部の様子は知ることができなかったが、このような石積みな方法は、第7号墳の玄室部においても認められており、本古墳石室の規模を推察するため、第7号墳石室と本石室とを比較してみよう。

本石室の玄室奥壁巾は1.9m、玄室最大巾2.1m、玄室現在長1.9mをはかるが、一方、第7号墳では、玄室奥壁巾1.95m玄室最大巾2.42m、玄室長4.33m、奥壁高1.95mである。このように、本石室では、玄室の長さが破壊の為不完全であるが、そのほかの石室の基準ともなる玄室巾が似ているが、とくに奥壁巾については僅か5cmだけ第7号墳の石室が広いが、本来、横穴式石室では、奥壁巾によって玄室巾がほぼ定められてしまうのであるから、本石室例と第7号墳石室例とは、最大巾において約30cmの違いはあるが(本石室が1.9m長さに破壊されているが、仮りに玄室が完全な状態であったならば、最大巾の差はさほどでなかったかと思われる)。これは側壁の凹凸によって直線的にならなかつたと考え、30cmの差はある程度無視してもよいと思われる。そこで、本石室が第7号墳石室例に似ていることから、本石室の規模を、第7号墳石室例と同程度あるいはそれに準ずる規模と考えたいのである。すなわち玄室長4m、玄室巾2m(奥壁巾1.9m)を基準とし、この前後の値が本石室玄室部の寸法と推察するのである。しかし、羨道を含む石室全長については推察しがいのであり、本石室が両袖型(片袖型)、袖無型のどちらであるかについても、本石室の現状からは推察不可能であるが、本古墳群において、大部分の横穴式石室は両袖型であるが、本石室例についても同様のことが考えられるが、積極的な根拠は見あたらない。

本古墳の北西より東北にかけての墳丘面は、墳丘築造時の面と考えるならば、平面形は円形あるいは方形と推定できるが、そのどちらとも断定はできない。そしてまた、築造時の墳丘がはたして現在のそれと同じであるか非常に疑問である。石室奥壁が墳丘の中心と考えた場合、石室の規模、すなわち、約4mの長さを墳丘の半径とすると、墳丘東北側より奥壁までの距離は2.8mあり、北西側からは西側壁まで4.2mあり、墳丘は築造時のままとは思われない。そこで、築造時の墳丘の規模を推定するならば、石室全長が墳丘の半径となる場合、石室全長+ α が半径となる場合が考えられるのである。前者の場合は石室が墳丘下部に設けられている時に想定できる。後者の場合には墳丘下底部よりは高い位置に石室が置かれていていると思われるのである。このような考えが許されるならば、本古墳の墳丘規模は、半径4m以上となる。ここで石室規模を推察した際に、玄室長約4mとし、石室全長は不明としたが、墳丘半径4m以上とするよりは、 $4m + \alpha$ （この中には石室羨道部の長さ、さらに石室全長より墳丘半径が長い場合の長さを含む）とすべきであろう。（原田道雄）

第3節 第7号墳の調査

A 古墳の位置と外形（第12図版、第9図）

第7号墳は、長原古墳群中のほぼ中央部に位置し、南北にはる保科川の西方、約140mの地点に位置している。本古墳の周辺には、第8号・第11号・第13号墳があり、南東約18mには第8号墳、南西20mには第13号墳、西方約20mには第11号墳がある。

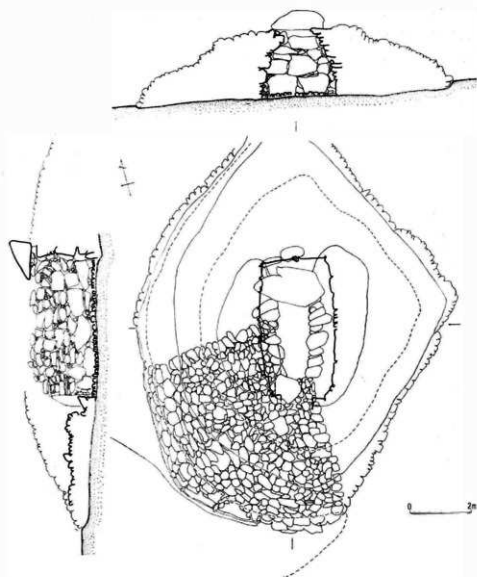
墳丘上にはかなりの笹や木があったが、実測の結果、墳丘は盗掘と開墾などによって、かなりの破壊をうけていることが判明した。南西側の墳裾は、比較的築造当初の形状をとどめているように見受けられたが、東側の部分はかなり変形していた。また墳丘の北西側では、東西に長くのびている積石の塊につづいているので、その部分については、古墳とはひとめられない形状である。

墳丘の高さは西側墳裾から3m、東側で2.65mである。墳丘の外形は円墳と推定され、復原形は長径12m、短径10m、高さ約3mの積石塚であったと推定される。

B 内部構造（第12・13・14図版、第10図）

本古墳は地表面を利用して石室の床面が施設され、現墳丘の中心より約2m北方に奥壁を設け、石室の主軸を北3度東に向け、羨門は南に開口している。

石室の形状は、長さ4.33mの玄室の中央部巾が最大となるいわゆる胴張りの傾向を示すもので、玄門の袖石が明確に石室内に突出している点に最も特徴があろう。奥壁巾は1.95m、奥壁から羨門部方向へ約1mの地点で、玄室巾2.33m、距離1.6mのところまで2.42m、さらに奥壁

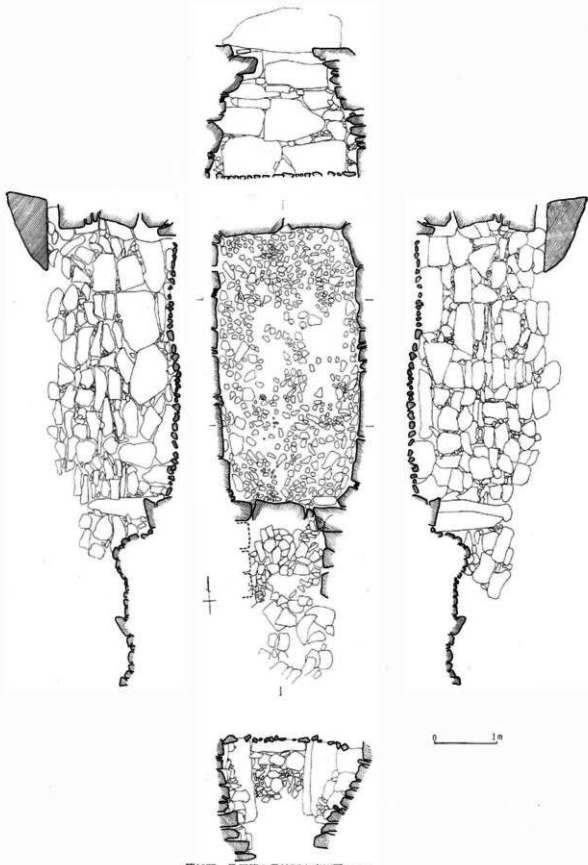


第9図 長原第7号墳丘実測図 (1:100)

より2mのところまで巾2.33m、女門巾1.96mとなり、玄室中央部がもっとも巾広くつられている。

天井石は2枚がこのこっており、奥壁上と玄室南側の部分にそれぞれ架構されている。これらの天井石から推定すると、当初は5枚乃至6枚の天井石が存在したものと考えられる。奥壁部における天井石下面から床面までの高さは1.95mである。

石室側壁は、天井石が除去されているにもかかわらず、よく原形を保っている。東側壁の高さは、奥壁より1.09mの地点で高さが2m、西側壁は1.86mである。さらに奥壁から2.08m、



第10图 长原第7号填石宝实例图 (1:40)

第Ⅲ章 古墳各説

羨道部よりの側所では、東側壁が1.75m、西側壁が1.62mの高さを有している。玄門部での側壁の高さは、東側で1.15m、西側で1.25mで、これらの数値は、築造時の姿をよくのこしているものと考えられる。

側壁面の下方は垂直であるが、上方に行くに従い次第に内面にせり出し、いわゆる持送り状を呈している。側壁の石室内への傾斜が、築造後に派生した事象でないことは、石室天井石の巾からも十分に推察できる。持送りの数値は、奥壁より羨門方向に1.09mの点で、高さ2mについて東側壁では76cm、西側壁では高さ1.86mについて70cmの持送りをしている。さらに奥壁より距離3.09mの地点でも、高さ約1.8mの西側壁にたいして53cm、東側壁では74cmの持送りをしている。かような側壁の持送り状況が示す問題は、それが特殊な意味を与えられて構築したのではなくて、入手した天井石の大きさに規定された点が指摘できるのである。奥壁と側壁の構築状況は、4段に2枚づつ面どりした巾80cmほどの石を、横にならべている。側壁の根石は奥壁と同じほどの大きさの石が用いられ、上方にはより小形の石が用いられている。

玄門部東側は、2枚の扁平な石を立て、西側は1本の方柱状の石を立てている。根石は1枚で、その上にさらに板石が2枚置いてあり、床面から高さ25cm、上方の板石面まで44cmである。玄門の柱石から楣石と思われる石が、東側のみ柱石の上のっていた。

石室の閉塞状況は、玄門から羨道部をおおっていた。この閉塞石は、本古墳が現状のまま保存することになっていたので、除去しなかったが、その周辺の調査の結果、羨道部の床面は、玄室の床面より45cmも低いことが判明した。

C 遺物の出土状態 (第14図版)

石室内の遺物は数回にわたる天井石採取や、それに伴う発掘によって、ほとんど原位置を動いていたと推定される。

金環(第11図1・3)は、玄門から玄室内に1mほど入り、東側壁から70cmの地点から接近して発見された。その東方から須恵器片が一括出土し、玄室の東南隅から鉸貝(第11図5)、鉄鏃(第11図6)がみとめられた。

以上の遺物一群と対応して、玄室の西側壁よりの側所から、鉄鏃(第11図7)と金環(第11図2)が出土した。また玄室のほぼ中央部からは、ガラス小玉が発見された。

本石室からは3体以上の人骨と少量の獣骨が発見された。これらは凡そ3群に分けることができ、奥壁に接した中央部と、東南隅および西側壁に沿って出土した遺物と伴出した一群とである。

奥壁の中央部附近から発見された人骨は、成年女性であり、東南隅および西側壁下の出土例は、ともに男性成人人骨であることが、東京大学鈴木尚教授のご鑑定で判明した。人骨は上腕骨・下腕骨が主体であり、男性人骨は骨が太く頑健であったとみられる。

獣骨は牛骨であり、同時埋葬か後世の鹿人か不明確であるが、最近までの石室の擾乱を考え

ると、石室築造時の埋葬とすることは危険であろう。

D 遺物各説 (第15図版, 第11・12図)

第7号墳の出土遺物は、金環3個・ガラス丸玉1個・鉄具1個・鉄鏡2個・須恵器2個体分などである。

金環 3個出土したうち2個が一對をなしていた。環径が3cm(第11図1・3)、厚さ7mmを測り、斜地に鉄金をほどこしている。他の1例は上述の2例よりわずかに小形で、環径2.8cm、環の太さは6mmである。

玉類 ガラス丸玉で緑色を呈している。やや扁平の傾向がみとめられるが、丸玉としておく。径9mmで径2mmの穿孔がおこなわれている。(第11図4)

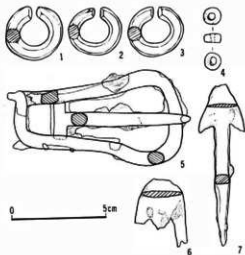
鉄具 鉄製で留針式環状鉄具である(第11図5)。馬具の附属品であろうが、胸繫か尻繫か、あるいは面繫のいずれに着くか不明である。

全長9.3cm、留針部の長さ6.5cmで、丁字形の基部は環体と接し、可動的につくられている。環体の一端は巾狭くなり3cmを測り、他端は漸次ひろがって巾5cmとなる。全面鉄錆におおわれているが、保存状況はよい。

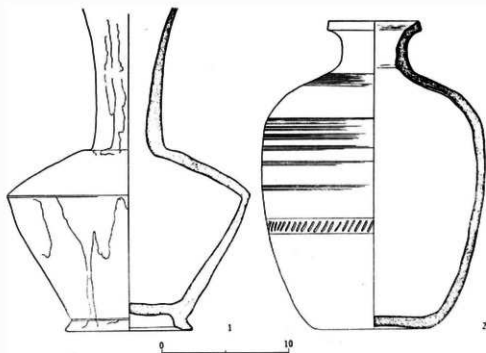
鉄鏡 2例出土した。(第11図6・7)ともに平根の三角形形式に属し、揚袂がみとめられる。両例はこまかい点で形式がことなり、揚袂の先端に抉りを入れた例(第11図6)と、短い茎を有する(第11図7)例とがみとめられる。

須恵器 高台付長頸瓶(第12図1)と、細頸壺(第12図2)が出土している。両例とも破片となって出土したが、ほぼ完形に近く復原できた。高台付長頸瓶は、口縁部を失っているが、頸部以下は完存している。現存高25.5cm、やや上方に開く頸部は長さ11cmで、胴部に移行する。器形の最大巾は、胴部上半部にあり、18.9cmを示し、肩部が張った形状である。肩部の張りは稜をつくり出し直線的に底部へとすままる。底部には底径10cm、高さ1cmの高台がついている。

細頸壺は全体にずんぐりした形状で、口径7.3cm、高さ24.4cm、肩が強く張り最大径は18.1cmである。底部は径約9cmの平底であり、わずかながら窪み底となる。器面にはロク口痕がみとめられ、胴下半部には平行沈線と、その中間を満たす筧による斜行線文があらわされている。この2例の須恵器は焼成よく、器面には自然釉の吹出しがみとめられる。須恵器としては後出的な型式であり、七型式細分法をとれば、その第六型式に比定されよう。7世紀終末かもしくは8世紀初頭頃に考定してよいであろう。



第11図 長原第7号墳出土遺物実測図(1) (1:1)



第12図 長原第7号墳出土遺物実測図(2) (1:3)

E 第7号墳の提起する問題

本古墳は住宅団地の緑地帯内に包括して保存されることが、あらかじめ判明していたため、羨道の閉塞石などは当初から除去をしなかった。したがって調査の細目については不十分のそしりを免れない。

墳丘は他の諸古墳と同様に、積石塚であり、それは土砂などの全く混入しないものであった。玄室の床面と墳裾とは、ひとしく当時の地表面上に設定したものであった。墳裾の確定は積石塚の場合よりは、はるかに困難であるが、本古墳は円墳であったと推定される。

玄室の石積み状況は、第6号墳・第12号墳・第13号墳と同様に扱石が大きく、一般的に乱石積である。とくに本例は本古墳群中、もっとも整った石室であり、玄門部の諸構造もよく観察することができた。

遺物の配列状況からは、追葬が考慮されるが、第12号墳のように層位で捉えられてはいない。

第7号墳の築造年代と埋葬の最終年代を決定するには、いささか副葬品の組みあわせに難点をみとめる。しかし、玄室長4m余に羨道部が加わり、不整形であるとしても、直径10m前後、高さ約3mの墳丘を整えていることは、本古墳が終末期古墳としての様相を、一通りは兼ねそなえているものであることを知るのである。従来の古墳時代の年代観よりすれば、それはまさ

に後期第Ⅱ期の古墳として位置づけうるものであろう。東国の古墳の終末期についても、はなはだ問題は多いが、いま本古墳を西暦7世紀代終末頃の築造と考えることは、大方の承認をうることができるであろう。

しかし、すでに紹介したように、本古墳の出土遺物の中に、含まれている須恵器の型式は、第6型式とされるものであって、8世紀代以降すべき例ではないかと思われる。若し、この年代比定に誤りがなければ、第7号墳の埋葬は、全く疑いなく8世紀初頭にもつづけられていたといえるであろう。したがって、こうした事実認定は、長原古墳群の最終年代を決定する重要な要件となるであろう。

(山口 充)

第4節 第8号墳の調査

A 古墳の位置と外形 (第16図版, 第13図)

第8号墳は古墳群中の東側に属し、北に7号墳、東に6号墳が20~25mの所に位置し、南方90mに第9号墳が位置している。

本古墳は、南北12m、東西5.5m、高さ1mの規模をもち、多少ふくらみをもつが、ほぼ長方形をしている。さらに、高さ70cmのところ、この長方形の墳丘を二分する対角線状の石積みがあり、東半分が一段高く小石の積石によるものであり、西は上面はほとんど土盛りであった。墳裾となる石積みは、東で3段、西で4~5段をかぞえ、ほとんど垂直に積まれていた。一部東北隅において、なだらかな傾斜もみられたが、おそらく、石垣状の墳裾がくずれ落ちたのであろう。

本古墳は、墳裾の状態は良好であるが、墳頂部が二分され、1段高い積石があったり、半分は多量の土が覆っているなどの理由から、築造当時の原形を保っているとは思われない。

B 内部構造 (16図版, 第14図)

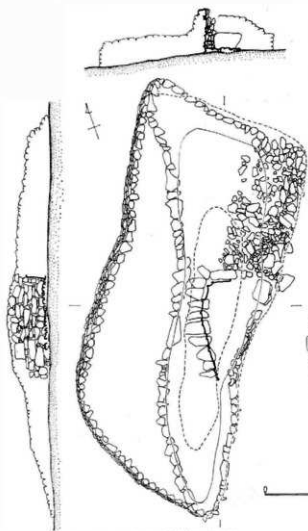
墳丘の中心部より主体部の探査にあたったが、それらしきものは発見されず、困難をきわめた。しかし、墳丘東側、いわゆる墳頂部が1段高くなっているところより、天井石は失われていたが西側壁と北壁の一部を残す石室を発見した。現存している部分を測量した結果、北壁の高さ55cm、巾65cm、西壁の高さ1.3m、長さ3.2mをはかる。西壁はややふくらみをもち、また北壁も大形の石一枚で、その石にはややくぼみをもたせ、意識的に削った面もみられた。西壁は20~30cmの石を4~5段に積んでいた。床面は10~20cmの小石を敷いているが、それは一部にしか発見出来なかった。

8号墳の石室は、西壁のふくらみがほぼ現在の長さで終り、南壁らしきものが発見出来ないことから、西壁積石の最南端の石は、ほぼ袖石の一部とみられよう。したがって、主軸線を北14度東におき、南に開口する横穴式石室と思われる。現存している部分は玄室の一部である。

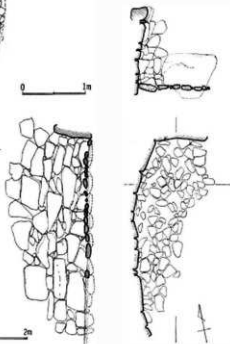
第III章 古墳各説

本古墳の石室は、奥壁は大型の石2段からなり、高さ1.2～1.3m、巾1.1m～1.2m、側壁は

4～5段の積石で高さ1.2～1.3m、
 玄弘の長さ約3.2m、最大巾約2m
 を推定できる。羨道部が完全に失わ
 れているため、全体の規模は不明だ
 が、推定では、石室の長さ約5mは
 あったとみられる。(関上善雨)



第13図 長原第8号墳墳丘実測図 (1:100)



第14図 長原第8号墳石室実測図 (1:60)

C 遺物 (第15図)

石室の中央部、西側の側壁に接して鉄鍔1個が出土した。全面に発錆をみとめるが遺存状況は良好である。全長16cmで完存している。鍔は刀身形を呈し、いわゆる片刃箭形式に属する。刃部は長さ3cm、身巾0.5cmで、9.5cmの棒状体がつつき、長さ3.5cmの茎を有している。全体としてきわめて細身であり、終末期の古墳出土例としては通有の例である。(宇杉幸知)

D 第8号墳の提起する問題

開墾や盗掘による墳丘および石室の破壊が著るしく、副葬品も鉄鍔1本であった。終末期古墳の中でも、小規模な古墳よりなる群集墳では、貧弱な副葬品が、またその時代的、社会的背景の反映であると理解される。しかし、それにしても、本古墳の内容は、埋葬時のそれとは大きなへだたりがあると思われる。さいわい鉄鍔の形式が、片刃箭形式に属しており、7世紀代後半ころに本古墳の年代をあてることは、さして無理がないように思われる。

さらに、破壊が著しかった内部構造も、調査員の努力によって、玄室長3.2mを測定しえたことは、本古墳の墳丘の復原に影響を与えるばかりか、長原古墳群全体の構成を考究するうえにも、貴重な事実の認定であったといわねばならない。

石室の全長が、5mと推定されていることから、墳丘の規模は10mを多少超えていたとみなければならず、他の諸古墳の規模とも、ひとしく合致するところである。(瀧上善磨)



第15図 長原第8号墳出土遺物実測図(1:2)

第5節 第11号墳の調査

A 古墳の位置と外形 (第17図版、第16図)

第11号古墳は、7号墳の西北方約20mの地点に位置し、今回調査した古墳群の中では、もっとも保科川に接近している。

長原古墳群は東方から西方になだらかに傾斜する扇状地に立地しているため、本古墳の現時における墳高は、東側のそれよりも約60cmレベルが低い。

墳丘は大小の円礫や少量の角礫をまじえたいわゆる積石塚を形成しているが、表面は雑草におおわれている。これらの雑草をとり除くと、ただちに積石面が露呈されることは、ほかの古墳と同様である。墳形は長方形であるが、築造後の二次的な変形を蒙り、かなり形状がくずれて、南北8m、東西6m、高さ1.6mの小規模な墳丘となっている。後世の積石除去による墳形から、築造時の墳丘の規模を推定することは、かなり困難であるが、南北長10mを超えていたと考えられる。

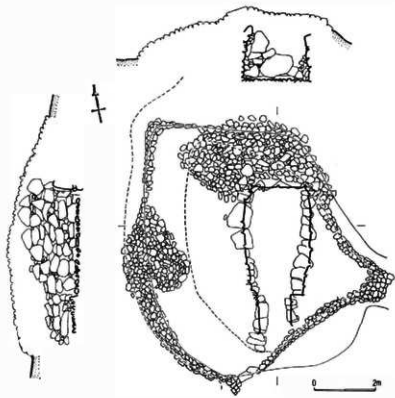
墳高はいま石垣状を呈するが、西側の一部と北東部が崩壊しており、盗掘をうけたことがあきらかである。墳頂部には長さ1mの石がみとめられ、その東側が落ちこみとなっている。発掘の結果、この落ちこみは玄室部にあたり、墳頂部に露出している石は側壁の一枚であったこ

第III章 古墳各説

とが判明した。さらに石室の天井石と推定される石材がみとめられず、ほかの古墳の場合から考えると、天井石は以前に除去されたものと思われる。

また玄室奥壁の東隅が現在の墳裾となっている点を考慮すると、第11号古墳の墳丘東側の半分は、ほとんど失われてしまったものと思われる。

墳丘を形成する積石は、大部分が径20cmほどの円礫であり、少量の角礫が混在していた。石積みはかなり乱雑であり、石と石との間隙がみとめられた。また墳丘の東側および北東側が大きく崩れているので、西側の一部を除いた部分を、もっとも原形に近いものとして推定復原



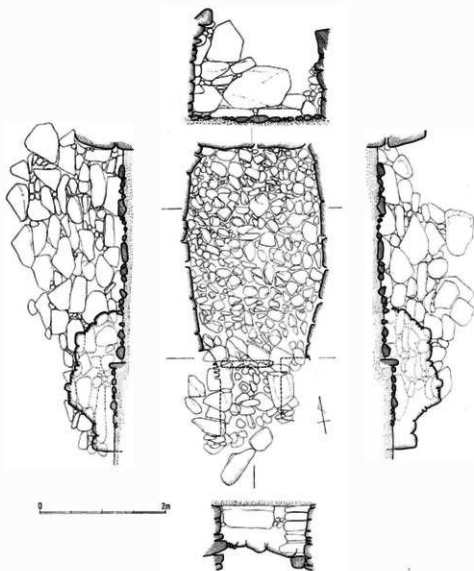
第16図 長原第11号墳墳丘実測図 (1:120)

すると、直径8mとなり最大径約10mに近くなると思われる。さらに石室に天井石が架せられると、墳丘の高さは2~2.5m前後になるであろう。また墳形は墳丘西側の等高線の走り工合や墳丘断面の観察から円形墳であったと考えられる。

墳裾をめぐる石垣状遺構については、墳丘が切り崩された東側にもみられる点から、この石垣は本古墳築造時の施設ではないように考えられる。

B 内部構造 (第18図版, 第17図)

墳頂部東側の落ち込みを中心に、落下した側壁の石をとり除くと、胴張りの玄室プランがあらわれた。調査の結果、第11号古墳の内部構造は、南に開口する両袖形の横穴式石室で全長4.6mを測る。奥壁は西側の半分が、また側壁は東側がかなり破壊されている。石室の主軸方位は北10度東を示し、玄室長3.4m、奥壁巾1.7m、玄室中央部巾2.1m、玄門部での巾1.6m、奥壁



第17図 長原第11号墳石室実測図 (1:40)

第三章 古墳各説

の高さ1.6m、西側側壁の高さ1.8m、東側側壁の高さ1.5mである。羨道部は長さ1.2m、巾1m高さ0.8mを測る。

計測値の示す通り、この玄室は、中央部が最大巾を示すいわゆる胸張り状になっている。とくに東側側壁の中央第3段目および奥壁西側隅の石材は、面を削って内傾させており、石室プランのカーブを強調している点は注目される。

奥壁は現在残っている部分で10個の河原石を用い、その面の大きさは径20cmの例から、70×100cmのものまで大小さまざまである。さらにこれらの奥壁石の間隙を小円礫で充填している。奥壁および側壁の石材使用の特徴は、基段と下方には大形の石を用いる傾向があることは勿論、小形の石材は小口面を石室内面に向け、大形の石は長手の側面を壁面としている。

側壁は現在残っている部分で西側8段、東側6段を算え、60×40cm前後の比較的大きな石を用いている。西側の側壁は、東側のそれに比較して、石材の大きさが揃っている。側壁の持ち送りは、西側でみると奥壁から1mの地点で、床面から高さ90cmまではほぼ垂直で、それより上部が約20度の傾斜を持っている。

袖石は形の整った比較的正方体に近いような石を用い、小口積の7段重さねである。そして奥壁に向かって中段より上方の壁面が、約20度ほど内傾して持ち送っている。かかる持ち送りの状況は、羨道の両側壁にもみとめられ、約8～7度の内傾を示している。これらの側壁や奥壁および袖石部分の内傾の状況からみて、本石室の壁面構築には、築造当初から持ち送りの手法がとられていたと考えられる。

羨道側壁は玄室に比較して小形の石を用い、その大きさは30～40cm位の扁平なものを使用している。側壁の根石は、石材の横口面を利用して壁面を形成しているが、その他は玄室同様、小口積の側壁面となっている。

羨道床面は玄室床面より約10cm高くなっており、玄門部に框石が設けてある。この框石は85×35×10cmの一枚石で、床面に10cmほど埋められていた。床面の敷石は、玄室部にくらべてやや小形である。

石室の閉塞は、羨道部および玄室に80cmほど入ったところまでなされており、最初は羨門部のところからはほぼ羨道全域にわたって、閉塞石があったと考えられる。

C 遺物の出土状況

玄室床面上、約10cmのレベルから相当量の人骨片を発見した。これらの人骨片は、遺存状況がよくないが、頭蓋骨などもみとめられて、3体あるいは4体の埋葬が考えられる。この人骨群とともに、炭化物をはじめ、奥壁から約80cm、東側側壁から約40cmの地点より宋銭「皇宋通宝」(北宋・宝元2年、1039AD)1枚が出土している。人骨群は玄室のほぼ中央と東側側壁に近接して、散乱状態で出土しており、かき寄せられた感じが強い。

人骨出土面から下方に5cmほど黒色土があり、床石の下にまで連続している。副葬品は床面

およびその上の黒土層中から出土した。

玉類は玄室の中央よりやや羨道よりの部分に、3群にわかれて存在した。第1群は、西側壁の中央部から約20cm東方の地点にあたり、径10cmの範囲にガラス小玉が33個みとめられた。第2群は、1群の南約30cmの地点であり、小玉96個を出土した。第3群は、玄室のほぼ中央部で、小玉34個のほか、丸玉7個、切子玉3個が発見された。なおそのほか丸玉・切子玉・小玉などが数個づつ散乱の状態出土した。

土師器は玄室中央部のやや西側の地点から、底部を上にして2個体の坏形土器が出土した。須恵器は、瓦の破片3個が、人骨の出土レベルより5cmほど下に発見された。また突壁から60cm羨道よりの西側側壁に近い地点から、鉄器破片2個が出土したが、原形は不明である。

上述の玄室内からの遺物状態のうち、ほぼ原位置にあると推定されるものは、玄室中央部の第3群玉類と土師器であろう。多少、散乱した痕跡もみとめられるが、第3群玉類のあり方から、切子玉2個一対が2組あり、それらの中間にもっとも大きい切子玉1個があることは注意されよう。この点から第3群玉類の構成は、切子玉と丸玉・小玉とからなる首飾りであったと考えられる。

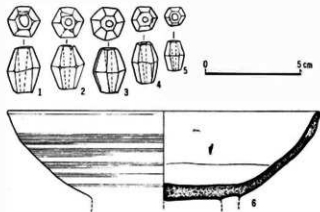
閉塞石に混じって、山杯が1個出土している。いま6片に割れているが、閉塞石がこの山杯の時代に動かされたと推察することができるであろう。

D 遺物各説 (第19図版, 第18図)

玉類 小玉 計166個が発見された。すべて玄室床面直上の黒色土層中から出土したものである。ガラス製で径2.7~5.0mm、厚さ1.0~2.0mm、孔径1.0~1.5mmを測り、紺色・黄色・緑色にわけられる。黄色の小玉は1個のみで、他は紺および緑色である。

丸玉 計9個が出土している。すべて床面上の黒色土層中で発見された。径6.4~9.2mm、厚さ4.5~7.0mm、孔径1.0~2.5mmほどのもので、蛇紋岩製の例2個、他は濃紺色のガラス製である。

切子玉 計5個すべて水晶製である(第2表)。玄室内の床石上の黒色土層中から発見された。どの例も風化あるいは磨滅により多少不透明になっており、長さ2cm前後で、7面をつくり出した1例のほかは、他はすべて6面づくりであ



第18図 長原第11号墳出土遺物実測図 (1:2)

第Ⅲ章 古墳各説

る。これらの切子玉の穿孔は、すべて一方からなされ、その反対面をほぼ同じ大きさで浅く抉りとるように穿孔している。このほか水晶片1個が出土しているが、おそらくは切子玉の破損したものと思われる。

実測図 番号	最大長	上面径(孔径)	下面径(孔径)	最大径	面数
1	24.0	8.8 (6.5)	8.6 (1.6)	16.1	6
2	22.4	8.8 (4.0)	8.4 (1.0)	16.2	6
3	23.7	8.2 (3.8)	8.2 (1.4)	17.3	7
4	21.6	8.0 (3.4)	7.9 (1.2)	13.1	6
5	15.0	6.5 (3.8)	6.8 (1.0)	9.7	6

第2表 第11号墳出土切子玉計測値表(単位mm)

考えられる。

須恵器 取の破片が3個出土した。いずれも胴部の資料であり、口縁部、頸部の形は不明。胴部に2条の沈線がめぐり、その中間帯を簡状施文具による斜行刺突文が埋めている。また胴部器面には自然釉の痕跡がある。

山 坏 閉塞石の間から単独に出土した。(第18図6)。完形に近いが高台が欠損している。口径16.5cm、口縁部はゆるやかな弧を描いて内灣し、口縁部上端ではわずかに外反気味となる。器肉は薄く4mm前後である。底部には高台がついていたが、いまは欠失していて痕跡がみとめられるだけである。胎土・焼成ともに良好で灰白色を呈し、内外面に薄く灰釉がほどこされ、光沢がある。底面には糸切り痕があり、胴上半部は横なで、下半部は窠による整形痕がのこっている。おそらく平安時代後半のものと思われる。

古 銭 玄室内の床面より、かなり高いレベルでみとめられた人骨の直下から発見された「皇宋通宝」である。いわゆる宋銭であり、西暦1039年、北宋の宝元二年の鑄銭であり、平安時代中期にあたる。この皇宋通宝が玄室内の蓮華埋葬と全く関係がなかったとすることは不可能であり、前述の炭道部閉塞石の中から出土した山坏の存在と考えあわせ、平安時代後半期に、本古墳が埋葬に再使用されたことの可能性が高い。

人 骨 蓮華埋葬の具体的事実を示す人骨の出土は、既述のごとく玄室の床面上10cmのレベルであった。部分的には床面上約20cmにも達した例があり、副葬品の出土レベルとは明白な相異があった。前述の宋銭が、これらの人骨群の直下より出土している点から考えると、この蓮華埋葬は、おそらく平安時代の後半期におこなわれたと考えねばならないだろう。それが石室築造後の埋葬と連続するものか、時間的な断続があって、石室の再使用であったかの点についての見解を出すことは、きわめて困難なことである。しかし、人骨にともなって発見された副葬品が、古銭をはじめとするきわめて少量のものであった点を考慮すると、埋葬年代を異にしていたものとするべきが至当と思われる。

土師器 2個体出土しているが、いずれも破片となっている。二例とも坏形土器で、底部と胴部がのこるのみである。色は茶褐色で内底面が黒色となりみがかれている。底部は平底で糸切り痕をもっている。土師器としては終末期に属し、国分式土器と

人骨の鑑定については、東京大学人類学教室の鈴木尚博士をわずらわせ、次のごとき結果が報告されている。

人骨は保存状態が悪く、またいずれも細片となっているため明瞭度を欠いている。しかし骨片および歯冠から壮年男性・壮年女性各1体と、下顎骨の判定から老年男性1体の埋葬が確実である。また別の骨片と歯冠とから、老年には達していないが、女性1体の埋葬がみとめられ、最低3体あるいは4体の埋葬がおこなわれたと推定されている。

E 第11号墳の提起する問題

第11号古墳においては、横穴式石室の築造時の床面を基準とする遺骸埋葬と、床面上に10～20cmの土砂の堆積後に、あらためて埋葬を実施したらしいという二時期にわたる使用が指摘できる。その後半の例は、すくなくとも、平安時代後葉の埋葬と思われる、石室床面における本来の埋葬は、古墳時代終末期になされたものであり、その時期は7世紀後半か、あるいは8世紀にかかると考えてよいであろう。年代を決定する有力な資料に欠けてはいるが、須恵器(線)は古くとも第4型式の終末と思われる、実年代としては7世紀終末頃ではないかと推定される。

被葬者の性格などについて、いまここで軽るがしく論断することはできないが、積石塚とわずかながら銅張りを有する横穴式石室の存在とは、長原古墳群の他の古墳との連関のうえにおいても、一つの特異性をもつものではあるまいかと考えられる。(西田正弘)

第6節 第12号墳の調査

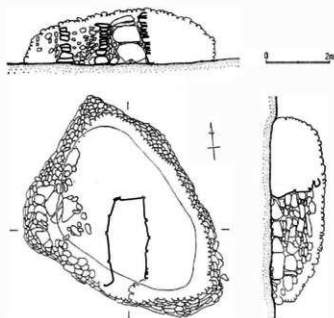
A 古墳の位置と外形 (第20図版, 第19図)

第12号古墳は、保科川によって形成された扇状地の、末端近くに築造された長原古墳群のうちでは、もっとも低い地点に位置している。本古墳は、第11号墳の西方34m、第13号墳の北北西40mの地点に位置し、西方約70mに第14号古墳が存在する。

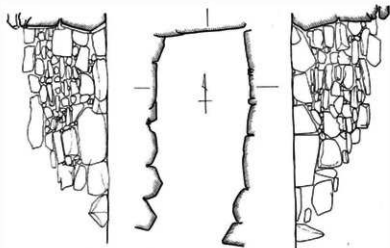
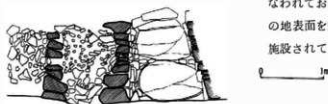
墳形はかなり変形し、平面形はほぼ三角形をし、各辺が6×6×7mで、高さ1.6mあり、全形として截頭三角錐状を呈している。墳丘はいわゆる積石塚であり、大小の河原石を乱石積にして、土砂の混入は全くみとめられない。

B 内部構造 (第21・22図版, 第20図)

南に開口する横穴式石室である。玄室の平面形は長方形を呈し、やや銅張りの傾向がみとめられる。玄室の現存長は2.6m、奥壁巾1m、玄室中央部が、巾1.3m、玄門部巾1mで、玄室の中央部が、もっとも巾広がっている。奥壁の高さ1.45m、側壁高さ1.2mである。石材は



第19図 長原第12号墳墳丘実測図 (1:10)



第20図 長原第12号墳石室実測図 (1:60)

墳丘の石と同種の河原石を用い、奥壁は $60 \times 90\text{cm}$ の石2枚を積みかさね、さらにその上に長手の石を横につみかさねている。側壁は、大小の石を小口積あるいは横口積とし、東側壁はほぼ垂直であるが、西側壁はやや内傾している。天井石は全く失われていた。

側壁背後の裏ごめ石は、側壁とそれから約1m外側のところに構築された垂直状の壁面との間隙をみたしていた。この裏ごめ石は、側壁と同じ高さまでおこなわれており、基盤は当時の地表面を20cm掘りこんで施設されていた。

C 遺物の出土状況 (第23・24・25図版)

第12号古墳の石室の床面は3層にわたってみとめられ、ほとんどの遺物は最下層から出土した。上層の2面の床からは、人骨が発見されている。われわれは最上層の床を第1面、中間の床を第2面、最下層を第3面の床としてとらえることにした。

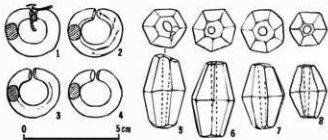
第1面の床から出土した人骨は、鈴木尚博士のご鑑定によれば、若年の女性人骨と推定され、相当量の木炭と須恵器片・土師器片が出土した。

第2面の床からは、人骨のみが出土しており、すくなくとも2体以上と推定される。現在までに判明しているところでは、20才代の男・女性各一体ずつがあきらかとなっている。

第3の床面からは、土師器、玉類、鉄製品と人骨が発見された。人骨は3体以上の埋葬と推定され、奥壁附近に集中していた。人骨の保存状態は不良で、鈴木尚博士によれば、壮年男性と若年の男・女性が一体づつみとめられるという。また玉類は、奥壁に接近した西側壁寄りに発見され、それよりやや東に紐が巻きついた金環が出土した。玄室中央部からは鉄製大刀把頭1個が、また西側壁沿いの中央部からは鉄鍔片数個が出土した。

D 遺物各説 (第26図版、第21・22図)

金環 4個出土している。いずれも銅地に鍍金をした通有のものである。4例とも円環の大きさはほぼ等しく、径3cm前後である。また断面は、長円形を呈し、長径9mm、短径6mm前後を測る。とくに環体の断続部に紐が巻きついている例(第21図1)は、金環の使用方を明確にする点で、注目すべき資料であろう。紐は径1mmほどの撚紐であり麻紐と思われる。



第21図 長原第12号墳出土遺物実測図(1) (a: a)

切子玉 4個発見された。

いずれも水晶製で、最大の例(第21図6)は長さ4.1cm、径1.9cmで6面体である。また最小例(第21図8)は、長さ2.8cm、径1.9cmで6面体である。穿孔は片面からのみおこなわれている。

玉類 ガラス製丸玉30個、ガラス製小玉78個が発見された。丸玉は大形例は径1cm、小形例で8mmを測り、濃紺色を呈する。小玉は径5mm乃至4mm前後の通有の例で、緑色の例11個と黄色例3個のほかは、すべて紺色である。形状はいずれも正円の例はなく、断面が方形あるいは三角形に近い不整形の例が圧倒的に多い。

刀子 全長14cmを測り、鋒と茎の一部が欠失している(第22図1)。全面鉄錆におおわれ、刃

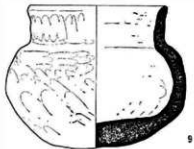
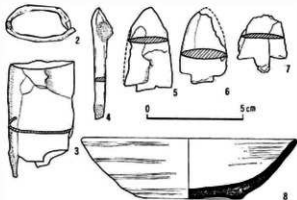
第三章 古墳各説

部も大半失なわれている。身の長さは9cm、中央部での身巾2cm、重ねは3.5mmである。基の現存長は5cmであるが、茎尻が欠けているため全長は15cmを超えていたであろう。

黄金具 鉄製の楕円形を呈する環状の金具である。全面に発錆をみるが、大刀の黄金具と思われる(第22図2)。長径3.5cm、短径1.8cm。

鉄製把頭 円筒状の鉄製品で長さ6cm、巾3.5cmである(第22図3)。破損が著るしく身的一端が失っている。おそらく円頭大刀の把頭であろう。

鉄 鏃 4例出土しているが、いずれも破損している。大別して2形式に分類され、尖根形式(第22図4)のもと、平根形式(第22図5~7)とがみとめられる尖根鏃は鋒と棒状体との区別が



なく、鋒は両丸造三角形式で全体として細身である。平根鏃は両丸造三角形式で長さ4cm、身巾2.5cm、わずかに鬚状をつくり出している。茎はすべて欠失している。

土師器 杯(第22図8)と小形埴(第22図9)が出土した。杯は口縁部がゆるやかに内彎し、口径11.5cm、高さ3.2cm、底径5cmを測る。全面赤褐色を呈し、焼成はあまりよくない。器面にはロクロ痕がみとめられ、底部には糸切痕がみとめられる。鬲分式土器としてよいであろう。埴は口径7.2cm、胴部最大径9.5cm高さ7.5cmの小形のもので丸底である。器内は比較的厚く、黄褐色で焼成度はよくない。土器の内外面にはヘラによる整形痕がみられる。口縁部はほぼ垂直に近く立ちあがり、丸底であるた

第22図 長原第12号墳出土遺物実測図(2) (1:1)

め不安定の感はまぬがれない。鬲分式土器の範疇に属するものと思われる。

E 本古墳の提起する問題

第12号墳の墳形は、冒頭で述べたごとく墳裾が人為的な変形をうけて、現在は三角形になっ

ている。この形状は、築造当時のままとは到底考えることはできない。ところが、本古墳では石室の南方において、羨門部の前面にひろがる前庭部があきらかとなり、石室に用いている石と同様の河原石が、敷きつめてあったことを確認した。これらの河原石は地山の直上におかれており、黒色上層がその上についている事實は、石室の構築と墳丘の築成とに十分に関係があると断じてよいだろう。したがって、われわれが前庭部とした遺構は、墳丘の形態と関連があり、前庭部の線群の末端が墳裾であったと考えられる。この推定に誤りがなければ、本古墳の墳形は、現在の三角形とはことなり、方墳であった可能性が強い。

また石室は羨道部がほとんど破壊されて、調査しえたのは玄室のみであった。ところが、前庭部が明確になった結果から推定すると、すでに失われた羨道は玄門より2.2mの長さを有していたことになる。すでに調査した玄室の現存長が2.6mであるから、推定した羨道の長さを加えると、築造時は長さ約5mの石室であったと思われる。

本古墳の築造年代に関しては、副葬品の組み合わせから、古墳時代後期に属することは自明のところであるが、とくにクロコロ引きで、糸切痕をもつ坏形土師器が出土している点を考えると、終末期の古墳の様相を備えているとみられる。われわれの考定では、本古墳の最終の埋葬が8世紀代か、場合によっては9世紀初頭頃にまで下降するのではないかということである。既述のごとく3回にわたる遺骸埋葬がおこなわれており、副葬品にも金環、切子玉をはじめ、平根鏡が出土している点を考えると、7世紀終末か8世紀頃から、かなり長期にわたって、本古墳が埋葬に用いられていたと思われるのである。勿論、被葬者間の身分的な関係は、家族関係を想定するのがこの場合にはもっともふさわしいであろう。(金森喬子・折尾 学)

第7節 第13号古墳の調査

A 古墳の位置と外形 (第27図版、第23図)

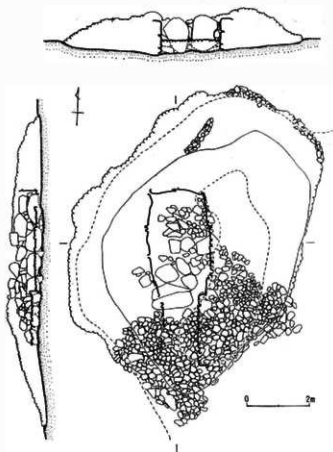
第13号墳は、長原古墳群のほぼ中央に位置し、北35mの所に第11号墳、東40mの所に第8号墳、北西35mの所に第12号墳、南方約100mの地点に第10号墳がある。

墳丘は、南北長10m、東西8.3m、高さ1.5mの規模で東と西にややふくらみをもつ楕円形である。しかし、墳丘の大半は崩壊し、墳頂部には側壁の一部と思われる40~50cm大の石が露出し、また奥壁の石が西側附近に出されていた。とくにその状態は西側において著しく、墳頂部付近では20cm程の円礫が二次的な状態で積み、墳裾も明らかに原形を保っていると思われるのはほとんど認められず、20~30cmの円礫が上から転げ落ちた状態であった。ただ、南西の隅は直角となり北へ3.7m、東へ1m、各々2~3段の石積で延びている。この一角の状況からみると、本古墳の墳形は方形と云えるであろうが、耕作や石材採取のために大きく変形しているとみられ、築造当初の形状については明確でない。墳丘の東側に数本のトレンチを設け、墳裾

第三章 古墳各説

の探査にあたったが、表土上面より30~40cmの深さで現在の裾より東方1mばかり石積が続き、その石積の状態は1~2段で、墳丘のそれよりは比較的小形の石が用いられており、平面的にはぎっしりと詰まっていた。しかし、その状態は南東隅より北へ3m程度の範囲にしか認められず、他のトレンチでは石すら発見できなかった。

このようにわれわれは、古墳の原形を明確にする手がかりを何一つ発見できなかった。ただ、高さだけは側壁が露出している石室の高さから、現在の1.5m以上の高さをもっていたことを推定できるだけであった。

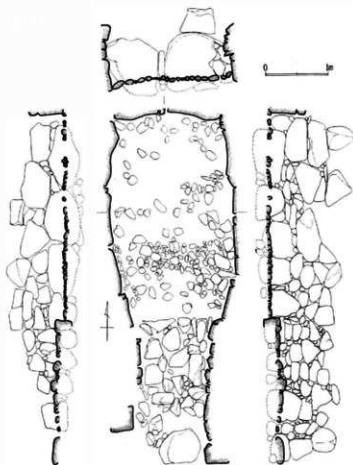


第23図 長原第13号墳墳丘実測図 (1:120)

B 内部構造 (第28・29図版、第24図)

墳頂部はすでに崩壊し、東壁の一部が露出していたため、主体部の位置を知ることはきわめて簡単であった。主体部上の除石を行い、実測の結果、主軸線を北2度西におき、南に開口する両袖形横穴式石室を確認することができた。石室全長5.5m、玄室部長さ3.27m、羨道部長さ2.23mで、幅は奥壁近くで1.65m、中央部で1.92m、玄門近くで1.5mのやや胴張り状の玄室である。羨道部は羨門で1.15m、中央で1m、玄門で1.1mの幅をはかる。奥壁は、幅、高さとも約80cmの石が1段2枚 かなり、西側壁は高さ40~50cm、幅80cm~1mの石を2段に、東側壁は4段に積み、下方1~2段は大形の石を用い、上方には30~40cm程の石積みとなっている。いずれにしても石室は完存しているわけではないから、その全容を知ることはできない。

現存する玄室の高さは、東側壁で4段の石積みのみがみられ1.30mをはかる。玄室の高さを復原推定すると、両側壁は4段、奥壁は2段の石積みからなり1.3~1.5mの高さをもっていたと思



第24図 長原第13号墳石室実測図 (1:60)

の間にもみられ、二次的な堆積とも思えるが、床面での黄褐色砂の状態は部分的ではあるが意識的に敷きつめたと思われるところもあった。

羨道部の床面は、大形の石を使用しており、明確に発見することが可能であった。さらに、玄室部床面のレベルより1.8cmばかり高くなっていた。

なお、遺物の取上げが終了したのち、玄室床面下部の調査をおこなったが、奥壁よりでさらにいま一枚の床面らしき敷石を発見した。しかしそれは一部分であって、全体的にはおよんでいなかったため、一つの埋葬の床面と断定することはできなかった。後述する副葬品の出土状態からみても、本古墳には追葬ということが十分に考えられ、下方の床面らしき遺構も副葬品の発見はなされなかったとしても、無視することはできないであろう。

床面の礫を掘り進むと、黒色土層・褐色土層(地山層)となり、礫層の厚さは10~15cm、黒色土層は5~10cmをはかる。この層序は墳裾探査の為のトレンチでも同様の所見をうることがで

われる。

羨門近くの両壁は崩壊していたが、東壁で羨門と断定できる石積み、現墳裾より内側1.5mの所で確認した。羨道部両側壁の石積み状態は、羨門・玄室部で30~50cmの石が4~5段に積んであり、その間は大形の石の間隙に小石を積み込んだ状態であった。それは東側において特に顕著であった。さらに、奥壁から羨門部へ向うに従って、側壁の石も大形から小形へと変化している。

石室床面は、玄室部で10~20cm大の円礫を敷きつめており、その間に黄褐色砂が混っていた。これと同じ黄褐色砂は石室内部におち込んでいた石

C 遺物の出土状態 (第25図)

石室玄室内の副葬品は、そのまつまり具合から6群にわけられる。すなわち、玄室の奥壁寄り東側(A群)、同中央部(B群)、同西側(C群)、B群の南(D群)、更に玄室内羨道寄り東側(E群)同西側(F群)から出土した。

A群には、勾玉3個、管玉2個、切子玉1個、金環2個、銅釦2個および丸玉・小玉が認められた。金環と銅釦を除いた他はほぼ1点に集中して発見された。鉄器としては、大刀1口、刀子2口がある。なお、銅釦は2個が重なって腕に着装されていた。玉類の付近にも人骨が部分的に遺されていた。

B群の中心にはガラス小玉が多く、その中に勾玉(瑪瑙製)3個、管玉1個、切子玉2個、丸玉、石製丸玉が散在し、また奥壁よりには須恵器(須)が1個おかれていた。なお、扉の東側には人骨がみとめられた。

C群には、小玉2個、丸玉・切子玉2個、勾玉(瑪瑙製)1個、金環2個があり、この南方に刀子が1本発見された。また、大刀の黄金具も出土した。なお、B群・C群と奥壁との中間部および刀子の出土地点の南側に多数の歯冠が遺存していた。

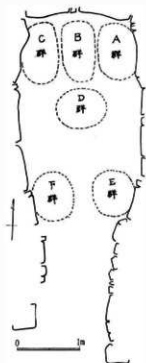
D群の副葬品は、B群の南側の石室中央線上に分布する。丸玉、勾玉6個(水晶製2個、瑪瑙製・碧玉製・蛇紋岩製・滑石製各1個)、切子玉5個、管玉2個、霰玉3個、金環1個があり、そのうち水晶製勾玉1個、管玉2個、切子玉1個、石製丸玉、ガラス丸玉数個は、この群の端近くにある埴形土師式土器の下に存在した。また、A群より刀子およびその破片と、滑石製有孔円板があった。

E群は、鉄鍔と金環3個からなっている。鉄鍔は完形をなすものが1本もなく、またその本数も不明であるが、鋒は3例あった。

F群は主としてガラス小玉からなり、他には鉄片(用途不明)があった。ガラス小玉は紺色を見せるものがほとんどであるが、緑色例も2例あった。

E・D群の間には管玉1個、金環5個、ガラス小玉等が散在し、D・F群の間には金環2個、刀子1口があった。

玄室内における副葬品の配置は以上のごとくであるが、金環の15個という数から考えて、すくなくとも数名以上の被葬者があったと考えることもできよう。しかし、A群の大刀の装具が



第25図 長原第13号墳石室内遺物配置図 (1:40)

C群中にあたり、切子玉、管玉が集中せず、各群に散在しているために各被葬者の副葬品を同定することは不可能である。

羨道の出土遺物は丸玉1個のみで、羨門より奥に73cm、西側壁より17cmの所より出土した。石室外のものとしては、羨門前方付近より須恵器の破片が発見されただけである。

D 遺物各説 (第33・34・35図版、第26・27・28図)

1. 装身具

(イ) 銅釧(第26図1・2) 2個出土した。ともに平面はほぼ円形をなし、断面は方形であるが、外側の面が少しふくらみをもつ。外縁には刻み目があり、上縁と下縁ではその刻み目は連続せ

ずに、それぞれ別々に打刻されたものと思われる。計測値は、直径7.28cm~6.85cm、幅4.4mm、厚さ4.0mm⁽¹⁾と、直径7.2cm~7.0cm、幅5.0mm、厚さ4.0mm⁽²⁾をはかる。

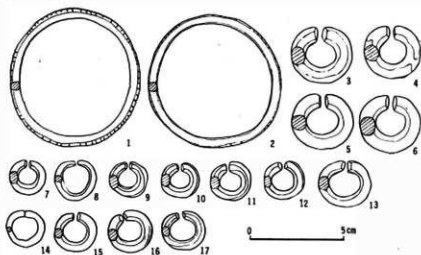
(ロ) 金環(第3表・第26図3~17) 合計15個が出土している。いずれも銅地に鍍金がみとめられるが、保存状態はよくない。形は楕円形から三

番号	長径	短径	巾	厚さ	断面形	形状	備考
3	32.4	29.4	8.0	9.4	楕円形	楕円形	6と対
4	31.0	28.5	7.3	7.7	ほぼ円形	＊	5と対
5	37.0	28.8	7.9	7.4	＊	＊	
6	32.5	29.6	8.0	9.5	楕円形	＊	
7	19.7	18.1	4.4	7.6	長楕円形	円に近い楕円	9と対
8	22.1	22.2	3.7~2.7	3.5~2.7	円形	つながぎめを一边とする角の丸い三角形	14と対
9	20.0	18.4	4.7	7.5	長楕円形	円に近い楕円	
10	25.0	18.6	4.9	7.1	＊	楕円形	
11	21.6	20.4	4.7	7.0	＊	円に近い楕円	12と対
12	21.8	20.4	4.8	7.0	＊	＊	
13	27.9	25.0	5.7	7.0	円形	細味の楕円形	
14	21.0	19.4	3.3~3.0	3.0	＊	つながぎめを一边とする角の丸い三角形	
15	22.6	20.7	4.9	4.8	＊	細味の楕円形	17と対
16	24.1	21.8	5.4	5.4	＊	＊	
17	23.0	20.6	5.0	5.0	＊	＊	

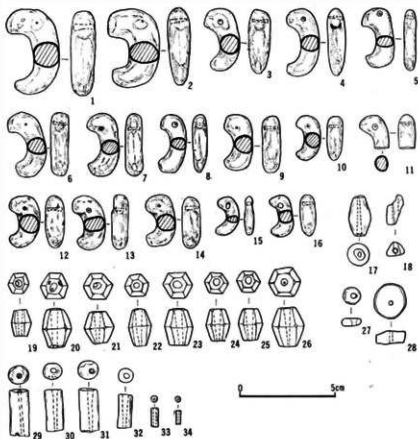
第3表 第13号墳出土金環計測値表 (単位mm)

角形に近いものまであり、断面も円形のものから偏楕円のものまである。大きさは長径で3.25cmから1.97cmを示す。

(ハ) 勾玉(第4表・第27図1~16) 瑪瑙製9個、水晶製3個、碧玉製2個、蛇紋岩製1個、滑石製1個の計16個あり、「コ」の字形に近いものが多い。整形は比較的丁寧なものが多く、稜線はつくが他は滑らかに磨かれているものもある。穿孔は殆んどが第一次的に片面から貫通させ、その裏面は孔の周辺のみを抉っている。その裏面の第二次的な穿孔はおこなわれていないものもあり、また第一次の穿孔面も一定していない。また、ほぼ同じ太さで穿孔しているも



第26図 長原第13号墳出土遺物実測図(1) (1:2)



第27図 長原第13号墳出土遺物実測図(2) (1:2)

第13号墳の調査

番号	長さ	巾	胴部の巾	孔部の厚さ	第1次穿孔の径	第1次穿孔の径	第2次穿孔の径	材質	備考
1	45.4	27.5	15.7	12.5	B	4.0	6.7	瑪瑙	
2	41.8	27.0	15.5	11.6	B	3.9	6.9	ク	
3	34.4	18.4	11.0	9.6	A	3.5	4.0	ク	
4	36.6	18.4	11.4	8.6	A	2.9	5.0	ク	
5	33.9	16.6	10.0	6.6	A	3.6	無	碧玉	よく整う
6	35.0	18.8	11.0	8.8	B	3.4	無	瑪瑙	少し整形痕のこる
7	34.4	17.7	10.8	7.6	A	2.9	5.0	ク	
8	31.0	15.4	11.0	6.9	A	3.7	2.6	ク	内側に稜線入る
9	30.0	15.6	10.8	9.4	B	2.8	4.0	水晶	透明度高い
10	24.4	14.0	10.0	8.7	B	2.8	3.9	瑪瑙	尾がすぼむ
11			8.0	8.0	A	3.9	無	水晶	半欠透明度高い
12	28.7	17.0	11.6	10.0	A	3.1	6.2	瑪瑙	尾がすぼむ
13	28.5	16.8	11.1	9.0	A	3.4	4.7	碧玉	内側に稜線が入る
14	27.4	16.7	10.6	9.6	B	3.6	無	水晶	キズ多く半透明
15	21.2	12.6	7.5	2.1		3.3	無	滑石	孔の両側くぼむ
16	22.8	13.4	8.6	7.0		3.0	無	蛇紋岩	ク

第4表 第13号墳出土勾玉計測値表 (単位mm)

勾玉は「逆C」方向に向けた際の上面をA、下面をBとし、一次的穿孔の面をA・Bで示す。

番号	長さ	巾	上部径	下部径	孔径	二次的穿孔の有無	備考
17	16.4	8.0	4.8	4.8	2.0		
19	13.5	11.4	6.9	6.9	3.8	有	孔中赤色顔料付着・切子玉
20	19.1	15.2	8.0	8.1	5.2	有	
21	17.0	13.8	7.8	7.0	4.4	無	
22	18.8	12.0	6.9	6.6	3.8	無	
23	19.0	14.6	9.0	9.0	3.9	無	孔中に赤色顔料付着
24	16.1	11.4	8.4	7.8	4.4	無	
25	17.0	13.0	7.9	7.3	3.6	有	孔中に赤色顔料付着
26	20.8	16.0	10.3	9.4	4.4	有	

第5表 第13号墳出土切子玉・霽玉(NO.17)計測値表 (単位mm)

い。長さは2.4cmから0.7cmある。その長さによって3種類に分けることもできよう。

(ハ) 霽玉(第5表・第27図17・18) 3個出土した。すべて琥珀製であるが保存状態が悪く、観察できるものは1例のみである。その1例は、断面が角の丸味を帯びる三角形に近い形で、孔のあけられる面は袈り込まれ、穿孔はほぼ同じ太さでおこなわれている。

(ニ) 丸玉(第7表) 合計53個出土した。材質と計測値により、5類に分けることができる。丸玉A類は黄道出土の1例のみで、黒色と赤褐色がまだらに入る色調を呈するもので、表面は欠

のものもある。ただし、その場合は両面ともにその孔の周囲を広く範囲にくぼめている。長さは4.54cmから2.1cmまでまちまちである。

(三) 切子玉(第5表・第27図19~20)11個出土し、すべて水晶製である。切子の稜はすべて6稜で、稜の角の磨滅もすくない。穿孔はすべて一次的に片面からおこない、その裏面の

孔の周囲は抉られているものと、いないものがある。長さは2.3cmから1.35cmである。

(四) 管玉(第6表・第27図29~34) 合計6個出土した。すべて碧玉製で濃緑色から淡緑色まであり、濃緑色を呈するものが多い。研磨の状態は良好で艶がある。穿孔はすべて片面からなされており、その裏面に二次的な袈りを入れるものが1例しかなく、その袈りの範囲も非常に小さ

第三章 古墳各説

番号	長さ	胴径	孔径	一次の孔径及び有無	二次の孔径及び有無	色調
29	24.4	10.0	2.8	有	様2.5	緑色
30	22.1	9.0	3.6	無		濃緑色
31	22.2	10.4	3.3	不明		濃緑色
32	17.5	7.7	3.3	無		灰緑色
33	9.3	3.6	2.0	無		淡緑色
34	7.4	3.4	1.5	無		濃緑色

第6表 第13号墳出土管玉計測値表 (単位mm)

けている部分もあるが、観察の結果良く表面が研磨されて光沢をもつ。球形に近く長径13.8mmある。材質不明ながら石製であろう。

丸玉B類は、全体的に褐色が強く、暗青色、黄色等がまだらに入る色調を呈する石製で、表面はよく磨かれて光沢をもち、胴が張り孔の面は平らで、全体として良く整形がなされている。孔は円形で同じ太さで穿けられている。大きさは径1.07cmから9.9mm、長さ9.4mmから7.1mm、13個ある。

丸玉C類は、表面が滑らかで漆黒色を呈しやわらかな光沢をもつ材質不明(材質は可塑性のあるものと考えられる)のものである。形状はすこし歪んだ球形を示し、孔の面は平らにならず、また孔も不整形である。径は11.0mmから8.6mm、長さ9.4mmから9.2mm。合計4個ある。

丸玉D類は、丸玉C類と同一質の小形のもので胴が張り、孔の面が平らな形で、孔は円形をなし同じ太さで穿けられている。なお、孔の面の平らな部分が両面で平行面をとらないものもみられる。径9.3mmから6.0mm、長さ7.5mmから4.0mm。合計9個あった。

丸玉E類は、丸玉C類、D類と同一材質で造られていると考えられるが、表面の滑らかさや光沢がなく、黒色で表面が粗い。形態は基本的にC・D類と同一である。径10.8mmから7.0mm、

番号	径	長さ	孔径	備考
1	13.8	14.0	3.5	表道より出土
2	10.7	9.2	3.5	
3	10.7	9.1	3.0	少し茶色がかかる
4	10.7	9.0	3.0	
5	10.7	8.8	3.4	
6	10.6	9.2	3.1	
7	10.6	8.5	3.3	
8	10.5	9.4	3.4	
9	10.4	8.9	3.8	
10	10.4	8.8	3.4	
11	10.4	8.7	3.4	
12	10.3	9.0	3.4	
13	10.0	8.7	3.7	
14	9.9	7.1	3.3	
15	11.0	9.0	2.9	
16	10.0	9.6	2.7	
17	8.7	9.2	2.7	
18	8.6	9.4	2.7	
19	9.3	6.2	2.4	孔の面同一方向に傾斜
20	9.0	7.6	2.4	*
21	8.9	7.5	2.5	*
22	8.9	6.0	2.3	*
23	8.9	7.0	2.6	*
24	8.8	7.0	2.0	
25	8.8	6.4	2.4	
26	8.5	6.6	2.5	
27	8.0	4.0	2.0	
28	10.8	8.7	2.3	
29	10.3	8.8	2.2	
30	9.9	7.1	2.0	
31	9.4	7.2	2.0	
32	9.4	7.0	2.3	
33	9.0	7.5	1.7	
34	9.0	7.4	1.8	
35	9.0	6.9	2.0	
36	8.9	6.5	1.9	
37	8.8	7.9	1.9	
38	8.6	6.8	2.0	
39	8.5	7.4	1.8	
40	8.5	7.0	1.5	
41	8.4	7.3	1.5	
42	8.0	7.4	2.0	
43	8.0	6.6	1.8	
44	8.0	6.0	1.5	
45	8.0	5.6	2.4	
46	7.8	5.8	1.6	
47	7.8	5.5	2.0	
48	7.8	5.0	2.0	
49	7.4	6.0	2.0	
50	7.0	5.0	1.8	

第7表 丸玉計測値表 (単位mm)

長さ8.7mmから5.0mmまでである。合計23個ある。

(イ) 小玉(第8表) 合計132個出土した。大まかにみて2種のことなった材質で造られている

番号	径	厚さ	備考	番号	径	厚さ	備考	番号	径	厚さ	備考
1	5.0	4.8		41	4.0	3.1		82	3.4	2.0	
2	5.0	4.0		42	3.7	2.7		83	3.4	2.0	
3	5.0	4.0		43	3.5	3.0		84	3.0	2.0	
4	5.0	4.0		44	3.5	2.4		85	3.0	2.0	
5	5.0	3.9		45	8.4	4.0		86	2.8	1.8	
6	5.0	3.6	孔の面同一方向に傾斜	46	8.0	4.4		87	5.0	3.4	ゆがむ
7	5.0	3.6		47	7.5	5.0		88	5.0	3.0	々
8	5.0	3.4	孔の面同一方向に傾斜	48	7.3	5.0		89	4.7	2.4	
9	4.9	3.6		49	7.0	5.0		90	4.6	3.0	
10	4.8	4.0		50	6.1	6.0		91	4.0	3.0	
11	4.8	4.0		51	6.0	6.5	弱張り少なし	92	4.0	3.0	
12	4.8	3.9		52	6.0	5.6		93	3.8	3.0	
13	4.8	3.8		53	6.0	3.4		94	3.7	2.0	
14	4.8	3.6		54	5.3	3.0		95	3.6	2.0	
15	4.8	3.6		55	5.3	3.0		96	3.6	2.0	
16	4.8	3.6		56	5.0	3.2	弱張り少なし	97	3.6	2.0	
17	4.8	3.6	孔の面同一方向に傾斜	57	4.7	2.0		98	3.6	2.0	
18	4.8	3.5		58	4.4	2.3		99	3.4	2.4	弱張り少なし
19	4.8	3.5		59	4.4	2.0	弱張り少なし	100	3.4	2.0	
20	4.8	3.4		60	4.4	1.8		101	3.0	2.5	弱張り少なし
21	4.8	3.0		61	4.1	2.4		102	3.0	1.8	
22	4.7	3.6		62	4.0	2.7		103	2.7	1.3	
23	4.7	3.4		63	4.0	2.6		104	6.0	4.3	
24	4.6	4.0		64	4.0	2.4		105	5.5	3.0	
25	4.6	4.0		65	4.0	2.4	弱張り少なし	106	4.5	3.0	
26	4.6	3.8		66	4.0	2.3		107	4.4	3.4	
27	4.6	3.7	孔の面同一方向に傾斜	67	4.0	2.0		108	4.4	3.0	
28	4.6	3.4	孔の面同一方向に少し傾斜	68	4.0	2.0		109	3.7	3.1	弱張り少なし
29	4.6	3.4		69	3.9	2.4		110	5.0	3.6	
30	4.6	3.4		70	3.9	2.2		111	5.0	3.0	
31	4.6	3.4		71	3.9	2.7		112	4.1	2.9	
32	4.6	3.0		72	3.8	2.7		113	4.0	3.0	
33	4.5	3.6		73	3.8	1.9		114	4.0	3.0	
34	4.5	3.5		74	3.6	2.4		115	4.0	2.6	
35	4.4	4.0		75	3.6	2.4		116	3.4	2.4	
36	4.4	3.6		76	3.6	2.0		117	3.0	1.6	
37	4.4	3.5		77	3.6	2.1		118	6.0	4.0	茶、灰、白がまだらにはいる。孔の面へこむ。
38	4.4	3.4		78	3.4	3.0	弱張り少なし	119	5.4	2.9	こい茶
39	4.4	3.3		79	3.5	2.6		120	4.4	3.0	黒色で石製か? 弱張りなし
40	4.0	3.5		80	3.4	2.2					
				81	3.4	2.0					

第8表 第13号墳出土小玉計測値表 (単位mm)

る。

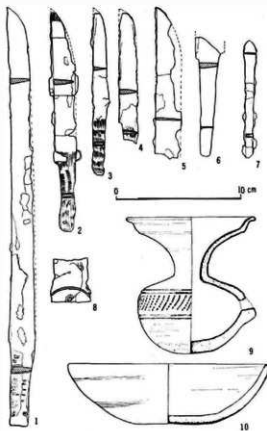
小玉A類は、丸玉E類と同一の材質によるもので、表面の光沢が部分的にのこされているものが多い。形は胴が張り、孔の面が平坦で、孔は平均した径で穿けられている。径5.0mmから3.5mm、長さ4.8mmから2.4mmある。50個出土したが計測可能なものは44個であった。

小玉B類は、ガラス製で紺色、緑色、黄色、褐色など各種ある。形も全体に丸味を帯びるもの、穿孔の面が平坦になるものや不整形なもの、胴が張らずに円筒形に近いものなどきわめて不揃いである。径8.0mmから2.7mm、長さ6.5mmから1.3mm。この類は82個出土したが計測可能なものは76個である。

II 利器類

(イ) 大刀(第28図1) 短刀身小形のものが1口出土した。全長33.5cm、刃渡り26.6cm、身幅2.15cm、茎長6.9cm、あって全体にやや外反りをみせる平棟・平造り、両区をもつ。茎には木質部の遺存がみられるし、目釘(径3mm、長さ2.1cm)が原状をとどめていた。ほかに鋒部と茎の断片が出土している(第28図5・6)。この両例はおそらく同一の大刀と思われる。なお鉄製貴金具が出土している(第28図8)がこの大刀の付属品とみてよいだろう。長径2.95cm、短径2.0cmをはかる。

(ロ) 刀子(第28図2~4) 刀子と確認できるものは6口出土した。すべて平棟・平造りである。第28図2は、全長17.4cm、刃渡り11cm、両区をもち区部に長径2.0cm、短径1.6cmで楕円形の緑金具が遺され、茎先端近くに目釘孔がある。茎と鋒に木質が付着する。3に示すものは、残存部長12.85cm、茎長さ5.8cmで、鋒先端がわずかに欠損する。楕区はなく刃区も段がなく、茎と刃部とはわずかな傾斜をもって区別される。身幅は、刃区より1.8cmのところから刃区にかけて急に広がる。茎には目釘孔は見当らず、木質部が付着している。4は残存部長さ10.3cm、刃渡り8.7cmで茎の3分の2を欠損する。刃区はなく楕区のみ存する。木質部が茎に遺存する。



第28図 長原第13号墳出土遺物実面図(別紙13)

(イ) 鉄鏃(第23図・7) 全体の遺存するものは1本もなく、すべて破片である。破片中鋒が3例と茎先が7例みとめられ、7本以上あったことは確実である。破片からみるとすべて細根式に属するもので、鋒は三角形式に近い形をなし、莖被の断面は長方形で、茎の断面は円形をなす。

■ 土器類

(イ) 須恵器(Ⅷ)(第28図・9) 最大径が口縁部にあり、頸部が細くびれ肩が張り出す。口縁部は外方に開く有段の口縁を形成する。肩と胴との境界は2本の沈線によって劃され、胴上半部にはまた2本の沈線があり、2組の沈線にはさまれる部分には、7本を1単位とする機状施文具による刺突文がある。結局、胴上半部は2組の平行沈線文とその間にある刺突文によって裝飾されている。この文様帯の上に注口部が付けられていることになる。胴下半部には、土器を左回転させて仕上削りをした痕がのこされているが、その痕は底部の下底面までは施されていない。底面はやや平坦になっていて「×」印がみとめられ、おそらく窯印であろうか。なお、注口部は仕上削りののち、指で整形されたものようである。胎土中に細砂粒が混じているが全体として暗灰色を呈し焼成も良好である。口縁部内側および肩一部に自然釉がみとめられる。最大口径10.4cm、胴部径8.4cm、全高10.9cmをはかる。

(ロ) 土師器(Ⅷ)(第28図・10) 高さ4.7cm、口径16cmをはかるやや浅い杯である。内外面ともによく整形されているが、胎土に細砂が混じっていてしまりが悪い。色調は茶褐色を呈する。

(ハ) 有孔円板。滑石製で直径1.94cmのほぼ円形を呈する。円板中央に径2.9mmの孔があり、いわゆる有孔円板といわれるものである。

(ニ) 鉄器片。いずれも小破片で、形状・用途不明である。鉄鏃・刀子などの細片かも知れない。

(宇杉幸知・北村敏子)

E 第13号墳の提起する問題

本墳はすでに大半が崩壊して、石室の上半部と墳丘の大部分は原状をとどめていなかった。しかし、石室内部の副葬品の状態はきわめて良好だったし、墳丘の基底部も部分的にやっとな原状を保っていた。

墳丘では、その築造に際して次のような所見をうることができた。すなわち、まず黒色土層の上面に石室床面を造り、礎を敷きつめてその基礎をつくる。次に側壁からある一定の間隔をもって3～4段の石垣をめぐらし、そのあいだに角礎・砂利・砂をつめ込み石室の裏込とした。そして天井石をのせて円礎をもって石室全体を覆い墳丘を築成する、という順序を踏んだと思われる。われわれの調査では天井石を発見することができなかった。すでに持ち去られたのかも知れないが、あるいは木質板による天井の架構も考えてよいのではないだろうか。石室の規模に比して墳丘が比較的小さいのは、もしかするとこんな所に原因があるのかも知れない。長原古墳群中で、天井石の明らかに遺存する例は第1号墳と第7号墳の2基だけである。この2

第Ⅲ章 古墳各説

基の古墳は、いずれも大規模な横穴式石室を有する点で、他の第11号墳、第12号墳や第13号墳と趣を異にしている。

副葬品の面からみると、本古墳はわれわれが調査した古墳の中で最も多量な副葬品を有していた。第11号墳や第12号墳の場合、石室内部に2～3枚の時期を異にする埋葬床面をもち埋葬の2～3回にわたることが知られるが、第13号墳の場合に、現床面下の不明確な床面をのぞいては、重なった埋葬床面をつかむことができなかつた。しかし、前述のごとく副葬品の配置がA一F群に区別されるように、平面的な差異をみとめることができた。各群がそれぞれ時期的に差のあるものとは断じ切れないが、追葬による結果生じた現象であるとみて大過ないと思われる。

装身具や刀剣類などから古墳の年代を算定することはむづかしいとしても、須恵器器塚や土師器塚からみると西暦8世紀を中心とする年代が考えられ、須恵器器塚が土師器塚よりも若干ながら先行するものと考えられる。このことから第13号墳における追葬のあったことが充分想像できるであろう。

副葬品全体を見わたして、玉類を中心とする装身具の多いことに気付くのである。そして玉類の中でも比較的バラエティーに富んでいることにも注意をする必要がある。勿論各グループにおける玉の組合わせや、他の装身具との組合わせを比較検討する必要があるが、被葬者の数量や性格との関連性について重大な資料を提供するものとなるから、さらに詳細な検討を要する。

(岡上善庸)

第Ⅳ章 長原古墳群の形成過程について

保科川扇状地周辺における古墳群や、隣接する大室古墳群のごとく、いわゆる積石塚古墳を主体とする古墳群の成立過程を、他の地域の後期古墳群の場合と比較してみることはかならずしも無駄ではないであろう。この長原古墳群や大室古墳群が、積石塚古墳を主体として、いろいろな種類の古墳が存在するからという表面上の問題ばかりではない。

善光寺平を中心とする古墳時代は、あたかも千曲川流域をその媒介とするかのごとき様相を示している。信濃、あるいは北信地方における初期古墳の成立は、川柳將軍塚古墳や森將軍塚古墳にみられるごとく、近畿地方の前期古墳の様相をそのまま伝えるような内容を示す古墳によって代表される。そしてそれらは善光寺平の東北辺、千曲川流域に面する山頂にいずれも営まれていた。

河川の流域によくみられる古式古墳の性格として、水利権の掌握者との関連が説かれている。川柳將軍塚古墳や森將軍塚古墳の場合にもこれまでの解釈をあてはめてもよいだろう。つまり善光寺平の古墳文化の開花は、やはりおそらく千曲川の水利の便が大きく影響を与えているものと考えて差支えない。とくに中部山岳地帯の農耕社会は、周辺先進地域との交渉を常に重要な条件として考慮しなければならなかったし、加えて、東海地方、南信地方や北陸・越後方面との中継点としての役割をも果たさなければならなかったと推定される。

限定された農耕水田経営のみならず、常に独特の生産基盤を成立させて行くことが、古墳時代全般にわたって続けられた彼等の努力であったにちがいない。速く畿内の政治の中心から距り、彼等に及んだ政治はその地に畿内的な内容をもった古墳をのこしていったのである。

信濃全体の様相として縄文時代以来、山岳地帯とはいいながら、弥生時代を通じていわゆる地域的性格の分難がむづかしいといわれている。土師式土器の分布も、決して偏った傾向をみせないし、その遺跡の分布や在り方も何等、特殊な状況を示していない。しかし、土器文化の示す様相が他地域に比して変化がないと言っても、その実質の内容については若干の差異はあったにちがいない。すくなくとも、川柳將軍塚古墳や森將軍塚古墳をのこした人々の伝統は次代に必ず継承されるはずである。しかし、その文化の伝承が他の平野地域における継承の仕方とは若干ことなっているように見受けられる。

一地域内における古墳の継承状況は、かならずしも漸移的ではない。しかし、いくつかの要素を分析してみると、その大部分は次代に受け継がれていて、古墳の立地や内部主体・副葬品の中に共通する現象をみせるのが常である。

桐原健氏がかって指摘されたように、せまい善光寺平における古墳は、その立地条件による

註 (1) 桐原健「善光寺平における古墳立地の考察」信濃 第16巻第4号 昭和39年

第8章 長原古墳群の形成過程について

内容の相異がみられ、断続する古墳築造の現象面での差異を捉えているごとく、後期後半の古墳群の成立過程はきわめて複雑な様相を呈している。特に、積石塚古墳を主体とする古墳群の形成は、伝統的な積石塚古墳の性格とは趣を異にしていると思われる。

東筑摩郡安坂積石塚古墳群^{註(2)}や、須坂市鎧塚古墳群^{註(3)}には、内部主体や副葬品の中に中期的な様相を示す古墳が存在していて、それらはかなり独立的な要素をも示している。武器・馬具を中心とする副葬品の占める年代的な位置から考えてみると、それらの古墳はかなり同類古墳との群集現象をみせるのが例としては多いのではないだろうか。群集墳の契機を作っている中期中葉以後の古墳が、善光寺平周辺ではあまり存在せず、それが存在していてもかなり独立した姿をみせているところにも北信地方一帯の古墳の特徴があるといえよう。

長原古墳群調査の結果から、われわれは長原古墳群の形成時期の第一歩を西暦6世紀の末葉から7世紀初頭のころと考えるにいたった。積石の明瞭な墳丘をもち、かなりの規模をもつ横穴式石室を中心とする長原古墳群の成立は、中期中葉前後の古墳とはおよそ無関係に築造されたと思われる。大室の大古墳群とすぐ隣接して存在する長原古墳群は、またさらにいくつかの小古墳群を控えている。忽然として発生したともみられる大室古墳群やこの長原古墳群は、性格の上でも他の古墳とは大いなる相異を有し、その成立期も西暦6世紀末葉から7世紀初頭にかけてと考えられ、特に長原古墳群は西暦9世紀にまで古墳群としての寿命を保ち続けたのである。

長原古墳群の成立は、善光寺平周辺に定住する彼等の墳墓の地に限定された結果によることは勿論であるが、その裏面に存在する政治的なあるいは社会的な背景は、断続する古墳群の成立過程と、性格伝承の断絶という現象面からのみ考えられるべきものでもなさそうである。

善光寺平の古墳成立当初は、千曲川がきわめて大きな役割を果たしていたと考えられるが、いくつもの古墳群の成立する段階に到達すると、もはや千曲川それ自身だけではなく別な要素が加わり、信濃あるいは北信地方独特の社会的基盤が成立したと考えてよいだろう。この独特な社会基盤の形成されるプロセスには、この周辺一帯を統治するべき首長の存在はきわめて大いなる価値を有し、表面的な政治権力だけでなく、社会の基礎的な統治をも実施しうべき首長の存在が必要な条件であった筈である。根をおろした地域統治が古墳築造に反映していることはいうまでもないが、古墳群の成立は大首長の存在を否定するとともに、地方統治の完了と地域別による独自の生産形態や政治組織の一端をのぞかせてくれるのである。

長原古墳群の成立についても雑多な問題が介入しているのであろう。

(小林三郎)

註 (2) 大場磐雄他「長野県東筑摩郡坂井村安坂積石塚の調査(II)」信濃 第16巻4・6号 昭和39年
(3) 永峯光一・亀井正道「長野県須坂市鎧塚古墳の調査」考古学雑誌 第45巻第1号 昭和35年

第V章 長原古墳群の性格

古墳群の全体像

長原古墳群の調査にあたり、われわれは最初に古墳群の全体的な規模と様相を捉えるための測量をおこなった。古墳群はすでに県が実施した遺跡調査の段階で、保科川原状地の南東方(高地)から北西方(低地)に分布する各古墳に番号がつけられていた。その結果は18基の古墳が確認されており、すでに破壊されたニカゴ塚古墳など数基を含め、総数20数基からなる小古墳群であった。しかしながら、すでに報告したように、古墳と断定できる例は、保存のため未発掘の1号墳を含めて8基にすぎず、これに前述のニカゴ塚とやはり過去に失なわれた附近の3基を加えると、12基の古墳が、長原古墳群を形成していたことになる。調査の過程で判明したことであるが、立派な石積み製の墳丘をそなえながらも、それらはここ数十年間にわたる開墾などの理由によって、あらたに塚状に築かれたものが意外に多かったのである。こうしてみると、積石塚古墳として、今日のごさされている例のすべてが、確実に古墳であると断定することには躊躇しなければならない。

長原古墳群は保科川が形成した扇状地上に位置するため、墳墓地域としての範囲には、比較的余裕があったと思われる。大正14年に発掘された合掌形石室を内部構造とするニカゴ塚古墳(現在は通称)と、今回調査した第18号墳との間は、約600mの距離がある。今回の調査区域の18基の積石塚古墳も、約400mの範囲に分布していたものである。

さて、すでに述べたような古墳でない積石塚を除くと、12基の積石塚古墳が存在していたことがわかる。しかし今日まで確実な所伝がなく、破壊された積石塚古墳がなかったとはいえないから、長原古墳群の形成直後の実数は、最低12基となり、若し実数の3分の1が破壊されていたとすると、はじめは18基存在したことになる。長原古墳群の現在の分布状況から推定して現在数の倍以上の積石塚が存在したと考えることはできず、多くても20基以下であったと思われる。

この長原古墳群の実態を、松代町大室古墳群の場合と比較すると、かなりの差異のあることがわかる。勿論、大室古墳群の北谷や中谷支群の扇状地上に分布する古墳群とは、同様の状況を示すが、山麓部からかなり急傾斜をもつ山麓面に分布する古墳は、地点によっては、全く密接して営まれており、墳墓地域の展開の諸様相に多様性がみとめられることを指摘しておきたい。

- 註(1) 岩崎長忠「金鐘山古墳」長野県史蹟名勝天然記念物調査報告第5編 大正15年
森本六爾「金鐘山古墳の研究」大正15年の中にも、ニカゴ塚の紹介と、発掘当時の写真が掲載されている。
- (2) 大塚初重「信濃・大室古墳群」古代学研究 第30号 昭和37年
大塚初重「長野県埴科郡大室古墳群の性格」日本考古学協会第15回総会研究発表要旨 昭和30年

第Ⅴ章 長原古墳群の性格

さて、長原古墳群の素描をつづけよう。本古墳群は千曲川に向かって南東方より傾斜する扇状地に、現在は距離約400mの地域内に分布している。そして古墳の分布範囲の横中、つまり北東から南西方向に至る範囲は約200mであり、総面積約80ヘクタールの扇状地のほぼ中央部、はるか長野盆地を望む地点に位置している。大正14年に発掘されたニカゴ塚古墳は、この地点よりさらに200mほど南東方に立地していたので、長原古墳群の中では、もっとも高所に位置していたといえる。このニカゴ塚古墳が積石塚であり、内部構造が合掌形石室であったことは、同じ古墳群の中における、異質な様相として注目しなければならない。今回発掘した8基の古墳が、すべて横穴式石室であったことと比較して、あらためてニカゴ塚古墳の重要性が考えられるのである。しかし、ニカゴ塚古墳の内容については、墳丘と石室の構造につき簡単に紹介されているのみであり、時代を推定する遺物にもあまり恵まれていない。わずかに土師器・須恵器片の出土を伝えているが、詳細はわからない。それ故に、ニカゴ塚古墳が、長原古墳群の中で、いかなる歴史的位置を占めていたかという点は、まことに不明確といわねばならない。

積石塚の問題

長原古墳群の考古学的な特質の一つは、積石塚古墳ということである。われわれが調査した18基とも、すべて河原石と安山岩の角礫を混じえて積みあげた石塚であり、土砂の混入はほとんどなかった。墳丘は一部に方形らしい特徴をみせているものもあったが、方墳と断定することはできない。むしろ大半の古墳が円墳であったと考える。

長原古墳群の中で、ある一古墳のみが墳丘の規模がとりわけ大きく、あるいは特別な石積状況であったということも、みられなかった。ニカゴ塚古墳がやや大きいと思われる以外、今回調査の諸古墳は、直径10m前後、高さ2～3mというほとんど同じ規模の古墳であって、その点では非常に等質的な古墳群であったとみられる。積石の状態も、墳丘の裾が石垣状に施設されて、小口積にした裾石の高さが約50cmを示す例がある以外、墳丘は石を乱石積に積み上げたものであった。この事実は、著名な大宝古墳群などで、積石塚とともに土と石との混合による墳丘や土塚が同一地点で共存しているのとはことなるものであった。

内部構造である横穴式石室の詳細については、すでに第Ⅲ章で指摘したところである。しかし、第5・8・11・12号墳の石室の石材は、比較的小形であり、河原石を多用している特色がある。これに反して、第7・6・13号墳の石室は、側壁についても大形の石材を利用しており、時には割石を用いている点は、やや異質な様相とみられる。発掘はしなかったが、第1号墳の石室も、石材は大形の部類に属し、おそらく第7号墳の石室と同じ特色を示すものと観察された。石室の石材使用の点からいえば、上述のように、長原古墳群は二つのグループに分けられるであろう。そして、石室の全長についても、第7号墳のように7mを超える古墳群の中でより大形のグループは、大形割石を多用した石室例であったことも、注目しておきたい。

これらの石材の大半は、古墳群の東側を流れる保科川に求めたことは明白である。また古墳の築造に際して、より大形の天井石も、周辺の山々から切出したことも、ほとんど疑う余地が

ない。

たびたび指摘してきたように、古墳群の立地する地域が、保科川の扇状地であるがゆえに、現保科川の河床のみでなく、附近一帯の地表面下には、無数の転石が存在することも、ここに積石塚古墳が営造されつづけた大きな理由になると思われる。古墳築造に際して、もっとも容易に入手しうる材料が、土よりも石であったがために、積石塚が生じたということも、あながち否定し去ることはできない。しかし、長原古墳群をも含めて、善光寺平の東縁地域には、圧倒的な量で積石塚が存在している。信濃考古総覧によれば、信濃国全体で積石塚は855基といわれ、埴科郡のみで587基、そのうち大室古墳群が450基という多くの積石塚古墳を擁している。さらに上高井郡下で109基が知られているので、この地域における積石塚古墳の密集度も、おのずから理解されるであろう。かような積石塚古墳の分布は、単に石材の入手が容易であったから、という技術的な側面からの解釈のみでは、この地域の古墳に関しては、理解しえない事実もまた多い。同じ長野県下においても、また他の地方においても、古墳の構築に恰好な石材が豊富に入手できる地域でも、積石塚が生まれぬ場合もある。封土をもりあげた普通の古墳に対して、圧倒的な多数を示すこの地域の積石塚古墳には、好んで墳丘築成に石積みを採用する風潮があったことは否定できない。ことに大室古墳群の北谷・中谷などの急勾配の山麓傾斜面に古墳を築く場合には、積石塚の方がより容易であつたらうし、山丘の岩石もまた身近かにえられたにちがいない。しかし、長原古墳群の場合では、墳丘築成にあたっては、まづ石よりも扇状地の表面をおおう小石まじりの土砂を利用するのが、もっとも容易であつたらう。それにもかかわらず、長原古墳群ではニカゴ塚古墳を含めて、すべての古墳が土砂を混じえぬ積石塚古墳であったことは、注意されなければならない。長原古墳群の中で、どの古墳が最初に築造されたか、われわれの知りえた資料からは明快な結論は生まれない。すでにいくたびか先学達が指摘しているように、この善光寺平東縁地域の古墳の95%は既掘墳であつて、長原古墳群の場合には、調査例すべてが盗掘の厄に遭遇していたのである。しかし、墳丘の規模や横穴式石室の形式から考えて、築造年代に大きな開きがあるとは思われぬし、むしろ各古墳はかなり接近した期間内に築造されたものと考えられる。積石塚の墳丘も、その石材が耕作地の区画用に用いられたりして、原形をとどめる例はほとんどなかった。しかし、土砂を混じえる例が全くなく、積石塚としてはむしろ典型的な古墳群であつたといえるであろう。

長原古墳群の年代

現存する18基の積石塚は、発掘の結果、古墳ではない積石が6箇所も含まれていた。それらを除いた12基の積石塚のうち、今回発掘した7基も、また保存される5基も、内部構造はすべて横穴式石室である。

長原古墳群の横穴式石室は、すでに各担当者により報告されているが、第7号墳の石室が、群中では大形の部に属する。おそらく石室全長は7mを超えるであろう。7号墳以外の諸例でも、玄室長4m前後、羨道の長さを加えると5m乃至6m前後の例がほとんどであった。側壁

の積み方などについても、7・6・13号墳に大形の石材が使用され、横穴式石室としては、長原古墳群の中では整った形態をそなえていた。これらの古墳と比較すると、5・8・11・12号の各古墳の石室は、石材も小形のものが多く、袖石の構築なども幾分簡略化されている傾向がみられる。かかる横穴式石室の構築上の変化が、古墳の築造時期といかなる関係にあるか明瞭でない。もし後者のグループが、石室の簡略化の道程を歩みはじめたものとするれば、より後出的な要素と受とすることもできるが、発見せられた副葬品の内容は、築造時期の先後を決定する資料としては、大きな変化がみとめられず、やや不十分のそりを免れない。

長原古墳群の築造年代を決定する場合、その内容に大きな差があらわれない群集墳であるという点で、古墳時代後期に所属することは、ほとんど間違いないであろう。しかも墳丘の規模は、後世の二次的な変改をうけているため、多少当初より小形化しているとはいえ、直径10m前後、高さ3m前後の小形の積石塚古墳群と推定されるので、築造年代は、古墳時代後期後半に該当するものと思われる。古墳時代を前後の二時期に区分して考えるならば、長原古墳群は、後期Ⅱ期を中心におくことは、ほぼあやまりないであろう。

今回の調査によって、あきらかとなった副葬品は、第5号墳の装身具類・鉄鏡・挂甲小札・刀子・土師器を初めとし、第6号墳では金環を主とする装身具類が発見された。第7号墳は本古墳群中、もっとも規模の大きな石室を有していたが、副葬品として残っているものは、少数の金環・鉄鏡・鉸具と閉塞石の中から発見された須恵器のみであった。とくにこの須恵器の高台付長頸甕と細頸の甕は、器形の諸特徴からかなり後出的な形式と考えられる。東日本の須恵器福年の中でも、終末期に近い例であり、7世紀代終末乃至8世紀代に比定してよいだろう。第8号墳の石室からは、わずかに鉄鏡一例が発見されたにすぎなかったが、この鉄鏡は鋒が片刃筋形態の尖根形式に属し、7世紀代後半乃至8世紀代にまで下降する例と考えられる。第11号墳からは、切子玉・ガラス小玉と羨道閉塞石の上面から発見された山杯がみとめられ、玉類の副葬とこの山杯とは、明らかに年代を異にするものであった。切子玉の特色から推定して、7世紀代に副葬されたものと考えてよいであろう。第12号墳からは、玉類・金環などの装身具類のほか、刀子・鉄鏡などと土師器、須恵器片が副葬されていた。玉類の中でも、切子玉は比較的大形の部類に属し、成形の技法も良好である。土師器には糸切り底がみとめられ、遺物群自体、多少の年代巾を考えねばならない。糸切り痕のある坏の存在から、本古墳の最終段階の埋葬は、8世紀代にまで下降することは、間違いないと思われる。この場合、第12号墳の石室営造の時期は、おそらく7世紀代に求めうるであろうが、数回の追葬を考慮すれば、7世紀代中葉頃に比定してよいと思われる。

長原古墳群の調査で、遺物をもっとも多く出土した古墳は、第13号墳である。第7号墳の石室ほど大きくはないが、比較的良好にプランが確認できた例で全長5.5mを測る。

副葬品はA～F群の6群にわかれて出土している。勾玉16個、切子玉11個、金環15個、管玉6個をはじめ、銅剣2個など豊富な装身具類と、刀子6例、大刀、土師器、須恵器などを含ん

でいる。これらの遺物は、一度の埋葬に伴った副葬品とは考え難く、出土地点が6グループに分かれることや、床面がすくなくとも3層確認されているから、最小3回にわたる埋葬と追葬がおこなわれていたと推定される。その年代はほぼ7世紀代に終始していたと思われるが、須恵器(瓦)が第一回の埋葬に、床面上に捲え置かれたことが、明確であるから、そうすると7世紀後半から、最後の埋葬は8世紀初頭頃までつけられていた可能性もありうる。

以上、われわれが古墳と断定し、副葬品が多少なりとも発見された各古墳の内容を概観し、総括をこころみた。

さらに、ほとんどの石室から人骨が発見されたが、出土状態は良好とはいえなかった。ことに、長い期間にわたって、どの古墳の天井石も持去られているために、石室内が直接風雨にさらされた結果、骨片あるいは骨粉状にくずれ去った例が多かったことは、被葬者の人数を再構成する仕事の障害となっている。

それにしても、東京大学の鈴木尚教授の鑑定により、判明した内容については、各古墳の調査結果の中でふれた次第である。それによると、ほとんどの古墳で最低3体以上の遺骸埋葬がみとめられ、また床面が3層にわたってつくり改められている点は、これら数名以上の埋葬にかなりの期間を考慮すべきことのように考えられる。しかも、各古墳の石室内発見の人骨群は男性および女性と、さらに、年齢層に若干の巾が確認されている点を考えると、同一石室内の埋葬遺骸は、同一家族を追葬していった結果とみるのが、もっとも合理的な見解と思われる。こうした事実は、すでに横穴式石室の性格を規定する強い拠所となっている。その見解は長原古墳群の人骨の出土状態にも、勿論、十分に合致するのであるが、横穴式石室築造後、数体の遺骸埋葬が終焉を告げるまでの期間を、どの位に算定するかによって、また多少異った結果が生ずるであろう。

長原古墳群の中で、最終的な埋葬がいつまでおこなわれていたかという問題については、副葬品とくに、土師器・須恵器の型式から、私は8世紀代後半期までの年代を考えている。これらの土師器・須恵器には、やや特殊な出土状態をしたものもあり、その点では検討を要すると思うが、土師器に関しては国分式土器に該当し、その年代はほぼ8世紀代であろう。しかし、長原古墳群の各横穴式石室の埋葬例は、多少にかかわらず攪乱をうけており、最終段階の埋葬時期を示す最上面の石室床面の副葬品は、ほとんどみとめられないのが実情であった。第13号墳の場合では、比較的多い副葬品がみとめられたが、これらのほとんどは、最下底面の石室床面出土であり、多くの勾玉・金環類は、古墳築造時から、間もない時期の埋葬に伴うものであった。これらの遺物は、従来の古墳研究の内容にてらして考察すれば、7世紀代の中葉ころに比定できるものであり、従って、3回にわたる床面の施設を考慮して、終末を8世紀代の後半期と考えたい理由となっている。おそらく、他の諸古墳も、第13号墳とさして大きな年代の差はないものとする。

しかし、ここで問題となるのは、第11号墳の埋葬人骨の直下から皇宋通宝が一枚出土してい

第V章 長原古墳群の性格

ることである。この宋銭の出土状態は、床面最上層の埋葬人骨の下から発見されたもので、後世の攪乱によって位置を変えたものとは考えられない。この事実を信ずる限り、この人骨は11世紀以後に埋葬されたものとしなければならない。伴出遺物が他にないため、検討の余地がないが、本古墳群における古墳時代の埋葬後、11世紀以降のある時期に至って、この積石塚が保科川扇状地一帯に居住した人々によって、ふたたび墳墓として用いられた結果と思われる。

以上の結果を要約すれば、長原古墳群は西暦7世紀代から形成せられた古墳群であり、最初古墳築造は、おそらく7世紀中葉頃には開始されていたとみられる。これらの横穴式石室は、家族墓としての性格を強く維持しており、順次追葬が展開され、8世紀代にまで古墳への埋葬が行なわれていたと考えられる。その場合、すべての古墳に全期間を通して埋葬がおこなわれたと考えるよりも、やはり順次、年代をへて積石塚が築造されつづけていったとみるのが至当であろう。東国の古墳築造の実態から帰納すれば、長原古墳群の墳丘と石室の構造に関する限り、古墳のあらたな築造は、おそらく7世紀代で終り、以後、追葬がしばらくは行なわれていたものとする。

被葬者の問題

西暦7世紀代から8世紀代にかけて形成された長原古墳群の被葬者達は、いかなる歴史的性格をもっていた人々であろうか。長原古墳群が、とくに積石塚古墳であったという点で、特別な系譜につながる人々、つまり帰化人ではあるまいかという考説は、多くの先学達によって提起されてきた問題である。本古墳群の場合にも、被葬者をどのような階層の人々と規定するか課題は多い。

ところで、積石塚古墳が帰化人の墳墓であったかどうかは、一まずおくとして、長原古墳群の考古学的検証の過程で、非積石塚古墳の内容といちじるしい差異が存在していたかどうかの確認から入りたいと思う。

積石塚という点においては、長野県は全国的にもっとも分布が集中している地方である。しかも大宝古墳群やこの長原古墳群の存在している善光寺平東縁の地域が、もっとも濃密な分布であることも前に指摘しておいた。積石塚とよばれる石積の墳丘が、とくにわが国の古墳の中でも異質的な存在であるとすれば、香川県清尾山古墳、長崎県ツルノヤマ古墳をはじめとする各地の積石塚古墳にも、問題は波及する。ところが、実際には東日本の各地に分布する積石塚が、古文獻に伝える帰化人の動静と、大陸系統であるという積石塚の分布との符合から、積石塚すなわち帰化人の墳墓という考定が、なされてきたのである。仮りに結論がそうであったとしても、考古学的事実の検証と解釈が十分におこなわれた結果でなければ、それは事実にもとずいた論証にはならない。積石塚の築成が、山石や河原石の豊富な地理的な条件も原因の一

注 (6) 後藤守一「瀬戸岡古墳群」東京都文化財調査報告書3 昭和31年
大場啓雄「信濃國坂井村の積石塚に就いて」信濃(第二次) 56号 昭和22年
斎藤 忠「積石塚考」信濃 16巻5号 昭和39年

端になっているとすれば、積土か積石かの差異のみで、特殊な性格の古墳と断定するのは早計と思われる。

大室古墳群では、積石塚とともに土と石の混合による墳丘も、また土塚もたしかに存在しているので、こうした場合の解釈にも、事実に立脚した合理的な論証がなされていなければならないと思う。

墳丘の問題以外に、内部構造と副葬品の内容に被葬者の特性を示す事実が存在するかどうか究明してみる必要があるのではないか。

内部構造は今回発掘した諸例は、すべて横穴式石室であって、一般的な後期古墳のそれと大きな変化はない。ただ、古墳各説の項で触れていることではあるが、玄室の平面プランに胴張りがあるという解釈がなされていることは、注意しなければならない。たしかに奥壁巾と玄室中央部巾と、さらに玄門部巾の比率は、玄室中央部が最大巾を示していることで、胴張り形式とみられぬことはない。しかし、奥壁が一枚石を上下に積み重ねて、その左右に小形の礎を配して、かろうじて奥壁巾を保つ石室構築の方法では、いきおい、奥壁から側壁への移行は、曲線を描くように石積みされることになり、それがまた小形の石材で、袖石をつくり出すための配慮をしているので、側壁がゆるやかに外舞する形態をとるのである。各石室の中でも、とくに12号・8号・5号墳などは、胴張り状の湾曲が顕著であったが、小形の石材を用うることと、限界のある天井石の架構のため、側壁を多少、持送る技法とによって、一層視覚的に表現されているものと考えられる。

副葬品の組み合わせについても、金環・玉類・武器具・土師器・須恵器など、後期古墳出土遺物としては、一般にみとめられる遺物である。ほとんどが盗掘を受けていたので、完全な副葬品の組み合わせはよく分らないが、馬具関係の遺物がきわめて少なかった点が、注意された。比較的副葬品が多く発見された第13号墳の場合でも、これらの遺物が副葬品のすべてとは到底考えられない。しかも最低4体以上の埋葬が知られ、金環2個を1対とすれば、本古墳では7～8名の被葬者が埋葬されたことになる。勾玉16個、切子玉11個、管玉6個、刀子6個という数量は、よくないながらも、追葬の存在を示すかのようである。これらの遺物が数名の副葬品のすべてであれば、個人の副葬品としては、決して豊かな部類にはならないであろう。おそらくこのあり方は、長原古墳群のすべての古墳に共通している現象と見て差支えないであろう。小規模な墳丘、小形の横穴式石室、そして埋葬されていた数名(最低3名以上)は、一家族の追葬による結果と考えれば、第13号墳の最下層床面の装身具類は、決して質・量ともに豊富であったとはいえないと思う。同様の要素が、他の古墳にもみとめられるところに、等質的な長原古墳群の歴史的性格が求められると考える。東国の後期古墳としても、長原古墳群の内容は、むしろ劣っていると見てもよい。それがまた群集墳の強い特性であるから、これらの古墳群は、家父長制家族の家父長を中核とした家族墓群であったと考えられる。また、この小規模な積石塚の築造は1個の家父長制家族の労働力によって、十分に達成できたであろうと思われる。

第V章 長原古墳群の性格

奥壁の鏡石でさえも、槌子やコロの採用で、数名の労働力によって、運搬・架構はなしえたにちがいないであろう。

こうした観点にたつて、長原古墳群の横穴式石室を概観すると、そこには、さらに問題としなければならない事項がある。調査結果の報告においては、われわれは或程度の推定を持ちながらも、決定的論証を欠くことから、強調しないでおいた。それは、第6・7・13号墳と、5・8・11・12号墳の石室規模の比較の問題であった。前者が大形の石を横に2枚並列して、巾約2mの奥壁を施設するに對して、後者は単に1枚石と、その左右にわずかの河原石を付帯させて、巾1m余の狭い奥壁をつくり出しているにすぎないのである。勿論7・13号墳では、側壁の石材まで大形の石を用いている。これにくらべて、5号・8号墳などは小形の石材で石室を構築しており、あきらかに2群の石室がみとめられたのである。ただこの石材使用の差が、時代差なのかあるいは家父長制家族間の優劣の差としてあらわれるものか、その断定はきわめて困難である。横穴式石室の形態上の推移を分析した結果では、規模の大きい、袖石など横穴式石室の伝統的諸要素を強く意図している6・7・13号墳が、より先行の形態ではあるまいかと考える。もし、この観点が支持されるならば、より時代のあたらしいと推定する各古墳築造に要する一家族の労働量は、先行形態とする規模の大きな石室築造の場合の約2分の1にすぎず、そうした労働量の軽減を図るような、石室を築造しなけりなかつた必然性が、あったのであろうか。あるいは、それが家父長層間の階級分化の進展にもとづいて、さらに小さな単位の家族墓となったがために、巾広い大形石室を必要としなくなったのかもしれない。

ところで、長原古墳群を形成した集団は、西暦7世紀代から8世紀代の前半期にかけて、この保科川扇状地を墳墓地域として、彼等の家族墓を営造したのであるが、その長原古墳群中には、積石塚のニカゴ塚古墳が包括されていることはすでに指摘したところである。長野県が実施した遺跡調査の段階では、長原13号墳とされたものがニカゴ塚であるが、今回の調査前に付けられた古墳番号からは、このニカゴ塚は除外されていた。

ニカゴ塚古墳は今回調査した最東南端の古墳から、約200mの地点にあったが、いまは墳丘の痕跡もなく破壊されてしまっている。ニカゴ塚古墳と第1号墳との中間にも3基の積石塚があったらしいが、いまは存在しない。この長原古墳群中、最東南端すなわちもっとも高位に存在していたニカゴ塚古墳の内部構造が、合掌形石室であったことは、すでに岩崎長思氏や森本六爾氏によって紹介されているところである。この合掌形石室と称される特殊な、屋根形の天井石を有する石室については、齋藤博士らによって、いくたびか論述されてきた⁴⁾。そして、それが伝統的な古墳の内部構造から導き出されて出現したのではなく、大陸の墓制、ことに朝鮮・百済の同様の墓制と濃厚な関連性のあることが指摘されている。大陸の墓制がそのままの

註 (4) 註(1)に同じ

(5) 齋藤忠「屋根型天井を有する石室墳に就いて」考古学雑誌 34巻3号 昭和19年

形で受容されているという点では、この合掌形石室はもっとも特徴的な例であると考えられる。かような点で、埴田人墳墓論を展開する際には、合掌形石室こそ墳丘である積石塚よりは、さらにそぐわしい考古学的事実であろうと思われる。この合掌形石室は細部の特色により、4群に分類しうるのであるが、本稿ではこれ以上ふれないことにする。長原古墳群と近い大室古墳群では、約480基の古墳の中で、合掌形石室と確認されたものが22基存在する。未調査の古墳もあるから、将来多少の増加例はあろうが、総古墳数の約20分の1の比率である。つまり20基の古墳について、合掌形石室が1例含まれるという計算になる。勿論大室古墳群における実際の合掌形石室のあり方は、上記のような簡単な算術的な内容ではないが、横穴式石室を主体とする古墳と、合掌形石室を主体とする古墳との、相対的なあり方は、おおよそ理解できるのである。

長原古墳群の復元的考察によれば、当初は18基、もしくは20基を上回ることはなかろうというものであった。とすれば、約20基に近い積石塚古墳の中で、合掌形石室はニカゴ塚古墳(旧長原13号墳)ただ1基であったわけである。すでに破壊された数基については、地元の方々の実見もあり、横穴式石室であったことは、ほとんど疑う余地がない。

この合掌形石室を有したニカゴ塚古墳が、長原古墳群の中で、いかなる歴史的位置を占めるかという問題は、直接的に本古墳群の性格の規定にかかわることである。ところが、今日までに判明している事実は、長さ約2.4m、巾1mの長方形プランの石椁状石室の両側壁から、天井石を合掌形に立てかけた形式であった。この石室方向は北70度東であったから、東北東から西南西に長軸を向けていたといえよう。他の古墳の横穴式石室のすべてが、南に開口していたのとは、対照的である。またこの石室とほぼ併行して、長さ3mの板石2枚を、1.5m巾で併行して並べていたという。合掌形石室の天井石が破壊されたものではないだろうか。一基の積石塚古墳に2個の内部構造があった可能性がつよい。しかし、ニカゴ塚古墳の年代を決定する準拠となるべき遺物はほとんどなく、石室外の積石内から出土した土師器片のみであったらしい。この土師器片の中には、埴・高杯・大形器台が含まれていたという。

上記の内容を示すニカゴ塚古墳の年代を決定することは、きわめて困難であるが、大室古墳群をはじめ、従来あきらかにされている合掌形石室例の所属時期が、古墳時代後期にあることは自明のところであって、西暦6世紀代以降であることは間違いないであろう。ニカゴ塚古墳が長原古墳群の中では特殊な内部構造を持っていることはすでに指摘したが、墳丘の立地条件は、古墳群中もっとも高位置にある。合掌形石室の方向が、ほぼ東西方向を示す点と屋根形天井石が、石室の側壁上端に乗っていることは、合掌形石室としては、先行の形態と思われ、また出土した土師器片の中に、大形器台・高杯・埴を含むという事実に、他の古墳より、やや古い様相をみとめられるようでもある。いまは全く存在しない積石塚のことであるから、無責任な推考はさし控えねばならないが、古墳の立地と石室の方向、形態さらに出土物の様相から考えて、後期古墳としても長原古墳群中では、その形成当初に築造された可能性が高い。私は

西暦6世紀終末頃から、7世紀代中葉までの間に、本古墳の年代を求めたいと考える。

以上の考察に誤りがないならば、ニカゴ塚古墳は長原古墳群の中では、最初に築造された古墳であり、内部構造の特色は、大陸の墓制ことに、輕部慈恩氏によって紹介された韓國忠清南道公州邑錦町発見の百濟時代の合掌形石室と相似たものであったといえよう。もし、信濃国に定着した埴化族に關係の深い古墳として挙げるならば、合掌形石室こそ明確な証跡といわねばならない。

したがって、合掌形石室が埴化人の墳墓の一形式であるとすれば、長原古墳群の形成は彼等の奥津城としての積石塚古墳の築造であったといえるし、合掌形石室がニカゴ塚古墳以外に、採用されていない事実は、埴化人一族の子孫達が、はやくも伝統化した固有の横穴式石室を築造するに至ったか、あるいはニカゴ塚古墳以外の被葬者達は、埴化人の集団ではなく、埴化族と密接な關係を維持していた在来の家父長制家族の集団であったかのいずれかではなかろうか。米山一政氏・下平秀夫らにより調査された長野市若槻・吉古墳群の場合でも、積石塚が44基みとめられるなかで、合掌形石室が2例存在している。吉古墳群でも約20基に1例の比率で合掌形石室が存在している点を見ると、一つの集団内における合掌形石室と、それ以外の内部構造とのあり方に、一定の傾向が存在することである。埴化人達が、彼等の「郷土の習俗の一墓制を採用」した結果とすれば、一古墳群を形成した地域集団内の埴化族と、非埴化族との構成を、あるいは表明している事実かも知れない。かかる問題については、なお多くの実証を必要としなければならないが、問題提起としてとくに注意しておきたい。

(大塚初重)

註 (6) 輕部慈恩「公州に於ける百濟古墳(は)」考古学雑誌 26巻3号 昭和11年

(7) 米山一政・下平秀夫「長野県長野市若槻吉三号古墳調査概報——合掌形石室の諸問題——」信濃19巻4号 昭和42年

第Ⅵ章 信濃の古墳文化と長原古墳群

信濃の古墳文化——特に善光寺平における後期古墳文化の最大の特色は、外部構造としての積石塚の存在と、内部主体としての合掌形石室の分布にある。長原古墳群の信濃における古墳文化上の位置は、これらの特色を含むもので、善光寺平の古墳群として興味深いものである。

信濃における古墳は、千曲川流域と天竜川流域の二つの大きな分布圏を形成している。この二つの大きな分布圏は、対象的な相違を示している。すなわち、前方後円墳の出現の時的な差と、後期古墳群の発達のしかたの違いに原因すると思われる。善光寺平には、現在判明しているだけで、19基の前方後円墳が分布している。これらの内部主体をみると、竪穴式石室、粘土床のみで、いまだに横穴式石室を持った前方後円墳が発見されていない。6世紀前半で消滅していったものと推考されている。これに比較して、天竜川流域の古墳文化は、横穴式石室を内部主体とする前方後円墳が中心で、飯田盆地の南部に発達している。後期古墳に入ると、善光寺平には、積石塚を中心とした古墳群が発達するが、天竜川流域では、前方後円墳を中心とした古墳文化の発達で、「それは、相対するまったく異なった二国をみるようである」と指摘されたように、大きく異った傾向を示している。

長原古墳群の発達した善光寺平の古墳文化の流れの中に、長原古墳群の位置を考えてみると、善光寺平において古墳の築造の開始されたのは、千曲川の中流、善光寺平の南端である。豊かな平野を眼下にする、丘陵上とともに90m台の、川柳、森の2基の前方後円墳が最初のもので、5世紀の前半期が想定されている。この2基は90m台の大型古墳であるが、他の前方後円墳は、小規模でそのほとんどは60m台のものが多く、善光寺平の北部にいくと、40m台の前方後円墳が多く時的にも、新しくなる傾向を感じるが、長野市三才所在の前方後円墳、同じく池の平古墳には片側に造り出しを持つものがあり、立地的にも山頂あるいは尾根に分布するなど前期的な様相を認めざるを得ない。この段階の前方後円墳は、善光寺平の全域に分布している。そしてこれ等の前方後円墳は群集墳とは関連せず、独立墳的な様相を示している。

-
- 注 (1) 『信濃考古総覧』地名表 信濃史料刊行会 昭和31年
 (2) 『信濃考古総覧』信濃史料刊行会 昭和31年
 岩崎卓也他「長野県における古墳の地域的把握」『日本歴史論究』所収、大塚考古学会
 桐原健「善光寺平における古墳立地の考察」信濃 16巻4号 昭和39年
 (3) (2)と同じ
 (4) 藤森栄一「古墳文化の地域的特色—中央高地」『日本の考古学』Ⅲ所収 昭和41年
 (5) 八幡一郎・岩崎卓也「長野県更埴市森符軍塚古墳発掘調査概報」信濃 19巻12号 昭和42年
 (6) 実測による。

第VI章 信濃の古墳文化と長原古墳群

これ等前方後円墳と併行し、竪穴式石室を持った円墳が点在していた。この内には、須坂市鑑塚古墳⁽⁷⁾のように、5世紀前半の積石塚の存在がある。また善光寺平から多少離れるが、東筑摩郡安坂古墳群⁽⁸⁾にも5世紀に入る、積石塚の築造等、善光寺平の古墳文化の発生期から積石塚が分布し、小規模な前方後円墳よりも古い様相を持ち、古墳時代開拓期から積石塚は大きな要素として、後まで中心的な存在であったことを示している。

善光寺平の1300基⁽⁹⁾に近い古墳のうち、学術的な調査の行なわれた古墳は10数基にすぎない。それにも増して空堀による破壊がはげしく、近年信濃考古綜覧地名表、郡誌等によって大体の様相が判明しつつあるが、しかし各古墳に伴う副葬品が不明で、善光寺平における古墳の扁平、性格、社会構造について考察を行う上で、大きな困難を感ずるものである。前述したように少なくとも横穴式石室を持った前方後円墳はなく、横穴式石室は円墳にのみ伴う傾向を示している。ここで一番問題になるのは、善光寺平における横穴式石室の採用の時期である。現在までに報告されている古墳の内では、中野市紫岩古墳等⁽¹⁰⁾が最も古い様相を示している。その年代について6世紀前半を推定されている。善光寺平では、この6世紀の中頃を境に、盆地全域に、特に大室古墳群を中心に群集墳化の様相が現われてきたものと思われる。

前に5世紀前半の積石塚である鑑塚第1号墳、安坂第1号墳の存在についてふれたが、これらと横穴式石室の採用、群集墳となる以前にちょうど空間をうめるように中野市田麦林畔1号墳⁽¹¹⁾、金鑑山古墳⁽¹²⁾のように内部主体を合掌形石室という、この地域にのみ発達した特異な石室と、林畔2号墳、山の神古墳⁽¹³⁾に代表される粗造な粘土床があって善光寺平の古墳文化が、他と比較して異なる様相を持っていることを示している。これらは6世紀前半に位置し、盆地全域に古墳築造が活発化してくる時期であろう。そして新しい古墳文化が感じられ、次の群集墳の形態に発展していく段階であろう。ここで指摘されるのは現在の資料では、善光寺平においては横穴式石室採用以前に合掌形石室が発生していること、しかも積石塚古墳でなかったことに注目しておきたい。発掘資料でなく、報告がなされていないが、これら6世紀前半期に入るもの、あるいはこれよりも古くなる様相を持った、竪穴式石室を内部主体とする積石塚の存在がある。大室古墳群についても67基の竪穴式石室のうち外部施設を積石塚とするものは、43基に達する。その他にも長野市東条古墳群の王塚古墳、菅間所在古墳は、竪穴式石室を内部主体とし、大刀・刀子・切子玉・鉄鏃・土師器が出土している⁽¹⁴⁾。

(7) 永峯光一・亀井正道「長野県須坂市鑑塚古墳の調査」考古学雑誌 45巻1号 昭和34年

(8) 大場磐雄他「長野県東筑摩郡安坂井村安坂積石塚の調査(1)(2)」信濃 16巻4・6号 昭和39年

(9) (1)と同じ

(10) 長野県教育委員会編「下高井」昭和28年

(11) 09と同じ

(12) 森本六彌「金鑑山古墳の研究」大正15年

(13) 09と同じ

(14) (1)と同じ

前方後円墳と併行し、これら竪穴式石室を内部主体とする古墳が、大室古墳群を中心とし、点在していたものと思われる。大室古墳群は、他の古墳群よりも一歩早く群集墳的な様相を示し、絶対的な積石塚の存在と竪穴式石室、横穴式石室、合掌形石室、組合式石棺と内部主体もバラエティーにとみ、善光寺平の古墳文化に大きな影響をおよぼしたと思われる。善光寺平に発達した積石塚は大室古墳群を中心に、5世紀前半から古墳時代終末まで長期にわたって築造され、善光寺平の開拓に大きな要素を持っていたと考えられる。

横穴式石室の出現以前に発生し、積石塚と深い関連を持ち、この地方にのみ分布を持つ合掌形石室は、善光寺平における古墳文化の様相を知る一つの要因になる。かつて下平は合掌形石室の問題にふれたことがあるが、合掌形石室にも数種の型式が認められ、6世紀前半から7世紀の終末に至るまで、かなりの時期にわたって築造されてきたと推考した。大室古墳群の22基という集中的分布以外は、一古墳群に1～2基という分布を持つこと、必ずしも積石塚を外周施設としないが、古墳群との関連をみると、大きな意味を持つものであろう。

善光寺平の古墳文化にあって、横穴式石室の発生から群集墳化への時期は非常に変化に富んだ古墳文化を表わしている。そこには、被葬者の問題とか、社会構造とか複雑な様相の現われであろう。

長原古墳群の築造が6世紀後半から7世紀にかけての時期であるとすれば、善光寺平の他の古墳群との関連をみると、2～3の問題点が提示される。善光寺平に分布する古墳は1300基前後である。その内積石塚は440基である。他に土石混合墳といわれる積石塚との関連で考えられている一群が、323基ある。残りは一般的な盛土墳である。

信濃は全国的にも積石塚の多い地域で、特に、千曲川流域の善光寺平は発達した地域であることは周知である。積石塚の分布は限られ、440基のうち330基は大室古墳群に集中し、他もこれに続いた千曲川の右岸—河東山塊といわれる、高山・埴科・松代・寺尾・保科の扇状地に分布が集中している。他の千曲川の左岸—長野近辺に少しの分布をみる他は、散在的な分布を示している。また善光寺平の古墳文化のうえで問題になるものは、土石混合墳といわれる一群で、多くの研究者は積石塚の一形態とされている。これを含めると、善光寺平の古墳の80％は積石塚の類に入ってしまうことになる。この土石混合墳について、古くから大室古墳群の調査をされてきた栗林紀道氏は、積石塚を4分類されて、

- ① 石塊のみによって築かれたいわゆる積石塚
- ② 内部は土であって上部を石塊で覆ったもの
- ③ ②の逆の場合である内部が石塊で表面を上で覆ったもの

注 09 米山一政、下平秀夫「長野市若槻吉三号古墳調査概報」信濃 19巻4号 昭和42年

08 (1)と同じ

07 (1)と同じ

06 (1)と同じ

④ 石塊に土を混えたもの

とし、②、③、④を通称土石混合墳とよんでいる。古墳の外部施設は表面的な観察のみではその判定は困難に近い。善光寺平における積石塚の問題はこの土石混合墳とよばれる一群の性格について説明されなければならない。この土石混合墳は、積石塚よりも分布は広く、善光寺平一円に分布し、一古墳群中に積石塚、盛土墳とともに併存する。また内部主体にもバラエティに富み、合掌形石室を内部主体とするものもあって、その性格は決定できないものがある。

善光寺平における積石塚は440基前後である。その内330基は大室古墳群に集中し残りの100基も千曲川東岸の大室古墳群の近辺に多い。現在までに判明している資料でこれらを内部構造から分類してみると、竪穴式石室50基、横穴式石室約80基、合掌形石室27基、組合式石室7基である。このうちの大部分は大室古墳群が占めているが、他の古墳群についてみると一古墳群に1～2基程度しか内部構造が判っておらず、副葬品まで知れるのは、ほんの一部である。横穴式石室は割石を利用した両袖形のものが多い。他の内部構造の不明なものも、横穴式石室を予想されるものがある。

長原古墳群は6世紀後半から7世紀にかけての積石塚を中心とし、消滅したとはいえないカゴ塚古墳という合掌形石室を含んだ古墳群である。善光寺平における他の古墳群を比較してみると、集中的な群集化を示す大室古墳群の480基という大古墳群を例外とし、長野市若槻の吉古墳群の90基がこれに続くが、東埴市の杉山古墳群の22基、同矢の口古墳の13基、長野市松代町関屋古墳群13基、宮崎古墳群17基、桑根井古墳群10基、東条古墳群10基が多く、他は10基以下の群集化である。このうちで関屋、宮崎古墳群はほとんど破壊され様相は不明である。古墳群の質的な意味で検討してみると、大室・吉・杉山・桑根井・東条の古墳群は外部構造として積石塚、盛土、土石混合墳が併存し、内部主体として特徴的な合掌形石室の存在することが共通点としてあげられる。このうちで吉古墳群を例外として竪穴式石室が発見され、横穴式石室を中心とした、成層的な古墳群が想定される。積石塚と関連ある古墳群では、須坂市鑑塚古墳群、東筑摩郡安坂古墳群でも同様な傾向がみられた。これらは前期から積石塚と関連を持ち、横穴式石室の採用された後も、積石塚を外部施設とする一つのグループがある。長原、吉古墳群は5世紀代に入る。古墳がなく、後期古墳群の段階に入ってから発達を始めた古墳群である。このうちでも長原古墳群は、積石塚ばかりで、純然たる盛土墳の存在がなく、この点でも特色ある古墳群であろう。また各古墳群をみても、積石塚、土石混合墳、盛土墳ともに併行的に築造されてきたことが推定される。

これらの要素の内に積石塚の被葬者の性格に特別な意味が予想される。

注 ①) ②と同じ
 ②) ①と同じ
 ③) ②と同じ
 ④) ①と同じ

善光寺平の積石塚をみると、大部分は自然石を用いたものであるが、鎧塚1、2号墳が河原石を用いている。他にも長野市新諏訪町所在古墳も河原石による積石である。しかし長原、大室古墳群において、敷石に河原石を使用したのが認められ、石材の利用にもかなり複雑な様相を持っている。

これら積石塚を中心とした古墳群の立地をみると、山麓に立地するものが多く、この内でも保科川扇状地の中央に発達した長原古墳群は例外的な存在である。大室古墳群についても、千曲川の蛇行によって、当時とかなり地形的に変化があったと思われ、土師器・須恵器の分布——当時の集落の復原を行なわなければ、この立地の点も判明しないものと思われる。立地について、保科川扇状地にあっては、長原古墳群、白塚古墳群をはじめ積石塚と関連する古墳群は扇状地状に発達した。また鎧塚1、2号墳、桑根井古墳群にも同様の傾向があった。しかし大室・吉・杉山・矢の口・東条を始めとし、他の散在的な分布を示す積石塚は、山麓部に立地し、保科川扇状地の積石塚の立地と、別の傾向を感じさせる。

これら立地と関連して、先学から積石塚と牧の関係を含めて埴化人の問題を提起されてきた。籠かに、合掌形石室、文献上の徴証、古墳群と立地、特に水田との関連から経済的な面について、また、大室・高井・吉田とか牧名と古墳群との関連性から、文化的影響を考えなければならぬ。しかし何回も指摘してきたように、古墳群全体について、積石塚について判明しているものは限られた状態である。長原古墳群において始めて、積石塚の構造、それに古墳群の様相についての契機を持ったにすぎない。それにしても、善光寺平の古墳文化の考察を行う時、あまりにも破壊が行なわれ、調査例も少なく資料の欠除から、あくまでも推定の域を脱しえない。とりわけ、信濃の積石塚の場合、内部構造、文献上から大陸埴化人と関連を考えざるを得ない点も多い。これまでも指摘してきたように、これらを含む善光寺平の古墳文化の様相、また古墳群の外部構造、内部主体も非常に複雑に関連しあっていて、これからの研究にまちたいと思う。また各地の積石塚墳、古墳群との相対的な関係についても考えるべきであろう。最近、解明されつつある、川柳、森の將軍塚古墳を始めとする前方後円墳の編年の事と、これら積石塚の発生から発展期の様相についても、当時の信濃における政治的社会的について解明されなければ、積石塚の問題、特に埴化人を含めた被葬者の性格について明確にしない。

さらに密度の高い、統一的な調査によってこれらの問題の展開も可能になると思う。

(大塚初重・下平秀夫)

④ (7)と同じ

④ 実査による

④ 例えば一志茂樹「信濃と越とを結ぶ古代の幹路」信濃 15巻10号 昭和38年
大場啓雄 註(8)と「信濃浅間古墳」東筑摩郡本郷村教育委員会 昭和41年
藤森栄一 註(4)
斎藤忠「積石塚考」信濃 16巻5号 昭和39年

第Ⅶ章 結 語

長原古墳群の調査の結果、その形成された年代を西暦46世紀末葉から8世紀中葉前後と推定した。一部の古墳では、最終的な石室への埋葬が、9世紀代にまで降る可能性もある点にもふれておいた。しかも、われわれの経験では、開墾や耕作がおこなわれていた扇状地上の積石塚は、現代における二次的な積石塚がかなりあるという事実と、その反対に天井石などの石材採取を目的とする積石塚の完全な消滅もあることであった。それ故に、古墳群の構成を究明する場合の障害になっていることも事実である。幸い長原古墳群の調査では、保存する古墳をも含めて、かなり詳細に観察することができた。

その結果、いまは姿を消したニカゴ塚古墳が、他の諸古墳との対比から、そしてまた合掌形石室という特異な内部構造の分析から、大陸系帰化人の墳墓と推定した。そのため、ニカゴ塚と他の古墳との関係が問題となるが、帰化人の後裔達の集団も、比較的早い時期に同化して、後期古墳の一般的埋葬形態である横穴式石室の採用に踏みきったものであろう。もし、そうではないならば、帰化人の墳墓と確定できるのは、ニカゴ塚古墳のみであり、おそらく特殊な技術者集団として移住してきた帰化族と接触し、その技術的系譜を受ついで在地の集団に、関係ある墳墓とみなしてよいであろう。

さて、長原古墳群をのこした集団の生活手段は、いかなるものであったろうか。この課題にせまる研究方法として、われわれは善光寺平の東縁地域古墳群の全体像の中から、真の姿相を把握しなければならないと考えるが、約500基におよぶ大室の大古墳群の考古学的究明もいまだ十分とはいえない段階である。われわれの予察では、長原古墳群の近距離にある大室古墳群の中には、あきらかに長原古墳群に先行する整った横穴式石室墳が相当数あり、大室古墳群が形成されつつあった過程で、おそらくは西暦7世紀代に入ってから保科川扇状地に墳墓地域が設定されるものとする。したがって、この段階に多くの群集墳が、小文群として各地域に生成されはじめたと考えられ、善光寺平の東縁地域の一拠点であった大室地域の社会は、この時期に一段と階層分化が進展していったのではないかとと思われる。それが急激な古墳群の増加となってあらわれたものであろう。

この地域の積石塚古墳の出現は、須坂市鍾塚古墳¹⁾によって、5世紀代にまでさかのぼることがあきらかである。あるいはまた中野市新野の金鐘山古墳のごとく、合掌形石室例として、6世紀前半に比定しうる例があり、大陸系統の墓制が5・6世紀頃から出現している事実を知るのである。これらの古墳が帰化人の墳墓であったとすれば、すでに5世紀代から6世紀代に

註 (1) 永峯光一・亀井正道「長野県須坂市鍾塚古墳の調査」考古学雑誌 45巻1号 昭和34年

第Ⅵ章 結語

かけて、この地域に帰化人の集団が住みついていたことが確実である。しかし、彼等は何を生活の基盤としていたのであろうか。大室古墳群のみでも概数約500基という多数の群集墳を生み出した社会の基盤は、たんなる小地域範囲の農耕生産のみでは、維持しえなかったことであろう。延喜式に見える大室・高井・笠原などの官牧の名は、その前代からすでにこの地域において、馬匹の生産が展開されていた可能性の濃い証明となろう。千曲川が形成した氾濫原に望む、ゆるやかなスロープをもつ扇状地形は、荒地として農耕には必ずしも適地ではなかったが、牧場として軍馬の飼育には、恵まれた環境にあったものと思われる。後代になって、信濃国にはさらに多くの官牧や私牧が設けられたが、西暦5・6世紀代以降、この地域が早くもこうした馬匹生産地として、大和政権の重要視するところとなっていたことは、十分ありうることであろう。そうした国家的な要請を貫徹せんがために、騎馬の飼育と牧場経営に長じていた帰化系の人々が、東国とくにこの信濃に多く送りこまれたにちがいない。このように、大和政権の軍事力を保持する役割の一翼を担った集団の規模や、経営していた官牧の地域は、かなり大きく、範囲も広がったことが推察される。そうでなければ、短期間に、しかも一地域に500基もの大古墳群を、形成しうる基盤とはなりえなかったのではないだろうか。

倭名類聚抄によれば、高井郡中に四郷が記されており、その中に穂科郷の名が見える。穂科は現在の保科および川田を含めた範囲であることは、あきらかである。したがって、長原古墳群をのこした人々も、この穂科郷の先駆的な中核体であったろうことも、十分に首肯できるのである。そして、長原古墳群のみでなく、大室古墳群や周辺多くの古墳群の被葬者達も、彼等すべてが大陸帰化系の人々に限定されていたのではなく、馬匹生産や軍馬の調教に熟達した帰化人とともに、彼等から数々の技術や経営法を学んだ、古墳時代人の参加をみとめなければならないだろう。この地域の古墳群が、積石塚古墳のみでなく、伝統的な土塚や、内部構造にも同時代に幾多の変化を示していることは、その間の事情を物語っていると考えられるのである。

また帰化人の系統について、高句麗系帰化人を考える大場磐雄博士らの立場と、百済系帰化人の参加をも求めようとする斎藤忠博士らの考説とが提起されている。積石塚の葬法や、古文獻記載の高句麗系の人々の登場を、限定的な資料とするか、あるいは合掌形石室の系譜が、確実に百済の墓制に結びつくことで、百済系帰化人とするかの差である。古代日本における帰化人の専門的な技術の到来は、きわめて多岐にわたり、かつ長期におよんでいる。高句麗系の帰化人のみでなく、百済系帰化人も、この信濃国に派遣されてきたことは、ほとんど動かしがたい事実であろう。とくに長原古墳群の場合に限定すれば、私は合掌形石室の採用を重視し、系統としては百済系の帰化人をニカゴ塚古墳の被葬者と考定したいのである。ニカゴ塚の出現以後、この地に形成された長原古墳群の諸古墳は、積石塚であるということを除いては、横穴式

註 (2) 大場磐雄他「長野県東筑摩郡坂井村安板積石塚の調査(1)(2)」信濃 第16巻4・6号 昭和39年
大場磐雄・原嘉藤・金谷克己「信濃浅間古墳」東筑摩郡本郷村教育委員会 昭和41年

(3) 斎藤忠「積石塚考」信濃 第16巻5号 昭和39年

石室・副葬品の点からも、それが婦化人の墳墓と断定する考古学的事実を示していない。

積石塚それ自体も、地理的な環境を第一義に考えれば、決して特殊な墳丘と決めつけることも困難であろう。私は、それらの各古墳が、婦化人の墳墓と考定したニカゴ塚古墳と、全く無関係に同一古墳群を形成したとは考えない。あるいは同族集団の墳墓であったかもしれぬし、たんに技術的系譜を背った、古墳時代人の家族集団の墳墓であった可能性もある。この結果はなお今後の周辺古墳群の調査と、示された事実の分析に立脚して、あきらかにされねばならないと思う。

(大塚初重)

おわりに

本古墳群の発掘が終わったばかりの昭和42年4月、藤森栄一先生や樋口昇一氏などから、ぜひ報告書を書くようにとの依頼を受けた。私自身、学生時代に恩師後藤守一先生の指導のもとに、大室古墳群の発掘や測量に従った思い出があり、積石塚の正式調査報告が、思いのほか少いことを知っているのので、喜んでお引受けすることにした。ところが、私は大学からの在外研究員を任命されて、同年春から約1ヶ年近く欧州・中近東にあって、長原古墳群の報告書のごことは、ほとんど念頭を離れてしまったといってよい。まことに藤森先生方のご厚意に対して申訳ないことであった。帰国した本年春、ふたたび報告書刊行の意向をきかされ、しかも、松本市で開催される日本考古学協会の大会に、間に合わせる計画であることを知り、大いに悩んだ。さいわい私の渡欧中に、研究室の小林三郎講師をはじめ、調査に関係した学生諸君が、遺物整理や実測などを献身的な努力で果たしてくれていたのである。こうした協力と援助がなければこの報告書はまだまだ鵬の目を見るには至らなかったであろう。

それにしても、原稿はおくれにおくれてしまい、編集の樋口昇一氏には多大のご迷惑をかけることになった。ここに刊行の機会を与えられた藤森先生をはじめ、長野県考古学会に対して深甚なる感謝の意を表したいと思う。

終りに、われわれの調査開始から今日まで数々のご指導とご配慮をいただいた杉原在介教授と、またお世話になった長野市教育委員会当局、長野県教育委員会指導主事林茂樹氏、地元若穂地区、の関係者各位にあつく御礼申し上げたい。

1968年9月

明治大学考古学研究室

大塚初重

積石塚・合掌形石室関係主要参考文献

(昭和43年8月)

1. 佐藤勇太郎「讃岐高松古跡」 東京人類学会報告 2巻12号 明治20年
2. 坪井正五郎『日本の「積石塚」』 東京人類学会雑誌 15巻169号 明治33年
3. 坪井正五郎「ケールンに就て」 東京人類学会雑誌 15巻165号 明治33年
4. 原秀四郎『陸前の積石塚』 東京人類学会雑誌 16巻184号 明治34年
5. 大野雲外「ケールンに就て」 人類学雑誌 27巻3号 明治44年
6. 関野貞「満州輯安県及び平壤附近に於ける高句麗時代の遺蹟」 考古学雑誌 5巻3号 大正3年, 5巻4号 大正3年
7. 笠井新也「石塚の研究」 人類学雑誌 32巻1号 大正5年
8. 後藤守一「対馬警見録(2)」 考古学雑誌 13巻3号 大正11年
9. 唐沢貞治郎・岩崎長思『鎧塚古墳』 長野県史蹟名勝天然記念物調査報告第一輯 大正12年
10. 笠井新也「阿波に於ける石塚及び方状石籬」 考古学雑誌 14巻2号 大正12年
11. 匹田直等『阿武郡見島文化の研究』 山高郷土史研究会考古学研究報告書
12. 三輪善之助「長門見島の遺蹟」 考古学雑誌 14巻3号 大正12年
13. 矢沢頼道「屋根型天井の石郭を有するケールン」 長野県史蹟名勝天然記念物調査報告 第二輯 大正13年
14. 高橋健自『鍔鉾銅剣の研究』 大正14年
15. 岩崎長思「金鎧山古墳」 長野県史蹟名勝天然記念物調査報告 第五輯 大正15年
16. 森本六爾『金鎧山古墳の研究』 大正15年
17. 岩崎長思「和栗古墳」 長野県史蹟名勝天然記念物調査報告 第九輯 昭和3年
18. 仁科義男「大塚古墳」 山梨県史蹟名勝天然記念物調査報告 第5輯 昭和6年
19. 梅原末治『讃岐高松石清尾山石塚の研究』 京都帝国大学文学部考古学研究報告 第12冊 昭和8年
20. 笠井新也「讃岐国石清尾山の石塚に就いて」 考古学雑誌 23巻12号 昭和8年
21. 後藤守一「積石塚の問題」 考古学雑誌 23巻12号 昭和8年
22. 後藤守一「積石塚及積土塚」 世界歴史大系 第2巻 『東洋考古学』所収 昭和9年
23. 宮坂次次「信州松本地方の古墳」 人類学雑誌37巻5号 大正11年
24. 山本博「長門国見島村の弥生式遺跡と古墳出土遺物」 考古学雑誌 25巻8号 昭和10年
25. 軽部茲恩「公州に於ける百濟古墳(4)」 考古学雑誌 26巻3号 昭和11年
26. 池内宏『通溝』上巻 昭和13年
27. 栗岩英治「大化前後の信濃と高句麗遺跡」 信濃 次7巻5・6号 昭和13年

28. 栗岩英治「鬼神堂址及野沢積石塚址」 長野県史蹟名勝天然記念物調査報告 第二三輯 昭和18年
29. 梅原末治「関東州史前文化所見」 『東亜考古学論叢』1巻所収 昭和19年
30. 醉古生(栗岩英治)「一墳双在の合掌石棺」 信濃1次3巻12号 昭和9年
31. 斎藤忠「屋根型天井を有する石室墳に就いて」 考古学雑誌 34巻3号 昭和19年
32. 小野勝年『下高井』長野県教育委員会 昭和28年
33. 大場磐雄「信濃国坂井村の積石塚に就いて」 信濃 Ⅲ次56号 昭和22年
34. 大場磐雄「信濃国の古墳群とその性格」 上代文化 第21輯 昭和26年
35. 東亜考古学会『対馬』 昭和28年
36. 大塚初重『武蔵瀬戸岡における奈良時代墳墓』 駿台史学3号 昭和28年
37. 大塚初重「長野県埴科郡大室古墳群の性格」 日本考古学協会第15回大会研究発表要旨 昭和30年
38. 後藤守一『瀬戸岡古墳群』 東京都文化財調査報告書 第3集 昭和31年
39. 瀬見浩「山陽地方における弥生時代の墓制」 古代学8巻2号 昭和34年
40. 永峯光一・亀井正道「長野県須坂市鍾塚古墳の調査」 考古学雑誌 45巻1号 昭和34年
41. 水野清一・小林行雄編『図解考古学辞典』 昭和34年
42. 森貞次郎「宮崎県遺跡誌」 『日本農耕文化の生成』 (本文編) 所収 昭和36年
43. 尾崎喜左雄「群馬県発見の積石塚」 信濃 Ⅲ次13巻1号 昭和36年
44. 大塚初重「信濃大室古墳群」 古代学研究—後期古墳の研究 第30号 昭和37年
45. 日本考古学協会編『日本考古学辞典』 昭和37年
46. 米山一政「長野市上松池ノ平古墳」 プリント
47. 桐原健「諏訪盆地古墳群にみられる一姿相」 信濃 Ⅲ次16巻10号 昭和39年
48. 桐原健「善光寺平における古墳立地の考察」 信濃 Ⅲ次16巻4号 昭和39年
49. 斎藤忠「積石塚考」 信濃 Ⅲ次16巻5号 昭和39年
50. 大場磐雄他「長野県東筑摩郡坂井村安坂積石塚の調査(i)」 信濃 Ⅲ次16巻4号 昭和39年
51. 大場磐雄他「長野県東筑摩郡坂井村安坂積石塚の調査(ii)」 信濃 Ⅲ次16巻6号 昭和39年
52. 斎藤忠・小野忠熙『見島古墳群』 見島総合学術予備調査概報 山口県教育委員会・萩市教育委員会 昭和40年
53. 小野忠熙「山口県萩市見島古墳群」 日本考古学年報 14巻(昭和36年度) 昭和41年
54. 大場磐雄「積石塚について」 『信濃民間古墳』 所収 昭和41年
55. 米山一政・下平秀夫「長野県長野市若槻吉三号古墳調査概報—合掌形石室の諸問題—」 信濃 Ⅲ次19巻4号 昭和42年

(大塚初重編)
村田佳名子



1. 長原古墳群の全景（東北側より）



2. 長原古墳群の全景（西南側より）



1. 第一号墳の全景



2. 第二号墳の全景



1. 第四号墳の全景



2. 第四号墳，内部主体の残欠



1. 第五号墳の全景



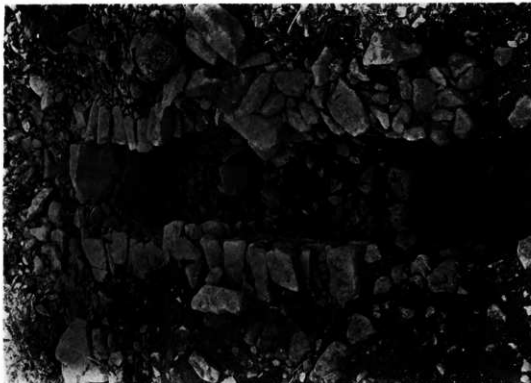
2. 第五号墳・石室の遺存状況



1. 第五号墳の石室全景 (I)



2. 第五号墳の石室羨道閉塞



1. 第五号墳の石室全景 (2)



2. 第五号墳の石室全景 (3)



1. 第五号墳・石室内における副葬品の出土状況 (I)



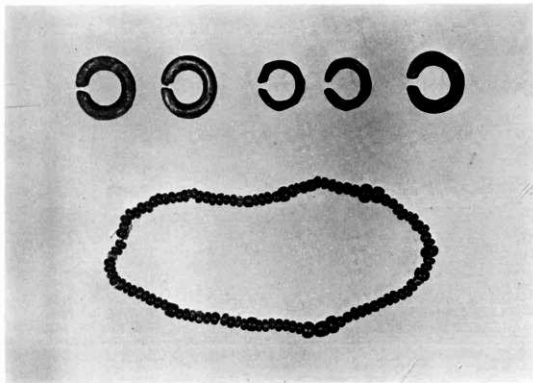
2. 第五号墳・石室内における副葬品の出土状況 (2)



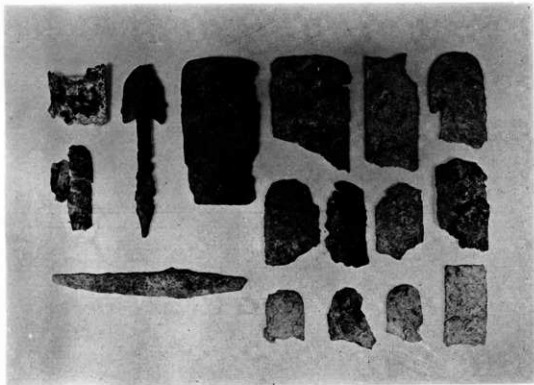
1. 第五号墳・石室内における副葬品の出土状況 (3)



2. 第五号墳・石室内における副葬品の出土状況 (4)



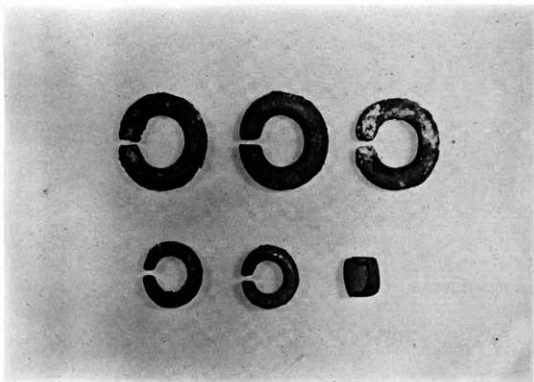
1. 第五号墳出土の金環および小玉



2. 第五号墳出土の大刀黄金具、鉄鍔、刀子および鉄小札一括



1. 第五号墳出土の土師式土器(坏)



2. 第六号墳出土の金環および霰玉



1. 第六号墳の全景



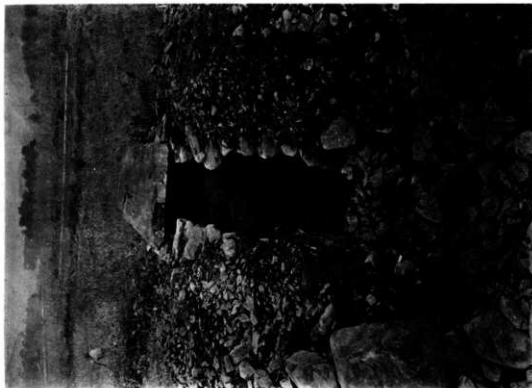
2. 第六号墳の石室遺存状況



1. 第七号墳の全景



2. 第七号墳、発掘前の石室の状態



1. 第七号墳の石室（玄室）全景



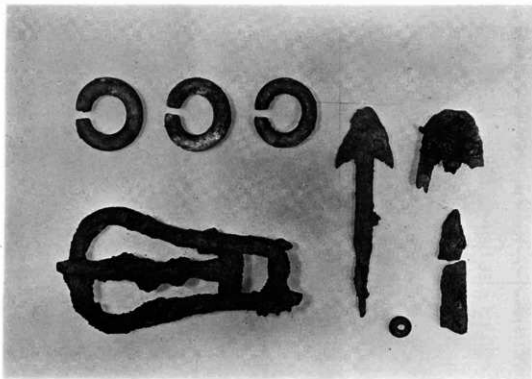
2. 第七号墳・石室の側壁と奥壁



1. 第七号墳石室玄室より玄門と閉塞状況を見る



2. 第七号墳・石室内における副葬品の出土状況



1. 第七号墳出土の金環、鉄劍、袴帯金具および小玉



2. 第七号墳出土の須恵器（長頸壺）



3. 第七号墳出土の須恵器（壺）



1. 第八号墳の全景



2. 第八号墳の石室遺存状況



1. 第十一号墳の全景



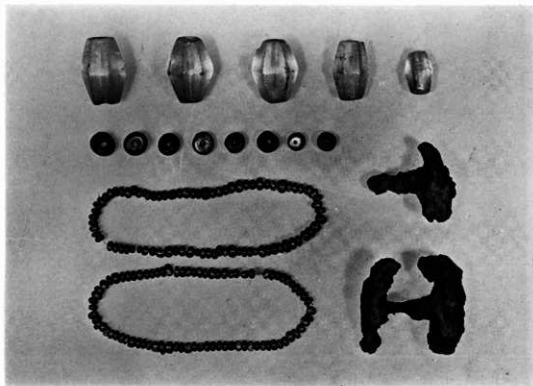
2. 第十一号墳の墳頂の状態



1. 第十一号墳の石室 (1)



2. 第十一号墳の石室 (2)



1. 第十一号墳出土の切子玉、小玉および用途不明鉄器



2. 第十一号墳出土の須恵器（勾台付坏）



1. 第十二号墳全景



2. 第十二号墳の墳頂の状況



1. 第十二号墳の石室 (1)



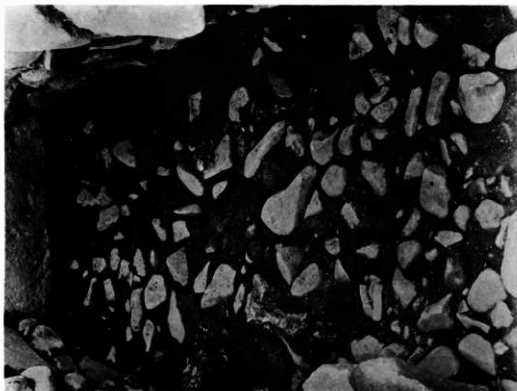
2. 第十二号墳の石室 (2)



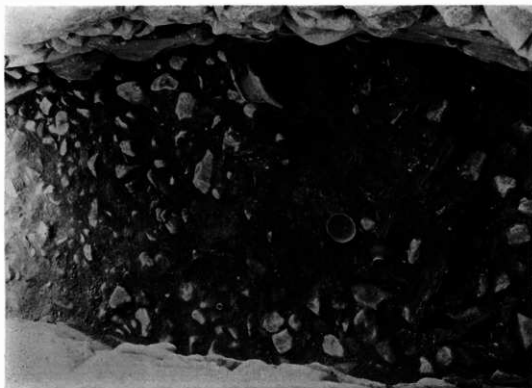
1. 第十二号墳の石室 (3)



2. 第十二号墳の石室構築状態



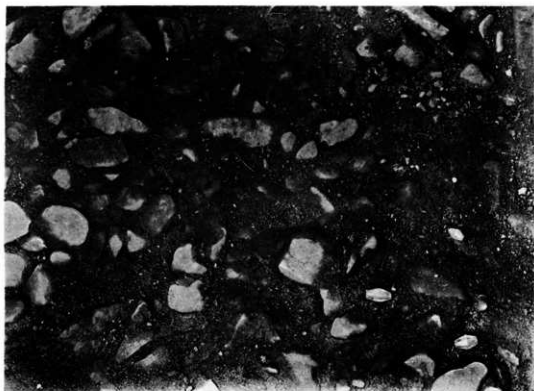
1. 第十二号墳石室内における副葬品の出土状況 (1)



2. 第十二号墳石室内における副葬品の出土状況 (2)



1. 第十二号墳石室内における副葬品の出土状況 (3)



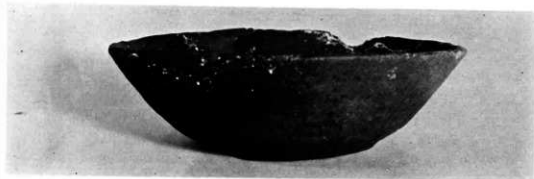
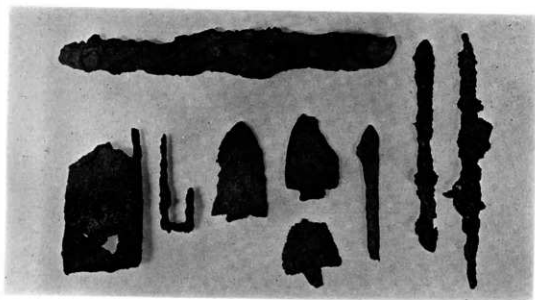
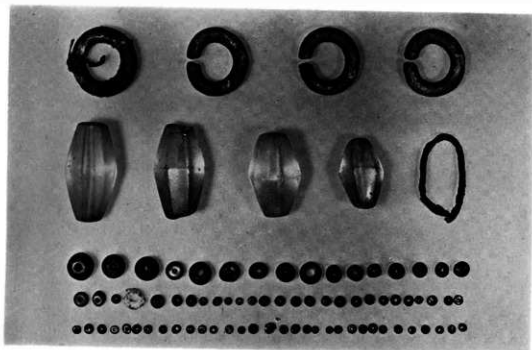
2. 第十二号墳石室内における副葬品の出土状況 (4)



1. 第十二号墳石室内金環出土状況 (1)



2. 第十二号墳石室内金環出土状況 (2)





1. 第十三号墳の全景



2. 第十三号墳発掘前の石室遺存状況

1. 第十三号墳の石室 (1)



2. 第十三号墳の石室 (2)



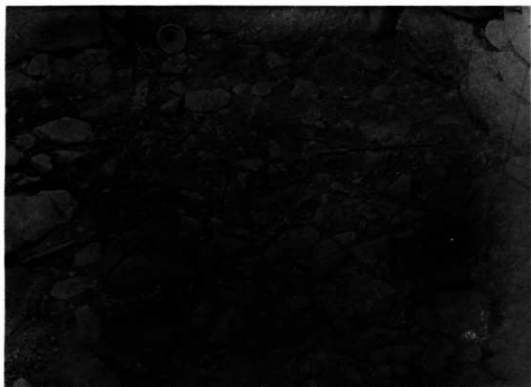
1. 第十三号墳の石室 (3) (南から)



2. 第十三号墳の石室 (4) (北から)



1. 第十三号墳石室内における副葬品出土状況 (1) 玄門より奥壁をのぞむ



2. 第十三号墳石室内における副葬品出土状況 (2) 奥壁付近の状況



1. 第十三号墳石室内における副葬品出土状況 (3) 奥壁付近の細部



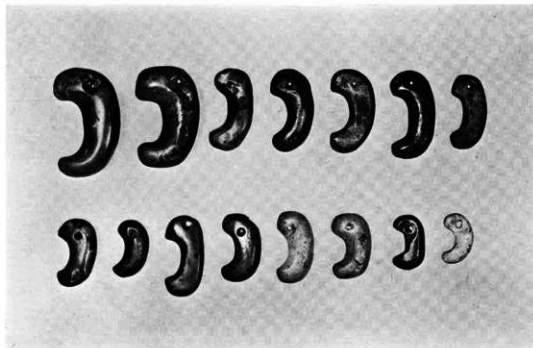
2. 第十三号墳石室内における副葬品出土状況 (4) 奥壁付近西側壁細部



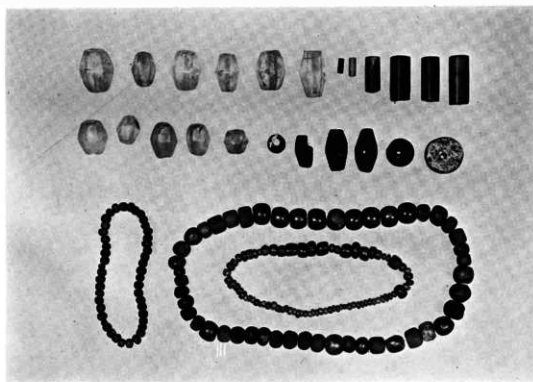
1. 第十三号墳、石室の構築状態 (1)



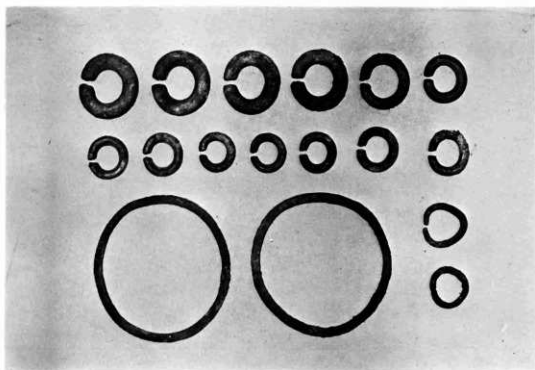
2. 第十三号墳、石室の構築状態 (2)



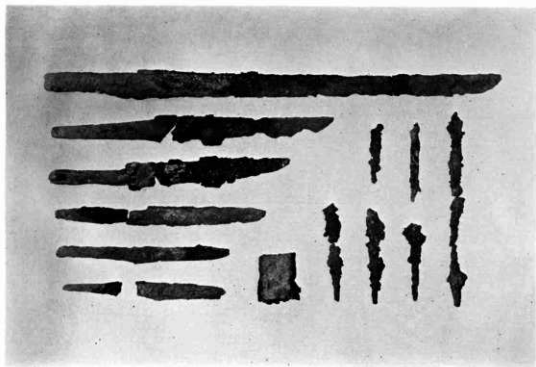
1. 第十三号墳出土の勾玉



2. 第十三号墳出土の切り玉、管玉、霽玉および小玉類



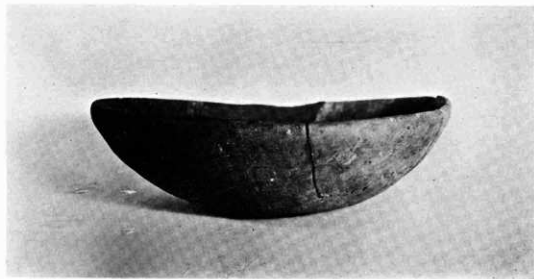
1. 第十三号墳出土の金環および銅銅



2. 第十三号墳出土の刀子、鉄鏃および刀鞘尻金具



1. 第十三号墳出土の須恵器 (瓦葺)



2. 第十三号墳出土の土師式土器 (杯)



1. 第十四号墳の現状全景



2. 第十六号墳の現状全景

跋

近年都市開発の進歩は目覚ましいものがあります。農地改善はもちろん、住宅用地の建設あるいは道路新設など原野、山地、農地は著しく変貌しています。

開発にあたって心すべきは、自然の景観を損わないこと、自然の資源を保全すること、そして、私たち民族の生活の跡を存置することにあります。こゝに心を配りでき得る限りの措置をとらないならば、これらの資源財産は永久に私たちの手にかえらないのです。長野市でも古い墳跡をめぐっての問題が二、三でおります。こんど発掘調査を行いました長原古墳群がそれです。

こゝには県企業局によって住宅団地ができました。古墳群をそのままの形で存置するのは色々な関係から残念ながら難しく、記録保存を行う以外になかったわけです。

幸い、長野県企業局のご理解により非常な成果を収め得ましたことに対し感謝申し上げます。

また、この報告書を刊行するに当り、明治大学教授大塚初重氏ら諸先生方にご助力を賜りましたことを心から厚くお礼申し上げます。

この報告書は今後考古学上の資料として、文化財保護の立場から十分ご活用されるよう期待いたします。

昭和43年10月10日

長野市長 夏 目 忠 雄

信濃・長原古墳群

— 積石塚の調査 —

長野市若穂長原古墳群緊急発掘調査報告

昭和43年10月20日印刷

昭和43年10月25日発行

著者 大塚初重
小林三郎
下平秀夫

発行者 長野市教育委員会
松本市清3-10-53

印刷所 KK 明文社